

# 第10回RYLAセミナー報告



ROTARIANS—UNITED IN SERVICE  
DEDICATED TO PEACE

# もくじ

発刊によせて

R Y L A 10周年を迎えて	今井 鎮雄	1
R Y L A 所感	萩原 茂	3
蒔かれた種の開花を願って	内藤 尚武	5
ライラに期待する	辻 忠夫	6
愛の火の燃える北岡君	江藤 一明	8
寸 感	深川 純一	9

セミナースケジュール

10周年記念講演	陳舜臣	14
----------	-----	----

講 演

個人の理解	美崎 教正	29
地域社会と青少年	田中国夫	33
国際理解	新野 幸次郎	46

フォーラム(バズセッションより)

キャンプファイヤー	今井 鎮雄	73
-----------	-------	----

参加者感想文

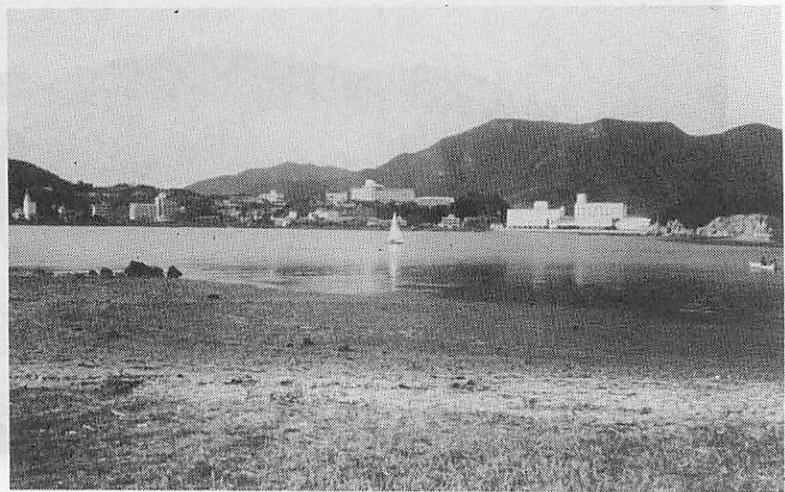
R Y L A 10年

あとがき

篠原慶弘 143

発刊によせて





## RYLA 10周年を迎えて



RYLA顧問

今井 鎮雄（神戸西）

10年一昔と云いますが、RYLAも10周年を迎えました。

10年前に私共が考えた第1は青少年達のリーダーをロータリーで作りたいと云う願いであり、従って日本の事情から云ってRYLAの原型である高校生を対象とせずに現在活躍中もしくは志していられる各青少年団体の指導者、学校の先生、或いはローターアクトの会員の方々のレベルを対象にどの青少年団体にも通用するよう高度なProgramを用意しようとしました。それによって地域の各青少年団体の指導者どうしが仲良くなり地域の青少年活動の裾野を広げる事が出来るからであります。

方法としては講義は高いレベルで目標を指示示すものにするために夫々の大学の専門の先生方にお願いする事を原則としました。

第2にロータリアンが参加者と寝食を共にして頂き身をもって、ロータリーの理想と方法を示して下さる事をお願いしました。初めにロータリーを疑っていた青年諸君が一人一人御奉仕頂いたロータリアン及び御婦人の生きざまを通じてロータリーを理解して頂けた事はなによりの収穫でした。

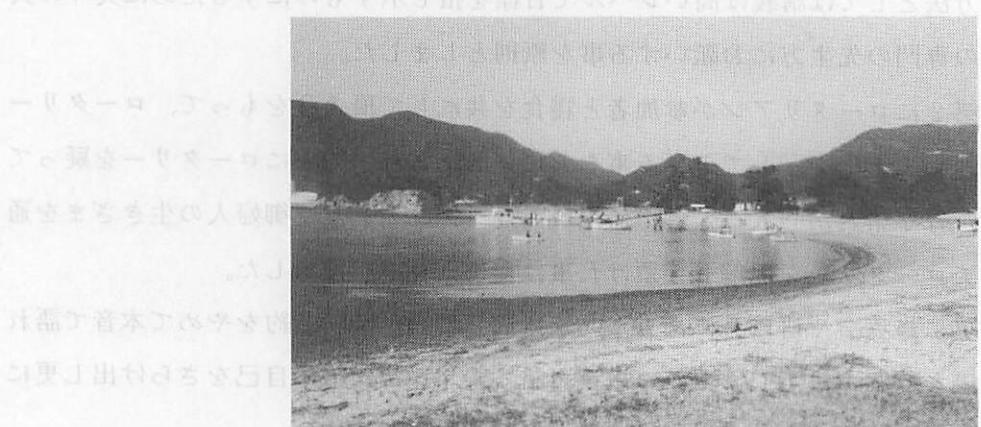
更に修養会や研修会にありがちな禁酒、禁煙、時間制約をやめて本音で語れる場を敢えて設定しました。徹夜で語る青年達が次第に自己をさらけ出し更に自己をみつめ、良き友を見出す場となつたと思います。

歩み続けた10年、多くのロータリアンの方々の献身を感謝します。しかし一昔前の考え方は次の10年に向かって生き続けるでしょうか。RYLAは行事ではな

く、新しいものを生み出すロータリー運動の側面であります。大勢の卒業生に加えて今後参加する参加者達と次の時代に必要な指導者のあり方を考えるために深い反省とそこから生まれる新たな目標、従って新たな方法論が生み出されねばなりますまい。RYLAが「マンネリ化したな」等と云われない為に真剣にこの問題を考え合いたいと思います。

間隔 A J Y R

(西行戻) 搬 駆 会



# RYLA所感



萩原茂

## ◇人と出会い

ここ余島に集う5県の若者達

昨日まで見ず知らず、合ったこともない

今日は同じキャビンで胸襟を開く

人生出会いの場

## ◇神と交わり

未見の我、新しい自己発見

自ら求道、思索に耽り

自己の人生を哲学する

## ◇愛の火の燃ゆるところ

互いに学び合い、影響しあい

足らざるところを補足し合う

そして上下脱いた親睦の場

講議という共有財産のみは所定の時間に、他は自由という形態で運営され、各個の自律を尊ぶハイクラスのセミナー、それがライラ。

風呂に入る間も惜しい熱気、キャビンの灯は夜を徹す。兎も角あつという間の4日間。

今日島を去り行く若者達の心の中を掠めるものは何だろうか。

・ニューリーダーとしての自信か

- ・常日頃余り意識しなかった長短の新自己発見だろうか。
- ・もっと自己の生活を哲学してみたいという励みの心なのだろうか。
- ・やっと終ったという郷愁だろうか。

大きな荷物を肩に喜色を浮べた若人を載せたボートは岸を離れて行く。千切れるように手を振っている。彼等こそ次の世代を担う宝物なのだ。どうか健かに、そして逞しくあれと島に残った私達も大きく手を振った。昨日に引き替え暖かい日差しがふりそそぎ明日ぐら櫻の開花も見られるであろう余島の桟橋であった。

本年お世話になった関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

特に直接運営実施にあたられた268地区の皆々様には格別に。



## 蒔かれた種の開花を願って



R I 第268地区ガバナー

内 藤 尚 武

R Y L A セミナーが10周年を迎えた事をお喜び申し上げます。一口に10年とは申しましても、企画から記録に至るまでの心のこもった手作りのセミナーを続けられたのは両地区的ロータリアンはじめ関係者の方々の地道な御奉仕があってこそと心より感謝致します。

知性を練磨し心を育てるR Y L A の趣旨はロータリーの心にも等しいものであります。その意味においてもR Y L A は青年諸君へのセミナーであると同時にロータリアン自身の自己研鑽の場である事も申すまでもございません。

今回は10周年の記念講演をして頂きました陳舜臣先生(神戸R C)はじめ講師の先生方が総てロータリアン(含新野幸次郎先生1988年7月神戸R C入会)であると言う記念すべき年にふさわしい、又育てる奉仕と言われるロータリーならではの事でございました。講義から受けられた感銘や、友人との出会い、カウンセラーやロータリアンとのふれあいを通してなにかお一人、お一人の心に残るものがあったでしょうか。

R Y L A によって蒔かれた1粒の種が大切に育てられ、いつか御自分の中で開花する事がありますようにと願っております。

## ライラに期待する



国際ロータリー第268地区  
青少年活動担当諮問委員

辻 忠夫（豊岡）

美しい余島は1949年、今井鎮雄先生が発見され、地元の人々のご協力でつくられた神戸YMC Aのキャンプサイトです。

そして1978年に兵庫県と四国のロータリークラブの合同のライラ、つまり青少年指導者養成プログラムが始まりました。

それから10年の間、リーダーとしての精神面の研鑽、向上に主眼をおいて企画、運営されてまいりました。

本来、ライラは1959年オーストラリアではじまり、1971年に国際ロータリー公認の青少年活動プログラムとなりました。

ライラの特色はプログラムの多様性にあり、レベルの高い講議を理解するために受講生年令を20才以上としております。

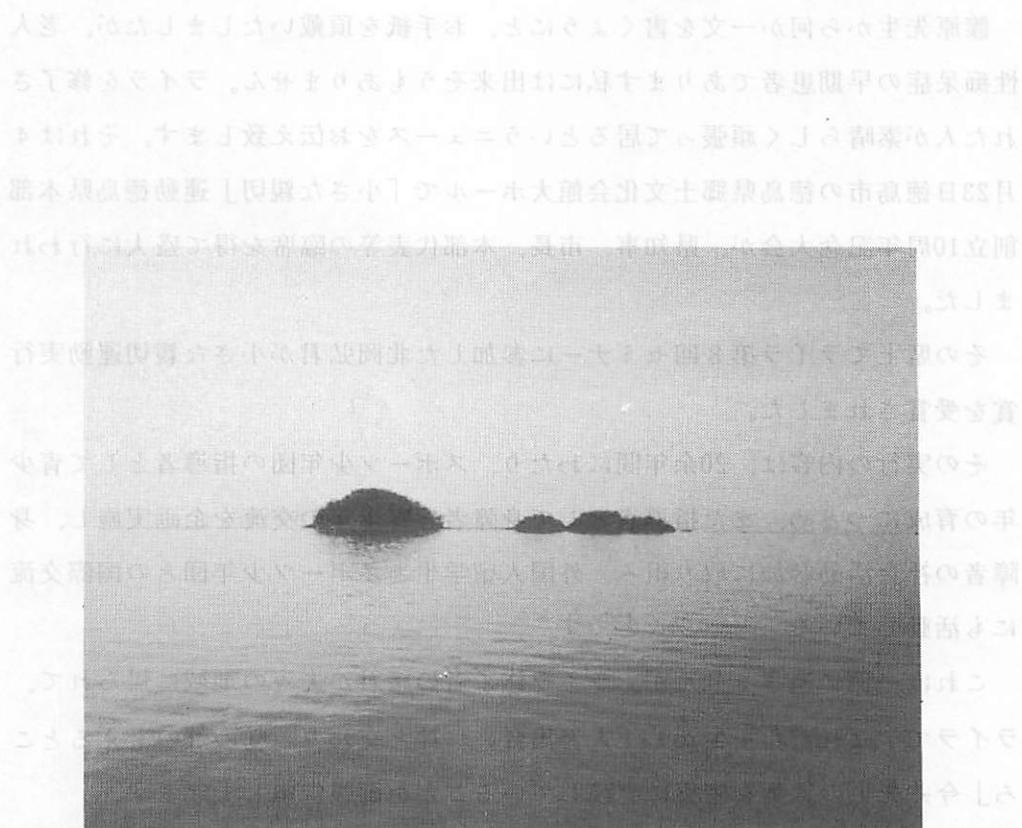
またライラではカウンセラーシステムをとって、カウンセラーはロータリアンとロータリアン夫人を資格要件にしております。地域の若いリーダー達にロータリーを理解してもらうことを期待しているからです。

ライラの最大の特色はプログラムの運営方法にあります。メインホールの前の石碑に刻まれている「人と出会い、神と交わり、愛の灯のもえるところ」は

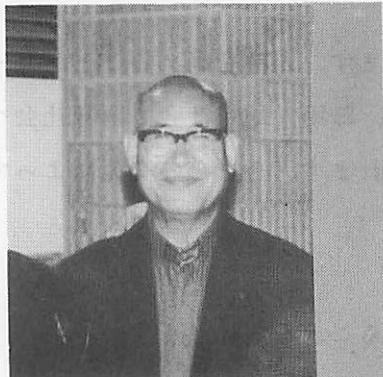
ロータリーの心に通じる言葉です。人との出会いを尊重し、神と交わり、奉仕の探究と実践の灯を燃やすところという意味であります。

ロータリーの奉仕は「育てる奉仕」といわれます。人格を高めることがロータリーの本体であり、その高められた心が家庭、職場、地域社会、国際社会へ伝達されます。また「共にする奉仕」ともいわれます。心と心の交流によってロータリアンと青少年が共に育ってゆきます。

ライラの投じた波紋が大きく地域社会に拡がることを期待します。



## 愛の火の燃える北岡君



江 藤 一 明 (小 松 島)

篠原先生から何か一文を書くようと、お手紙を頂戴いたしましたが、老人性痴呆症の早期患者であります私には出来そうもありません。ライラを修了された人が素晴らしく頑張って居るというニュースをお伝え致します。それは4月23日徳島市の徳島県郷土文化会館大ホールで「小さな親切」運動徳島県本部創立10周年記念大会が、県知事、市長、本部代表等の臨席を得て盛大に行われました。

その席上でライラ第8回セミナーに参加した北岡弘君が小さな親切運動実行賞を受賞されました。

その実行の内容は、20余年間にわたり、スポーツ少年団の指導者として青少年の育成につとめ、また指導者として身障者と青少年の交流を企画実施し、身障者の社会活動参加に取り組み、外国人留学生とスポーツ少年団との国際交流にも活動している。ということです。

これは一例に過ぎませんが、ライラ修了者の諸君が夫々の地域に帰られて、ライラで学ばれた心を生かし「人と出会い 神と交わり 愛の灯のもえるところ」今井先生の言葉を確実に実践していることを御報告申し上げます。

## 「感」の感想



ディーン

深川 純一 (伊丹)

今回のRYLAセミナーは、このRYLAがはじまって以来丁度10周年がありました。いま、この10年を顧みて、私の心にあった一つの言葉について少し申し述べておきたいと思います。その言葉は、

### “Inducting Education”

これは、バズセッションとフォーラムのテーマに「地域社会の変動と青少年リーダーのあり方」という大きなテーマを選んだこととも関係があります。

RYLAの顧問今井鎮雄先生は、第一回のRYLAセミナーで、「社会の動きと青少年の実態」というテーマの講義をされました。その中で、ポール・ティリッヒ(Paul Tillich)の学説を紹介され、彼が分類した教育の三つの分野を引用されました。即ち

1. Technical Education
2. Humanistic Education
3. Inducting Education

今井先生は、Inducting Educationというのは、“人間とは何か”という真実に招き入れる教育”である。いまの教育は、あまりにTechnicalであり過ぎ、HumanisticなInductiveな教育の分野が欠落しているという意味のお話をなさいました。

私は、この話に大変感銘を受けましたが、同時にInductiveな教育というの

は、具体的には一体どういうことなのか、ということを考えるようになりました。

その後昨年に至り、ある機会に中央大学の小堀憲助先生から、*Inductive Education*というのは、子供(若者)に対して一つの課題を問いかけて、子供自身に解決させることであると教えられました。例えば、医学の進歩という人間の幸せのために、人間は何百万匹、何千万匹というモルモットの生命を奪っている。この罪をどのようにして償うのか、というような問題を子供に問いかける。そして、子供が学業を修めて行く課程において、子供のPersonalityが育って行く課程において、子供自身の一生涯の課題として、自分なりの解答を出させる。即ち、課題を与えて、本人自身の責任において、その課題に対する自分の解答を作つて行けよ、そこにお前の行くべき道がある、こういう生き方が*Inductive Education*だというのであります。これは、私にとって大変感動的な教示でありました。

ところで、このRYLAの主要な目的は、知性の練磨、心の開発にあります。したがつて、Technicalなものとは凡そ無縁であり、Humanisticなものが求められています。

しかし、元来三泊四日の短期プログラムでありますから、知性の練磨、心の開発といつても、現実にはその実効性は少ないであります。したがつて、ここでは、そのきっかけを与えるところに一つの大きな意義があると思うのであります。私達が生涯かけて考えて行くべき課題に気付くことも、まさにその一つであります。バズセッションのテーマもこの趣旨に沿つたものが望ましいことは言うまでもありません。

今回のバズのテーマは、「地域社会の変動と青少年リーダーのあり方」でありました。

“地域社会の変動”という言葉には、色々な側面があります。国際化社会、情報化社会ということも変動の一つであります。高齢化社会も変動の一態様であります。また、科学技術の発達も変動の一要素であります。科学技術の発達により、人々の生活が物質的に豊かになって行くことも、また、その結果とし

ての人々の価値観の変化ないし多様化も社会の変動といえましょう。また、科学技術の発達は、一方において公害を発生させ、他方において倫理的に解決すべき諸々の問題を生み出して生きます。

今、Inductive Educationとの関係で、科学技術の一分野である医学をとり上げてみても、前述のように、人類の幸せのための医学の進歩の裏に、幾千万匹ものモルモットや実験動物達の命が犠牲にされているという事実を見逃すことはできません。

私達は、この事実を一体どのように考えたらいいのか？　これを罪と考えるのか否か？　人類の幸せのためなら当然だと考えるのか？やむを得ないというのであれば、その前提としてこのことを罪と考えているのか？　罪と考えるのであれば、この罪は一体どのようにして償つたらいいのか？　そもそも生きとし生けるものの「生命」とは何か？　その生命を奪って生きる「人間」とは一体何か？

このようなことをInductive Educationは問いかけています。今井先生が、Inductiveな教育とは、「人間とは何か」という真実に招き入れる教育」であると説かれた意味がここにあると思うのであります。

また、この問題は、単なる技術的な知識だけで解決できるものではありません。結局は、倫理の世界、宗教の世界に入って行かざるを得ないであります。また、皆さんが今すぐ解決できるものでもないと思います。まさに、小堀先生が説かれたように、一生涯の課題として、自分自身の責任において解決すべき問題なのであります。

バズセッションの後のフォーラムで、ある班の医学生から脳死の問題が提起された時、私が、フォーラムのテーマとは一見無関係に見える脳死の問題をえてとり上げたのは、このテーマの底流に叙上の思考があったからであります。脳死の問題も、まさにInductiveなものであります。それは秀れて倫理的であり、秀れて宗教的であり、秀れて哲学的であります。然るが故に、人間とは何か、生命とは何かについての謙虚な洞察なくして、正しい結論に到達することは出来なかろうと思うであります。皆さん達も、時間をかけて、じっくりと考えていただきたいと思います。

“地域社会の変動”について、もう一つの視点をとり上げておきます。

それは、「高齢化社会」の問題であります。

皆さん達がやがて高齢者になった時に、厳しい試練を受けることになる問題であります。

わが国は、A・D 2025年、即ち、今から37年後には、65才以上の高齢者が国民総数の26%に達し、それ以後この%は増え続けるであろうと言われています。

26%ということは、大雑把に言って、国民の4人に一人が高齢者であるということ、したがって、一人の高齢者を3人の人達が養って行かねばならない。しかも、その3人の中には、子供や未成年者も含まれますから、良質な労働力の確保という点からみて、事態は益々厳しいものになります。

そのような社会になると、現在の諸々の社会制度を維持して行くことは出来ず、現在の学校制度、会社制度、社会保障制度、商業上・農業上の諸制度その他地方自治体から国家制度に至るまで全ての制度を洗い流してしまうだろうと考えられます。これはまさに社会の激動であります。

この激動の時代を生き抜く知恵は何か？ 現代社会の効率の倫理からは、高齢者は効率ある労働を提供することができない者、したがって、役に立たないものは「うば捨山」へという論理しか出てこない。ここにもまた、Inductiveな問いかけがあります。

このような極限状況にどのように対処すべきか？ 平穀時の論理をもって極限時の事態を乗り切ることはできません。私達は、抜本的に発想を転換しなければならないと思います。例えば、インド人は、私達が想像できないほど貧しい。彼らは、たとえ朝食にありつけても、夕食が手に入るとは限らない。その彼らが、やっとの思いで手に入れた朝食を、すべて食べてしまわないで、その一部を地上に花模様に撒く。それは、今度生まれてくる時には、少しでもいい人間に生まれてくることを願いながら、鳥達のために撒くというのであります。

インドには社会保障制度もないが、しかし餓死者もいないといいます。皆が扶け合っていたわり合って生きている。人間同志だけでなく、鳥達のこととも考えて、乏しきものを分かち合って生きている。これが福祉社会の原点ではないかと思うのであります。金をかけて色々な福祉施設が出来たから社会福祉だと

考えると、福祉というものがおかしくなってくると思います。

そもそも福祉とは何か？ 高齢化社会での福祉、激動の時代の福祉はどうあるべきか？ 激動の時代を皆が共に生き抜いて行く知恵とは一体何か？ まさにInductiveなものが問われているのではあります。

一人一人の考え方を正して行く、それも一つの知恵かもしれない。自分のことだけを考えるのではなくて、人のために時間をさき、人のために汗を流す人達がいて、はじめてこの世の中はいま行く。これは少なくとも一つの真実であろう。しかし、他にもいい知恵があるかも知れない。抜本的に転換された発想とは一体何か？

激動の時代にこそInductiveな発想が求められているのであります。このような視点から、バズセッションのテーマを考えた時、第一回のR Y L Aを回想しながら“地域社会の変動”という言葉に万感こめて、あのテーマを選んだ次第であります。

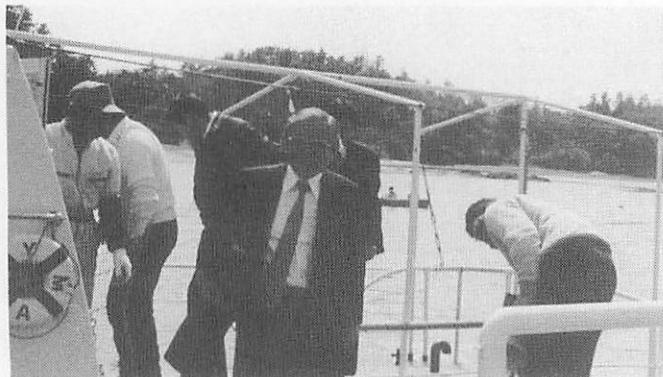
“Inductive Education”この言葉を皆さん達も時間をかけて考えていただきたいと思います。また、皆さん達がリーダーとして、子供達に課題を与える時の参考になれば幸いであります。では、皆さんまたいつか、どこかで楽しく話し合うことがあろうかと思います。

御活躍を祈ります。

# 記念講演 歴史と青年

陳 舜臣(神戸RC)

88' 3.31+43 YOSHIMA



「歴史と青年」というタイトルをつけたわけでございますが、ことしは戌申の年です。戌というのは十干の戌、申は十二支の申で、十干と十二支の組み合わせは60ありますて、十干の一番初めの甲と十二支の一番初めの子の年につくられた球場を甲子園というのですが、戌申は60年前に1度あります。その前の戌申はちょうど明治元年に当たるわけです。慶應3年に天皇が即位なさいまして、翌年明治と改元した。これが日本の開国と申していいんですが、それから120年たったわけでございます。戌申というのは私達中学時代からよく耳にいたしました。このときに明治天皇即位ということになります。そして、日本も国として非常に若い青年、それよりも少年というような感じの時代だったと思います。即位の式が慶應3年に行われましたが、その即位の式がその後の大正天皇のときも踏襲されます。これはずっとずっと古いものだとお考えでしょうけれども、実は、このとき初めて行われたものでございます。それまでの式は中国風だったんですが、過去を切り捨てて全く新しい式をやろうと、しかも、その全く新しい式を古い古色豊かなものにしようということで随分苦労しまして、衣冠束帯というような神主さんのかっこうをしているわけです。いかにも中国的と思われるものはできるだけ省いて、そのときに大体以降の形式を取り入れたように思います。昔の即位式には大きな香炉が置いてあるのですが、これも陰気くさいからやめようというので、何にかえたかといいますと、地球儀を持ってまいりまして、今から思うとややこっけいな感じがすると思うのですが、やはりこれが青年らしさではないかと思います。

明治の政府の中心になった人たちの年齢を調べてみると、我々の知っている名前で一番年を取っているのが41歳の西郷隆盛です。残念なことに維新を見ずにその前の年に病氣で死んだ高杉晋作が28歳で死んでおりますから、もしもその翌年まで生きていれば29歳ですね。坂本龍馬が32歳で暗殺、これも1年前です。生きておれば33歳。41だとか、28だとか、33とかいったような人がこの日本を始めたのです。この人たちの先生格に当たる吉田松陰が明治維新の9年前に処刑された時が29歳、生きていても38ですね。西郷どんよりも若い。こういった若い人たちによって新しいものは始められるわけであります。初代の総理大臣の伊藤博文はその時27歳。西郷隆盛の41歳とそれに次ぐ大久保利通の39

歳というものがトップでございまして、こうして日本の新しい国づくりが始まったわけでございます。

これは中国を見ましても、現在の共和国の辛亥革命、孫文が始めたのですが、孫文がハワイで革命団体をつくって、君主制を倒して共和国を建てようと決心したのは29歳の年でありました。そして、翌年すぐに広州で暴動を起こしております。非常に乱暴な暴動で失敗しましたけれども、こういう年の人の特権でございます向こう見ずができたわけでございますが、その後に続く人たちもみな若くして国づくりに参加しております。毛沢東が井岡山にこもって中国共産党中央委員会の主席になったのが39歳でございます。周恩来がその4つ下の35歳、これはもう中心になっておりました。蒋介石は孫文打倒を受けて北伐の司令官になったのが38歳です。日本と戦争が始まった時は51歳のときでございました。

こんなふうに青年の特権というものは新しいものをつくり出すということをございますが、今日は、中国の歴史で若いことで失敗したのと成功例とを挙げましてちょっと比べてみたいと思います。

失敗例の1つは、司馬遼太郎の小説に「項羽と劉邦」というのがあります、項羽と劉邦という2人が相争いまして、結局、劉邦が勝って漢という国ができたわけでございますが、秦の始皇帝が死にました。独裁者が死にますと実にもろいものでございまして、アッという間に交代して英雄割拠する状態になってくるんですね。そして、たくさんの英雄が淘汰された後、項羽と劉邦の2人の争いになります。秦の始皇帝の死んだ年の年齢から見ますと項羽は年がよくわからないんです。本人もよく知らなかったと思うのですが、漢の時代に司馬遼太郎の書いた歴史でも、劉邦の年はわからないです。お父さんの名前も書いてないですね。おじさんというお父さんから生まれた、おばさんというお母さんから生まれた、これはこういう人なんですが、いろんな人が研究した結果二説ございまして、紀元前の247年説があります。これならば39歳で項羽より15歳上、もう一説、これの方が確かだろうと私は思うんですけども、紀元前256年、これは項羽よりも24歳上、倍です。50に近いおじさんですね、これと23歳の項羽との争いであります。いろいろ書かれてございますけれども、やっぱり

青年のマイナス点が一挙に出てしまったわけです。そして劉邦の方は年を取ったプラスが出た、この差であろうと思います。

劉邦というのはどういうような人かと申しますと、先ほど申しましたように、どこのだれかよくわからないというような人でございまして、自分の年も知らなかつたような人ですが、亭長と申しまして、これはもう田舎の100戸ぐらいしかない村の世話役なんですね。そして、泰の始皇帝の時代ですから各地にいろんな大事業をやります。万里の長城を築く、あるいは自分の墓を建てる、咸陽という首都をつくる、そのためには各地の人を引っ張ってこなきゃいけない。強制でございます。亭長になりましたので、村長よりもっと軽いですね、隣組の世話人のようなものですけれど、それが、咸陽から割り当てがある、おまえのところは20人、ここは10人と、日本の戦争中にも徴用というのがありましたが徴用されます。それを連れて行く役なんですね。割り当てられた20人の若者を連れてとぼとぼと万里の長城の飯場まで行く、あるいは西安の近くにあります驪山、始皇帝の墓づくりに行く、何遍も往復した人でございます。そして、行ったところにはみなそれぞれ各地から人が集まっているんですね。そういう連中といろんな話を聞く、話を聞く、ここで見聞を広めます。そして、生き帰りにもいろんな見聞がもちろんあるわけでございますね。徴用でございますから、各地方の有力者のところに泊まって行くのでしょう。そのときに親切にしてくれた宿主もいたでしょうし、非常に冷たいのもいたでしょう。あるいはお小遣いをくれたものもいただろうと思います。あるいは宿主の一家が彼らの者を盗ったということもあったと思うんです。後に項羽と天下を争ったときに、彼の頭の中にはそういう地図ができていたわけです。項羽の方が戦争強いんですね。負けるときどこに逃げて行こうか、だれを頼ろうか、だれが信頼できるか、彼は知っているわけです。何回も往復して、その温かさ、あるいは人間を見抜いていたんですね。あそこへ行ったら金持ちかもしれぬが、あれはうまくやってくれないだろうか、ひょっとすると密告して売られるかもしれない、しかし、あの男なら大丈夫だというところには逃げて行く。一種の戦略地図というものが彼の頭の中にできていたと思うんです。

これに反しまして項羽は、始皇帝が死んだときに23の若さですね。戦国時代

に7つの大国がありまして、これを始皇帝が1つづつつぶしていったんですが、楚という国が非常に悪らつな手段で滅ぼされたんですね。だから、秦の始皇帝に対するうらみを非常に強く持っているところの出身でございます。しかも、その国の将軍の家系でございます。方々歩いたことは歩いたでしょうけれども、劉邦のような歩き方じゃないんですね。微用を連れて苦しい旅を続けるというようなことじゃなくて、おつきの人が何人もいて旅をする事はあったと思うんです。会稽というところに行ったときに、ちょうど始皇帝が通ったんです。それを見て項羽は「あいつに取ってかわってやろう」とこう言ったんですね。おつきの人はびっくりしてパッと口を押されたんです。そんなことが聞こえたらえらいことです。そういった向こう意気の強い人でございます。劉邦も一度始皇帝の行列に遭ったことがあります。そのときに劉邦はどう言ったかというと「ああ人間と生まれたからにはあんなふうになりたいなあ」と、こう言ったんですね。これは恐らく人の作った話じゃないかと思いますけれど、これは項羽と劉邦の性格をよく知ってつくった話ですね。劉邦はこんなような人であって、項羽はこんなような人であったと私は思います。項羽はもちろん強かったんですね、若いから。しかし、結局負けてしまった。100戦して99勝して最後の1戦に負けたというような感じの負け方ですね。

天下を取った後に劉邦が部下を集めまして、私と項羽とが天下を争ったが、なぜ項羽が負けて私が勝ったのか遠慮なく言ってくれと、こう質問したことがあります。これは司馬遼太郎の書きました「史記」という本に載っております。「摂行諸将よ——そのあたりの大名、將軍たちですね——わしに隠し立てせずにありのまま言ってもらいたい、わしが天下を取ったゆえんは何か、また、項羽が天下を失ったゆえんは何か」そこで1人が謹んで答えたんですね。

「陛下は傲慢で人をあなどります」とこう言ったんですね。彼は本当に品のない人であったらしいですね。難しいことを言う儒学者が嫌いなんです。論語とか孟子とか言っているのは嫌いでございまして、儒学者が来てお話をしたいと言ったら、ちょっとその帽子を借せと言ったんですね。儒者がかぶっている帽子を儒帽という帽子を借せと言って取り上げまして、これがちょうどしびんにいいわけです。それにジャーとおしつこをした。こんな人間なんですね。だか

ら、部下がこう言ったんです。「陛下は傲慢で人をあなどり、それに反して項羽は情け深く人を愛しました」と、こう言ったんですね。これには劉邦は怒らないんですね、当たり前だから。みんな知っているわけですね。自分が傲慢で人をあなどるということをみんなが知っているわけです。「しかし、陛下は、人々に城を攻め地を平定させては、降服した者があるとそのことに当たった者にこれを与え、天下の人々と利を同じくなさいました。ところが、項羽は権者をねたみ、能者を憎み、功ある能者は痛めつけ、権者に対しては疑いをかけました。戦い勝ってのその功を人に与えず、利を得てもその利を人に与えませんでした。これが天下を失ったゆえんであります」こんなふうに答えたわけですね。これも当たっているわけです。割合気まえがよかったです。そのかわり人をあなどる、あるいは傲慢であるというような彼の本質も、ああ劉邦というのはこんな人間だとみな思っておりますからそれは許せた。しかし何となく憎めないところがあったんですね。でないと人間集まってこないですね。柄悪くてしょうないけれども、しかしあれでなかなかいいところがあるというふうに思われた、つまり、大人の魅力が彼にあったわけですね。この答えに対しまして劉邦は、それは一面だけだと、一舉一手みな知らないんだと、もっと大きな理由があると。これは自分の自慢ですね。私は謀事をするにかけては張良という軍師にはかなわない、それから、戦争をするための経済的なものを準備をする面では肅何に構わない、実際に戦争するのは韓信に構わない。この3人に全部構わないんだと、しかし、私はこの3人を使うことができた、だから勝ったんだと彼は言っております。人の上に立つんだ、けれどもそんなに強くない、謀事もそんなにできない、もちろんきめの細かい経済的な措置も取れない、けれども、そういうことができる人たちをうまく使えたんだと言ったんですね。金も人間の伝達なんですね。悪口をバッパと言ってあけすけだったと思うんです。しかし、根に持たなかった人だったと思います。

そのかわりに項羽というのは全くそれと反対であります。名臣もいたんですけども、結局それも最後に見限ってしまっております。怒ってやめたんですね。途中で憤慨の余り背中にできものができて死んだと歴史には書いておりますけれども、あるいは丹毒であったかもしれない。劉邦の家来が言ったように、

項羽は手柄を全部自分のものだと思っちゃったんですね。自分のものにしたんじゃなくて、本当に自分のものだと思ったに違いないんです。戦争する、勝つ、自分が将軍を向こうに行かせたから勝ったんだと、こういうように考えたと思います。つまり、若さのために、そして、殊に項羽は苦労をしておりませんので、社会が自分に与えてくれた恩恵というものを知らない。それに気がつかなかつたのではないか。

経済界でもそうですが、二世、三世の人が注意しなければいけないのは、初めから銀のスプーンをくわえて生まれてきたような人は、それが当たり前だと思ってしまうことが多いんですね。人に命令するのも当たり前で、自分が命令したのが勝ったんだから、それはおれの手柄だと言って戦争に言った将軍たちに対する恩賞というのは少なかったんです。むしろ、おれが命令して行かせたのだからというような恩きせがましさもあったようでございます。ですから、全部自分のものだと、こういう考え方ですね、これは若さの至りだろうと思います。項羽は30歳で死んでしまうんですけれども、もっと生きておってもその気質はそのまま続いたんじゃなかろうかと思います。ですから、戦争すると勝つんですね。そして協定を結ぶ、そうするとどうも劉邦の方がそれを裏切っちゃうんですね。また戦争する、また劉邦が負けて項羽が勝つ、こんなふうですけれども、だんだんと項羽の陣営から人が離れて行きます。これは、先ほど申しましたように、一生懸命命を盾に働いたのにたったこれだけの恩賞かと、人間というものは情けなくなるんですね。しまいには損得の問題じゃなく、認められていないという悲しさがあったと思うんです。だから、この大将はだめだなあということで脱落していきます。反対に負けてばかりいた劉邦の方にだんだんと人がふえてくる。降服してどうぞ使ってくださいと来るのを「よしよし」といってすぐにもとからあった地位、その人が500人ぐらいの連隊を率いてくるともう500人足して1,000人の部隊長にしてやったり、そういうことを劉邦はやったわけですね。一見これは無計画のように見えますけれども、無計画の中に彼の計算があったと思うんです。そういう大人のいやらしさというものも持った人だったと思います。

項羽の方はそれが全くなかったわけですね。ですから、だんだんと人が離れ

て行く。なぜおれは人をかわいがり、人を愛したのになぜ人が背を向けるのか。恩賞をたくさん与えてやれば人が喜ぶだろうということを彼は知らないわけです。というのは、彼はお金に対する価値というものを余り知らずに育ったからです。飢えて、今これだけあれば1食食えるのにと思うようなことは一遍もなかったわけですね。だから、これを与えると喜ぶだろうと観念的には思いついても、実際の自分の肌にしみた感覚がなかったんですね。そういうことで不満を持った人たちがどんどん離れて行きます。彼に愛されて、情け深い人だなあと思いながらもやめて、劉邦にもつかなかった人もいたでしょうけれども、戦争はこの2人だけですから、こっちを離れると向こうにつくしかないわけでございます。そしてついに垓下というところで囲まれたんですね。

地方にいて様子を見ている人がいるんですね。洞ヶ峠を決め込んでどっちが勝つか、勝った方につこうというのはいつの時代にもございます。現在でも総裁選とか何か見てますと、どうも態度鮮明でないのがおりますけれども、ああいうのを「洞ヶ峠」と申しまして、昔、筒井順慶が洞ヶ峠でどっちにつこうかと、有勢な方につこうと様子を見ておったんですね。そういういやらしいやつがいるんだと、この話が出たときに、作家の筒井康隆が、あれはおれの先祖だ、悪口言わないでくれと言われましたので、もしもご子孫がおられましたらご勘弁願いたいと思います。

こういうことでだんだんと劉邦の方がうまいというようなことで一遍に人数がふえるんですね。垓下で囲まれたときには四面楚歌という声が、楚というのは項羽の出身地なんですね。自分の故郷の歌が聞こえてくるんです。自分の故郷の人たちもみんな相手についている。彼は切り死をしてしまいました。30歳という若さですね。7、8年も戦争して負けてしまう。これは若さのまずい点がもろにあらわれてしまった1つの例でございます。

もう1つの例は、これも成功例と申しておきますけれども、「三国志」に出てまいります諸葛孔明です。これも27歳の時に劉備が軍師になってくれと頼みに行くんですから、それまでに彼のうわさは高かったわけですね。劉備も劉邦に似ております。かなり乱暴な人物だったんですが、諸葛孔明27歳のときに劉備は47歳、ちょうど20歳年上です。そして、劉備の部下には、あのひげの関羽

がおりまして、46歳で劉備より1歳下、そしてもう1人張飛というのがおりますが、これも40歳ですね。こういう野戦の将軍ばかりがおりまして、参謀がないんですね。これが劉備にとっては悩みの種なんですね。戦場だったら相手をけ散らして駆け出すような将軍はいるんだけれども、頭を使ってどしようという軍師がない。聞くところによれば、当時の劉備は、劉豹のところに1,000人ぐらいの兵隊を持って居候をしておったんですが、この近所でだれかいいのがいないかなと思って、みんながみんな仕えておりますね。劉豹という人は非常に穏やかな人なんでみんなに慕われて、そこにたくさん人が集まつたというんですが、諸葛孔明は劉豹にも仕えない。浪人し申しまして、毎日本を読んでいる。読書に励み、退屈を紛わしていたということですね。友だちからすごいのがいるぞということが劉備の耳に入ったわけですね。そして、劉備が軍師になってくれと迎えに行くわけです。断わりました。まだ勉強中だとか言って断わるんですね。3回行って、3回目にやっと、では天下のためにお役に立ちましょうと言ったときに、彼はまだわずか27歳です。

その翌年、彼28歳のときに有名な「赤壁の戦い」というのを起こしたんです。そこで、孫權と連合して曹操の大軍を壊滅させたわけですね。これで孔明の名前が天下にとどろくわけであります。この諸葛孔明の血筋を申しますと、これも出身は非常にいいんです。山東半島の瑋陽というところの諸葛氏という名門に生まれました。葛という名前なんですが、諸というところに移住したときにそこにも有力な葛という一族がおりましたので、諸の葛ということで諸葛という名前をつけたらしいのです。中国人の名前は大抵1字でございますが、ときどき2字がございます。諸葛という2字姓の家はかなりの名門でございましたが、お父さんが泰山県の知事をしておりましたが亡くなりまして、諸葛孔明の本当のお母さんはもう亡くなっていたので、父親が亡くなったときのお母さんは繼母だったんです。そのとき孔明はまだ12、3歳でございます。兄は10ぐらい上ですからもう20歳ぐらいになっていたのですが、兄弟やおじさんたちが集まりまして、どうしようかということになったわけです。乱世であるから、みんなが1つに固まっておれば、ボカンとやられると一族全部が滅びてしまうというので、あっちこっち行こうじゃないかと、こういうことになったんです

ね。お母さんは揚子江の南から嫁いで来た人なんですね。お父さんが死ぬと里に帰ります。その里に帰るには諸葛孔明のお兄さんが20歳ぐらいになっているんですが、そのお母さんを奉じてお母さんの里に帰る。諸葛孔明は、父親の弟が劉豹に仕えて湖南省の知事になったわけですが、それについて行くことにしたんです。彼と弟と姉、これがおじさんに連れられて湖南省に行く。湖南省の知事には劉豹の任命した知事と曹操が任命した知事があるわけです。戦乱時代ですから早い者勝ちで先に行ったんですが、後から来た者に殺されたわけです。しょうがないから諸葛孔明はとぼとぼと立ち退いて行っておばさんのいる荊州まで行ったわけです。

これを見ますと、彼は、名門かもしれません、項羽のようなことはないわけですね。人に囮まれて育ったんじゃなくて、自分で生きてきた人であります。父が早く亡くなって、おじといっても、かわいがってもらったでしょうけれども、すぐまた人に殺される。とぼとぼとあっち歩いたりこっち歩いたりしてやっと荊州に落ち着いて勉学に励んだわけです。友人を集めいろいろな話をする、その話しつぶりが評判になりまして劉備の耳に達し、劉備が、ああこれなら軍師になれると思って迎えに行ったと思います。

こういう点を見ますと、青年のマイナスというのは、見聞が少ないということですね。ところが、諸葛孔明は見聞をいやというほどしてきたわけです。父の死、これは病気ですけれども、おじの死、これは殺されたわけであります。そして、山東から湖南省に行くときには、ちょうど徐州というところで曹操が大虐殺をやっているんですね。曹操のお父さんは徐州で殺されたので、それで住民をみな殺しにしているんですが、そういうところを通ってきているんですね。恐らく、将来彼は曹操と対立して五丈原で病死するんですが、なぜ曹操に仕えちゃいけないのか。大抵の人は曹操のところに行くんです。自分の友人で曹操のところに行った人は多いのですが、彼は行かない。若い時に曹操の虐殺を見ているんですね。そのときは頭に血が上ってしまって、おれのおやじを殺しやがったなあということで何の関係もないのに住民をみな殺しにした、こういうのに天下を取らせたら大変なことになるということで最後まで曹操に対立したと思うんです。曹操も若いときにはそんな乱暴なことをしたんですが、だ

んだんトップの座が見えてくるとおとなしくなってくる。人間はそんなものですね。トップになるかどうかというときに人々の目が光っている。あれ社長にしたいけれども、ああいう傷があるからと言われると困りますから、行いを正しくするわけです。芸術家だって、芸術院会員が近くなるとみな遊ばないです。曹操もおとなしくなったんですが、それでも諸葛孔明は行かない。あるいは許せないということだったと思いますね。

こんなふうに、青年の前向きである見聞というのは、諸葛孔明の場合は、そんなことしたくはないんだけどもやってきたんですね。山東半島からとことこ歩いたんですね。しかも、いろんな場面を見てきた。例えば、劉邦が徵用を連れて万里の長城や驪山城に行くのと同じです。恐らくおじさんが殺されて、そこから揚子江をさかのぼって行ったと思うんですが、そこは将来彼が戦争する場所だったんですね。その場所を彼は歩いているんです。劉備の軍師になつたすぐ翌年に「赤壁の戦い」が起こっています。

「赤壁の戦い」というのはどういう戦いかといいますと、「天下三分の計」の直前であります。一番大きいのは魏であります。これは20数万の大軍を動員して南下してきました。吳に孫權というのがおりまして、これも若いんですが、ちょっとイイカッコしいなんですね。本当はそんなに大きな国じゃない。人口も少ない。ところが、我が軍は20万いるとか言っているんですけど、本当は7万ぐらいしかいなかつた。人々はみな大きく見ているわけですね。劉備がおりてくる、曹操も迫ってくる。これは完全にけ散らされてしましますよね。その次は吳です。7万ぐらいの軍隊では30万にやられちゃうわけですよ。吳の方でも降参しようか抵抗しようかという両派に分かれている。そこへ諸葛孔明が乗り込んでいって我々と同盟しようといふんですね。孫權と同盟して曹操と当たりたいと言つたとき、みんなこれは無理だと思ったんです。若さですね。若いといってもう28歳ですし、諸葛孔明は身の丈1メートル90ぐらいあった大男でございます。みんな吳は大国だと思っているんですね。しかし、彼は知っているんです。揚子江の南を通って南省に行つてゐるんです。普通の旅行ではダメですね。アンテナをピンと張つてよく観察しているので、吳という国はそんなに兵隊はいないんだと、我々の手に持つてゐるこの3万が彼らにとつて

非常に大きな力だ、むしろ我々を使わなくちゃこの7万では曹操の前に戦わずして下るだろう。我々3万がつけばあるいは戦う気になるかもしれない。なるだろう。そういうことも彼は見てるわけですね。そして、私が行って説いて来ますといって孫権の本隊へ参りまして、劉備と孫権の連合がそこでできたわけです。これは「三国志」を見ますと、神技みたいに行っているんですね。諸葛孔明が行って口先三寸で孫権を説得したというんですが、口先三寸じゃないんです。知っているんです。20万軍隊いるぞというかっこはしているけれども、本当は7万しかないでしょう、うちの3万とやったらどうですかという事を分けた説得なんですね。これは、彼がここを歩いてよく見ているわけです。だから、これが500年前の項羽と違うところですね。

項羽は若様、若様という連中に取り囲まれて余り物も見ずに、見ても余り心に伝わらない旅の仕方をしたと思います。ところが、諸葛孔明はそうじゃないんですね。たった1人で、湖南省から咸陽の旅は、おじさんを殺されて、どうたどり着いたのか歴史は詳しく書いてないんですけども、恐らくいろんな階級の人たちと交わりながら、17、8歳になっておったのですが、子供だといつていろんなところに泊めてもらってはそこで洗濯やら炊事の手伝いをしながら行ったと思うんですね。そういう旅をして、それが若い諸葛孔明の財産になつたわけです。昔は旅によって世の中を知るわけなんですね。大抵の人間は田舎に生まれてそこから動かないんです。動くんだったらしょうことなしに動くんですね。実際にはそんなに進んで動くというのは非常に少ない時代がありました。旅をする人というのは、徵用工です、秦の始皇帝から来いと言われてシンボリと行く。連れて行くのは劉邦のような人ですね。旗を立ててついてこいというわけです。ですから、旅という文字は、旗の下に人が2人、つまり、複数です。複数の人を旗を持った人が連れて行くのが昔の旅であります。旗持ちが劉邦みたいな世話役です。今の日本の旅行がそうですね。旅行者の人が旗持ってその後について来る、あれが旅行の原型だったのです、こんな人々は恵まれない人たち。なぜかといいますと、そういう徵用があっても金持ちの息子は行かなくても済んだのです。人数が揃えばいいんですから、お金を出してかわりの人をちょっと私の息子にかわって行ってくれ、そのかわりにこれだけ

やるというので行くわけです。ですから、恵まれない人たちが旅をしたわけです。そして、恵まれた人はそこでじっとして、年を取ってそこの長老になる、こういう時代でございました。

ところがそれは、平和な時代はそれでいいんです。いざ戦争となりますと、この長老たちではどうしようもないんですね。物を知らないわけです。物を知っているのはどんな人かというと旅をしてきた人達です。劉邦の田舎の沛というところです。これは小さな県でしたけれども、その人たちには、天下は乱れてきたことがわかつて、軍隊があっちへ行ったりこっちへ行ったりしているからヒヤヒヤしているんです。しかし、何が起こっているのか彼らは一向にわからない。だから、どうなっているんだということを聞きに行くのは旅をしてきた人たちです。つまり、それまではその村では下層な人たち、お金をもらって金持ちの息子のかわりに行ったような人たちに聞きに行くんです。世の中どうなっているのか。そうするとその人たちが教える。その人たちの大将は劉邦ですね。世の中こうなっていると彼は講釈を始めるわけですね。彼は知っているわけです。始皇帝にこの忙しいのに30人出せとか50人出せとか言われて困っているでしょう、それでみんな怒っている。そして、始皇帝が死んだからみんな立ち上がったんだと、こういうふうな説明をするわけです。じゃ我々はどうしたらいいのか、それは数ある味方が来ればいいんだというようなことを劉邦が言うわけですね。つまり、長老たちが彼らに物を聞く番になります。その物を聞かされた人たちでも、劉邦のようにいろんな物を見てきた人がうまく説明ができるわけです。じゃこの沛の県を挙げて劉邦にお任せしようと、県知事とかいった連中がみんな劉邦に権利を渡したと、あなたの指導に任せるということになりますね。だから、よく知っている人に指導してもらえば安全だと。だから、黄色い服を着たやつが着たぞというとすぐに劉邦にところに聞きに行くんです。黄色い服を着たやつが来たけれど、いや黄色い服を着たのはだれそれの軍隊で、あれは悪いことをしないから大丈夫だと、頭に赤はち巻きを巻いているのが来た、あああれは乱暴なやつだからちょっと逃げようということをよく知っているんです。知っているからみなその指導に従ったわけです。

これは、農耕社会ではできなかったことです。遊牧の社会でこうです。物を

よく知っている人に指導してもらう。年を取っているとかいうことは関係ないんです。ですから、遊牧社会では突如として大帝国があらわれます。ジンギスカン、これもその10年ぐらいまで何をしていたかわからないのが突如10万とか30万の大軍を率いるようになる。というのは、遊牧の人たちはリーダーが右に行けと言えば必ず右に行かなければいけない。おれはいやだと言って左行きますと、それだけで逆に取り残されて死ぬしかないわけですね。彼に従って右に行ったら大丈夫、そこに水があって大丈夫と行ってそこに水がなければみんな死んじゃうわけですね。ですから、その人が本当に知っているかどうかということ。それが評判になりました、ジンギスカンのところに行くと戦争は勝つし、戦利品はあるし、いろんなことをよく知っているというのでみんなそこに寄つて行くわけですね。いきなり大帝国になる。

少し青年の話からはずれますけれども、劉邦の時代に匈奴という民族がありました。大変強いんです。劉邦も大変苦しめられるんですけれども、匈奴というのはどういう民族かというと、これがわからないんです。匈奴というのは万里の長城の北側にあって、だから遊牧の人だというのはわかっているんだけども、人種的に今のトルコ族なのか、あるいは蒙古族なのか、何民族なのかこれがよくわからないんです。中国の歴史上の特徴は、ヨーロッパの歴史と比べますと大きな特徴があります。すなわち、民族の肉体的な特徴を一切書いていない。司馬遼太郎の「史記」を見ましても民族的特徴は何も書いていない。風習は書いてあります。例えば、どの人は入れ墨をするだとか、こんなふうに髪を結うだとか書いておりますが、これは肉体的特徴ではなくて風習なんです。肉体的特徴は一切書かないんです。これがなぜか不思議なんですね。司馬遼太郎もそれに続く歴史家も肉体的なことは。風習は書いております。チーズやラミルクを常用するだとか、いろんなテントに住む、その家も移動するとか書いております。なぜ肉体的特徴を書かないのか。中国の歴史家で肉体的な特徴があらわれるのは、6世紀になって5世紀の歴史のことを書いた「晋書」という書物の中に匈奴が出てまいります。それはこういうふうに書いております。「山賊が決起して軍隊も文官も全部殺した。そして、漢族でも目がくぼんでいて鼻が高いのは間違って殺された者も数しれず」と書いてあるわけです。これ

でやっと匈奴というのは目がくぼんで鼻が高いということがわかるんです。この「晋書」も歴史家が民族の特徴を書こうとしたのじゃなく、ただこの事件を評価するに当たって匈奴をみな殺しにした。匈奴でない人たちでも、鼻が高くて目がくぼんでいると殺されてしまった。これほどひどいことになったということが書いてあるだけなんですね。これでやっと匈奴というのは鼻が高くて目がくぼんでいるらしいというのがわかります。ところが、同じ匈奴、これはフンヌというので、今のフィンランドとかハンガリーもフンヌなんですが、このフンヌがヨーロッパに攻め込んだときの容貌を記録で見ますと、目が細くつり上がって鼻ベチャで顔は平べったいと書いてあるんです。一体匈奴というのは何だということになるんですね。匈奴というのは何者でもないんです。あるすぐれたリーダーがあらわれるとそこに寄って行ったのが匈奴と言われているので、鼻の高いグループも行ったであろうし、鼻ベチャのグループも行ったわけです。それをみんなひっくるめて匈奴と言ったんじゃないだろうかと思います。だから、この人たちの容貌を描写するのは難しいんですね。鼻の高い人もおれば低い人もおるとは書けないですから、書かないんじゃないかと思います。

このリーダー、この人がいろんな情報を入れて、コンピューターみたいな人間だったと思うんですね。今ごろこんな季節で、雨が3日前に降った、だからあそこに水があるはずだろうということがすぐに計算できる人ですね。そして行こうと行ったらちゃんと水がある。そうするとだんだん信用ができるんですね。あの人にについて行けば間違いない。それがいいかっこしてヤマ勘で行こうと行ってみたら水がなかった。こんな者はみんな離れてしまします。これが遊牧の生活なんです。

これが農耕の社会になると、戦乱になればそうなるんですね。物をよく知っているやつに教えてもらわなければいけない。ただ年を取っただけで問題が起ったとき調停すると、そういう役じゃなくて、どうしてついて行こうかというときは、劉邦のような乱暴でどうしようもない人間だけど、よく知っているので、この人について行けば間違いないというのでみんな寄って来るわけなんですね。

旅行の意味というのは、私ここにあると思うんですが、諸葛孔明もよく旅行

しまして、旅行中の見聞を自分の頭にきちんと入れて、それが動いたらどうなるかということまで計算し尽くしたのが彼の成功だと思います。28歳、軍師として乗り込んで、孫権に対して我々と結ぼう、そうでなきゃだめだということを説いて納得させたんですね。彼は呉に長くいたんですから、水軍の実力も知っています。数は少ないけれども、船に乗るのはなれている。ところが、船の戦争になると曹軍は弱いということも情報を持っていたと思うんです。瑋陽というところはちょうど真ん中です。両方の情報が入ってきます。27歳までいろんな勉強をしたというんですけど、ただの勉強じゃないんですね。いろんな人と交ったという記録がございます。こういう人たちからいろんな話を聞いて、曹操は今何をしているか、魏の都の近くに大きな池を掘って水軍の練習をしている。戦争ごっこじゃないかと。これも諸葛孔明の頭のどっかに入っていたと思うんですね。3万と7万が連合して30万に当たっても勝てるということですね。そして同盟が成立した。表面から見れば神技に見えるんですね。「三国志演義」では、諸葛孔明が神に祈ると風が吹いてきたということになっているんですが、そういうことはあり得ない。

「歴史と青年」という講演でございますけれども、実をいうと年は余り関係ないんです。物事をよく知っておって、情報をたくさん持って、その情報を整理できて応用するというのは、ふだんから体制があって、構えて自分の物にするということなんですね。とらえて貯めておいて、いざというときとれが出てくるというような装置をする。それが実は、青年の方が有利なんです。我々は頭の細胞はこうしてしゃべっていく間でも何千万かどんどん死んでいくらしいんですね。若い人はそれはないんです。そういう時代を大切にしてほしいんですね。どんどんとため込んで、人は若いときに覚えたことはなかなか忘れないんです。京大探険隊の吉川さんという方は90何歳で亡くなりましたが、20歳のときにトルコに行っているんですが、自分の人生が一番輝いた20歳のときにトルコからシルクロードに行ったときのことは、実に細かいことまでよく覚えているんですね。女性の足がきれいだったということまで言っているんですね。若いときの記憶というものは、入れる間に入れなきゃいけないんじゃないのかという気がしました。

きょうはちょっと漠然とした話になりましたけれども、若い人たちのお話をしようと思ってきたんですけども、時間が参りましたので失礼します。



## 個 人 の 理 解



美 崎 教 正 (神 戸 北)

個人の理解の一番最初は人間とは何かということから始まります。又相手を理解する所から始まります。例えばこのセミナーに参加する為に昨日の朝神戸港に集まられた時の皆さんと今の皆さんとでは顔の表情も違って来ています。

昨日の毎日新聞の社説に「教師の心」という題で静岡で起こった卒業アルバムに校則違反の生徒の顔写真の代りに花の写真を入れた問題をとりあげ、これは教育ではないと書いています。子供の1人1人の心を大切にしない教育や型にはまった教育を一方的に強制するような教育現場のあり方には反対だと述べています。

相手の立場を考えた教育は大切であると思います。その為には大変時間がかかる。しかし、それはやらなければならないことです。相手の事を考え、生徒だったらどうするか、父兄だったら先生だったら……相手の立場に立って考える教育とは型にはまった教育ではなく、自己主張の出来る子供を育てる教育でなければならぬのです。自己主張の手段として校則違反をする子もいるだろうという判断に立って、校長が考えていればもっと別の結果が生まれたのではないかでしょうか。今日最も欲しいのは話しあうこと、協議することあります。今の日本にそれが一番欠けつつあります。

戦後はみんなが民主主義について考え、民主化への熱意が高かった。しかし今は馴れっこになってしまって協議して決めなければならない事を独断で決めてしまっている事が多く、この中学を例にとっても生徒会やPTA等で話しあ

って決めていれば、この様な社会問題にならずに済んだと思います。相手の立場に立って物を考えるという事はそういう事です。自分の考えが全て正しいと思い込んでしまっている教育者が多い所に問題があったと思います。

昨日執行先生がご挨拶の中で自分の目の高さで子供と対話する事が必要で目線の高さと合せて話しあう事が大切であると話されました。これは本当に大事なことだと思います。又目と目を合せて話しあう事が話を上手にするコツでもあります。横を向いては話は通じない、面と向って相手の顔のあたりから目線を離さないで話すといいと思います。目線を合せる事は相手の心をつかむ事であり、相手を理解する事にもつながります。

農村では腰の曲った人と話すには低い姿勢にならなければなりません。自分が経験したことは理解しやすいが、経験していない老人の心を理解することは大変むづかしいことです。

私の体験をお話しますが、私は大学で教えはじめて30年になりますが、いろいろな体験の中で大変強く印象に残っておりますのは、もう10何年か前、私の講義が差別発言であると糾弾されたときの事であります。私はその時男と女について話していましたが、医師として厚生省のデーターを使って中絶の話をした中で、女性差別があると学生達から糾弾され、批判書を書くまで6ヶ月間続いたのです。理由は安易な中絶という言葉が発端でしたが、全く不用意だったと思います。言葉に気をつける事も話をする時には大切な事です。その後この実績を買われてか耳の全く聞えない学生が入学する事になったときに、受け入れ準備の担当となり委員会を作つて対応しました。まず相手を理解する事から始めようとその学生の家を訪ね、両親からも事情を聞いて準備をしました。ところがいざはじまつてみると、音は聞こえないが相手の口の動きを見て言葉を理解する読唇法を用いる為に先生がマイクを口に持つていって話されると理解出来ないし、黒板を使う間はしゃべらないで欲しいと言うような事が分かってきました。O H P を導入する事にしたり色々お互いに苦心をし相互理解に努めました。健常者エゴがあってはならない、又医者エゴ、男性エゴ、教師エゴであってはならない。相互理解が大切だと言う事を常に考えていました。

今後大きな社会問題となる、老人問題に少し触れてみます。寝たきり老人や

痴呆老人の理解をどうするか。家族に老人のいる人はまだしも、全く分からぬ場合も多いわけです。私は若い人にもなるべく老人と接する機会を得てほしいと思います。

私に高齢の伯母がおります。伯母はつまずいて大腿骨を折って歩けなくなり、手術もうまくゆかず、寝たきりとなって歩く希望を失ってしまったわけですね。骨が折れても歩けるのですが、意欲がなくなるともう歩けませんね。伯母を見舞っていろいろと話をし、今何をしたいのかと聞いたところ、少し離れた所に住んでいる自分の姉さんに会いたいと言うのです。この場合、皆さんだったらどうしますか。それではと車で姉さんの所につれてゆきますか。その姉さんというのも寝たきりで、おまけに呆けてしまって何も分からなくなっている。

病気を治すという事は明日に希望を持ってもらう事ですね。伯母が姉さんに会ってしまえばもう希望が叶えられてしまう。寝たきりでは会いにも行けないだろうから、先ず足を治して自分で歩いて会いに行こうと元気づける必要がありますね。そこでまず姉さんの写真をとってそれを見せて、是非会いに行こうと力づけた。そして次の機会にはビデオをとって見せました。寝たきりから抜け出る為には健康づくりに励む意欲が必要だし、又寝たきり老人を受入れる社会の福祉も大切です。人の世話になる事は恥しい事ではないと言う考え方を作る事も大事でしょう。

又命いくばくもないターミナルケアーの老人の場合はどうするか。大化の革新の大功労者であった聖徳太子も47歳で呆け、49歳で死ぬという悲惨な最後であったと言います。今井先生はウェルネスと言われたけれど、ウェルダイも大切な事です。惜しまれて死ぬ、生きてきたのではなく生かされて来たと思う心が大切ではないでしょうか。だから奉仕しようと言う気持ちになる自分の為にしか生きられない人は駄目です。他の為に生きる生き方をして始めてウェルダイを迎える事が出来る、満足して感謝して死んでいける人は幸いだと思います。脳死の問題もそうで、死んでいく人にとって死とは何かを考え、少なくとも移植を受ける人の側に立って医師は処置をしてはならないと思います。

話を元に戻して、いったい個を知る、己を知ると言う事はどんな事か、お互いに相互理解をするとはどんな事でしょうか。それは人と交わり、友を得るこ

と。自分以外の人と共に生活する事で魂を触れあうような触れあいの場が生まれます。又個を理解することによって行動につながり、生活が他の為にという事になって来ます。そして自分と意見の違う人もその中へ包み込んでいく事も出来るようになって来ます。

己を知り、相手を知る。今の行動が人の為になっているか。RYLAセミナーの目的もここにあります。ここで得たものを自分だけのものにししないで欲しいと思います。

最後に自分を尺度に世の中を測ってはならないという事です。自分を含めて人を尺度にして自分の行動の尺度にして欲しいと思います。そこから和が生れて来ます。そして共に生きる自覚が生れて来るのであります。

福沢諭吉翁の健康訓に次のような事が書かれています。

1. 世の中で最も尊いことは人の為に奉仕する事である。

そして決して恩に着せないことである。

2. 世の中で最も美しいものは全ての物に愛を持つ事である。

3. 世の中で最も楽しいことは自分の生涯を貫く仕事を持つことである。

(この仕事と言うのは、自分の生活の糧を得る為に働くと言う意味ではなく、世の中に必要とされるような生き方、働きと言う意味である)

心を求めてRYLAに来り、心豊かにRYLAを去る。人はそれぞれ違います。しかし相手を理解しようと心掛けることで心が豊かになります。そこから人は1人だという考え方なく、交流を深めあうことで共に生きる喜びや人に感謝する事が出来るようになります。

人に命じるのではなく、自らが人としての道を歩む事で他の人に影響を与えるのです。大人の行動は青少年に大きい影響を与えます。まず先生が模範になること。大人が模範になることの自己教育をなし、奉仕の道を子供達に伝えていくことです。

大人が勉強をしてゆくことが最も大切なことだと思います。

## 地域社会と青少年



関西学院大学社会学部教授

田 中 国 夫（西宮甲子園）

私の専門は経済学や法律と違い、大変珍しい社会心理学という学問です。まず少しこの紹介をいたします。私は経済学なんてのはむつかしい学問だと思っておりましたが新野先生のお話を聞いていますと実に面白いんですね。でももうあんな学問でもとゆうたら怒られますが、あんなに易しく喋られる。私は心理学なんていうのは人間の心でしょう。人間の心ですから易しく喋れそうなものですが、いかがですか、心理学の時間てのはほんと面白くなかったでしょ。これ人間の心の話しとる先生かと思う位に面白うないです。私自身、何遍やめようと思ったか分りません。こんな学問につきおうとったら人生破壊やと思いましたね。それよりは陳舜臣さんの小説読んだ方がよっぽどおもしろいですね。あそこには人間があるんですがね。心理学の教科書には人間がありませんですね。人間じゃなくて人間の部品みたいなのがありますね、しかもそれがちっとも生きていなくてですね。私はよっぽどおさらばしようと思ったのですが、私を引き止めたのは先生の素晴らしさで、それに引かれまして今日止めようか、今日止めようかと思いながら、とうとうやめずに来てしまったわけです。嫌で嫌で仕方なしにやった学問ですけれども何の因果か、大変この学問その後流行してしまいました。昨日も実は田崎真珠の新入社員の記念講演と今日はこちらということで、これから又姫路ということで、今や流行って仕方のない学問ということですので、何がどうなるか分らないということですね。

今から若い人は人生始まるんですが、ほんと人生ていうのはもののはずみで

すね。人生はパチンコの玉やないかと思う位に釘にポンと当たってピヤッとはじかれて気が付くとすっと終い——ということになる訳です。日本経済新聞の一番後ろに私の履歴書っていう欄がありますが、あれ読んでおりましても銀行の頭取さんが銀行の頭取になろうなんて全然人生スタートしておりませんね。もののはずみで気が付いたら銀行の頭取とか。或いは帽子の会社の大社長とか。大料理店、そりゃもう料理店の一番社長とかね。それぞれがまるでもうこんな風に、結局バーンと釘からビヤーと飛ばされて、飛ばされた時に次の釘に行くまでによしという訳で思いっきりバーンと飛んでいるうちにいいこともあるというようなことじゃないかと思う訳であります。そのポン、ポンと釘から釘へ飛んで行くプロセス。そのプロセス、非常に大事な青年期ということになるんじゃないかと思うんですが、私も青年期にバーン、バーンとはじき飛ばされました。一つだけどうしてもお喋りしたいことが出てきました。この話だけしておいて本論の方へ移りたいと思いますが、それはね、先程もね、コロンビア大学で勉強されて、今日本に来ておられて、そしてまもなくまたアメリカに帰ってハーバードで勉強されるシンさんというアメリカの方が皆さんと一緒に今井先生がああ言うたら、「ね、シンさん。田中先生は本当はこの人中国語の学生だったんですよ。」ゆうてまあ言われてしまって、「中国語で喋るからどうぞ」って。「いや、私はもう中国語喋れません」言われたら安心した訳ですけれども、私はもともと広島高等師範学校で中国語をやってたんです。中国語の学科に入ったんです。ところがもののはずみで心理学になってしまったんです。と申しますのは、中国語で2年生になっておった時にですね。昭和19年の秋でしたがね。先生がひょことおいでになりました、「君たちは2年からでも大学受けられるようになったんやで。」という。高等師範学校は3年から大学。高等師範学校は4年生まであったんです。4年生から大学。3年生から大学。ところが2年生から上がるゆうて先生が言いに来はった訳です。早いこと兵隊に行けという訳です。これこんな所でごぞごぞすることはないと言う訳ですね。2年生から大学に行くとゆうて決まったとおっしゃったもんですから、30人のクラスメイト——既に兵隊に行ったりなんかしまして22～3人になっておりました。22～3人で「おいおい大学どないするか。」ということにな

りまして、大学に行くについてはですね、行くか行かないかどないするか言った時にですね、みんな「どうせ死ぬんやから行こうやないか。」と。どうせ戦死することは目に見えてますからね。そんなもんですから、どんなことになつたかと言いますと、加古川中学校(今の東高校)卒業。広島高等師範学校修了。広島文理化大学1年在学中ミンダナオ方面で戦死。1行自分の死亡廣告の所に行が増える訳ですね。黒い枠がかかってどうせ死んでそのまま沖縄で死んだって出る訳ですね。その欄に1行増えるから賑やかでええやないかと。それで受けようやないかと、まあ相談で。

同じ科目に集中すると、中国語ですから漢文学科ですかね、近い倫理学科とか哲学科なんかに集中したらむつかしいから科目を割り振りしようということになりますと、おまえ漢文、おまえて皆が割り振りしていくんです。で、私の出席番号になったときにですね。誰かが「おい、まだ心理ないで。」とこういう風に言つたんです。「次誰や。」「おれや。」「おまえ心理や。」あてられてしまふた。それで私、心理。まるで冗談で、そんなもんですから全然準備も何もない訳ですね。試験なかったんです。面接だけだったんです。だから大学面接だけで入った。ていうのにちょっと珍しいやないかと思うんです。で、どうも全然知りませんでしょ。で、皆それぞれ科目ありますから私行きましたら先生がズラッと並んでまして、「君はどういう動機で心理科を受けたか。」こう言うんです。本当のこと言う訳にいきませんから、咄嗟に思い付きましたのが、「唯今戦争中です。戦場ではたくさんの兵士が頑張っております。あの戦場に出る戦士の心理を研究したいと思います。」「よし。」という訳で合格になってしまったんです。これは驚きましたね。もう驚いた。で、私は親にも内緒で帰りましたね。角帽もクソもあったもんじゃないですからね。知らん顔してそのままですから息子が大学生なつたのも知らん訳ですよね。それで学校が始まつたんですが、4月から始つたんですが、その嫌な学問やいうことに気が付いた。一冊も心理学の本読まずに受けて通つた訳ですからね。心理学の概論やら、心理学の実験とか統計とか。私は数学なんて見たらね、もう人類の敵やと思う位、数学が嫌いやね。ほんなもんですからね。機械使って実験したりね、大変かったい人生のパチンコの玉でこういうことになってる訳です。

でも、さっきも言いましたように、まあこうなったらしょうがないと。もう放った玉はこっち向いたんやから、そこを思いっきり飛ぼうと思いまして、飛んでるうちに何とか世間様でお金を貰って生活ができるようになったようなことでございました。で、気が付いたら関西学院におったということでした。広島から神戸外語大学ということもありまして、関西学院にまいって今日になっているということです。

その私が皆さん方になんてえらそうに心理学を通してお話を出来るかということですが、その後色々勉強しました所ですね、さっきも申しました通り、非常に大事なのは青年期ということですね。これはもうほんと異議がない所だと思います。

先に本論を申してしまいますが、それは結局人間の人生で私は人間のこの能力というものが本当に色々あるということですね。王選手っていうのが、昭和17、8年、15、6年、これ日本の第二次世界大戦中に王という野球のバッターの王様ですね、もし然るべき22、3歳、25、6歳ありましたら、あの人はあのボールが来たのをパーンと遠くに飛ばすそのせっかくの能力もその時代に合わなかつたから、王選手っていうのは生まれなかつたハズですよね。つまり、人間の能力というものがもてはやされるか、もてはやされないかっていうのは、たまたまその人間が生まれ合わせた地球の運行、これはちょっと大袈裟になりましたが、要するにその歴史の或いは社会のその姿と非常に関係があるってことですね。恐らく王選手はきっと王選手にならないで、どっかでごく普通の人生を歩み始めたに違いないと思うんですがね。長島にしても然りです。野球だから上手くいく可能性が残されているんですね。

人間の能力が輝くか輝かないかっていうのは、非常に社会の姿或いは文化のあり方と非常に関係してることです。

皆さん、「アーロン収容所」というあいだゆうじという大変面白い——と言ったら怒られますが、大変ユニークな発想の京都大学の西洋の歴史の専門家がお書きになりました、あの書物、色々と面白いことが書いてあるんですが、私が一番興味深く読んだのは、あいだゆうじさんが一等兵で、の人将校になる道拒みまして兵隊で頑張ったんです。試験受けずにずっと兵隊。だから兵隊で

アーロン収容所で過ごされるんですが、イギリスの女性の将校の部屋に掃除に行くんですね。あのあいだ一等兵が掃除に行くんですが、全裸の素っ裸のイギリスの女性の将校があいだ一等兵が入りましたってまるでもうネコが入って来たのと一緒に何ら反応することなしに鏡の前で裸で化粧したり何かしている。ところが、イギリスの将校が来たとたんに、全身に羞恥心を表して、ああ恥ずかしいと言ってガウンをまとったというんですね。一体おれを何やと思ってるんや。あの書物の副題は、西欧ヒューマニズムの限界と書いてありますね。イギリスのヒューマニズム、或いはヨーロッパの文明って言ったって、或いはヒューマニズムと言ったって、おれという人間を猫並みに扱うやないかと。猫と違うんやで、おれ人間やでと。しかしながら、イギリスの大英帝国のエリートにはどんなにクレームつけたって、最後まで、アーロン収容所ですよ、ずっと石の入った御飯をずっと食べさせ続けた。おれたちを家畜だと思っている。とゆって書いてあるんですね。それが一番私にはやっぱりショックだった。その次に面白かったのは、それは何かと申しましたらね、人間てのは面白いもんだと書いてあるんですね。彼の視点は違うんです。私、心理学者として面白いと思ったのはこういうことです。戦場——まだ激しく戦っておりましたその時に、その部隊の中で皆から尊敬された英雄、これは戦争がいよいよ負けてしまい敗戦となった時に、その英雄すーっと消えて行くんです。どこで消えて行くかと申しましたら、野営しているキャンプ生活の中では全然目立たない人間になってしまふんですね。そこで目立つ人間はまた別に現れる。これは何かと申しますと、その辺の村へ行きまして上手く住民と仲良しになってニワトリをそつと貰って帰って来る。その辺の穀物を上手いこともらってきて皆に食べさせて、自分はすみっこの方ですーと食べている。そういう土地の人と実に心を通わせること。その人のおかげで、その兵士のおかげでですね、何とか飢えを凌ぎながら生きていく訳です。そういうことが出来る、そういう人が輝いてくる訳ですね。今度いよいよ収容所に入ります。収容所へ入って光り輝く人間は誰かと申しますと、兵長とか伍長とか軍曹あたりでね。将校でなくってね。小尉とか中尉とか懲等の人じゃなくってまだ下士官です。下士官の方で英語は全く解らんのですけれどもばーっと身振り手振りで向こうの人と掛け合ってね。そ

して食料を増やしてきたり、上手く缶詰を手に入れたり、向こうの兵隊を騙くらかして煙草を上手いこと貰ってくる人。これが光り輝いてくる訳ですね。見事に主役が変わっていく訳ですね。

いかがですか。今日日本の社会で光り輝いている人、この光り輝いている人そもそもなくまた消えていくんですよ。昔、光り輝いていた人ありましたね。おられたらごめんなさいよ。船、鉄、セメント。すごかったね。化学。この人でないと人間でない。それはもう神戸の街は鉄と船とでした。今、見るも無残に三菱重工のドックは消えましたね。きれいに主役交代しましたね。

不思議ですね。皆さん。パーッと早く答えることの出来る人が鉄の会社のそして又セメントの会社の主役でした。ところが今は答えが出ないんですね。出ない答えを一生懸命探って、ドイツは今ドイツでなくなりつつあるんですよ。ドイツは幸いなことにＥＣ、ヨーロッパ共同体の中だから何とかいけてる訳ですが、今一生懸命世界に門戸を開いている訳ですね。そういう風に見ていくまると、この前の席の前田さんは小学校の先生になられる訳ね。小学校の先生になられて40人から35～6人の生徒さんの前で一年間きっちりと子供を教えられる訳ね、その時に子供の能力というものを今のような角度から見ましたら、一人一人の扱いはまるで違う筈ですね。つまり、この子を今の社会から見て、この子は算数が出来ないからダメだとか、この子は英語がどうだからという形で見るんじゃなくて、広い角度から見てその子に自信を与えてやらなければいけないということ。教師が生徒を期待してやると期待に応じて子供は伸びる。これピグマリオン効果というんです。ピグマリオンていうのはね、昔ギリシャに彫刻家がいたそうですよ。そのピグマリオンていう彫刻家が一生懸命きれいな素晴らしい女性の彫像を作った。こんな人奥さんにもらえたらええなって頑張っておりますと女人になる訳ですね。念じておりましたらそうなるという所から、ここからですね。バーナード・ショーがですね、あの人は「ピグマリオン」という劇作にする訳ですね。その劇作を元にして作ったのが「マイ・フェア・レディ」です。ネガのピグマリオンてのもありますね。ネガのピグマリオンてのは答えたのを無視されましてこっちいく訳ですね。「あ、そうか、うん、ちょっとはずれた。また頑張れよ。」と一声かけてドラマを展開せないかんの

ですね。授業なんてのは本当1時間ものの芝居ですよ。しかも脚本ないんです。脚本がなくてその一問一答の中からその子供を生かしてやらなきゃならない訳ですね。これが真剣勝負。もうここに上ったとたんに演者に、役者になりきらなきゃいけない。そして夫々のプレーヤーを見事に主役にしていかなきゃいけないんですね。そのような学級での教育にも限界があるってことです。何かと申しますと学校教育の中では、ちゃんと決められたものがあるってことです。又学級に相性のいい子と相性の悪い子があります。相性の悪い子は、小学校6年と中学の3年間地獄ですよね。だから学級にはどうにも救えない子がいるんですね。この子が救われる場所はどこかと申しますと、村の中にある訳ですね。街頭にある、地域社会にある訳ですね。昔だったら学校の教室でもうメチャクチャに自尊心を傷つけられても、地域社会っていうのが、人間の本当の賢さを作ったんです。学校は頭の良い子を明らかにさせるだけなんです。私、心理学で勉強しましたら、背の高さの正常分布表てのがあります、背の高い人少ないです。中位の人が多くて背の高さが恵まれない人も少ないです。身長もそうですし、体重も胸囲もそうです。上手いこと出来ていますね。これと同じように算数の試験にしても国語の試験にしましても、大体こうなりますね。中学校や高等学校で校長先生が入学の時やいろいろな時に、努力をすれば何でも出来る。嘘よ、あれ、努力しても出来ることと出来ない事があるの。これは人間の抽象的な思考能力、空間を築く能力、ああいうのは素質的に出来るのよ。勉強しなくともパッパと分かるのね。私らみたいな出来ないものは、頑張りまして覚えるだけ覚えて暗記でちょっとまあ補いをつけることが出来るけれども、この程度のもんです。努力すれば出来るっていうのは何を言うとるかと言うたら、本当に出来るんじゃなくて、努力っていうのは大事よと言ってる訳なんですね。

でも本当はそうはいかない訳なんですね。身長や体重の場合は皆さん納得する訳ですけれども、算数とか物理や何かになりますと中々こうはいかない訳ですね。となりますと学校の教師では限界がある訳ですね。もう本当限界ありますよ。どんなにやっても出来ない子は出来ないですから。

話を戻しまして、この村の主役の人、人間の本当の賢さを身につけた人たち

が本当の地域社会を支えてるよ、今。

私の小学校や中学校の同級生が加古川で市議員やったり、或いはそこで然るべき仕事をね。会社を作って頑張ってはるの。この人頑張ってはるよ。ここで頑張った人、頑張った人もありますけど、時代の波を被って引っ込んでしまった人あります。世の中が変わろうと変わるまいと、遅しく実に秀れた賢さ、確かな賢さをもって頑張っている人、この人らが地域社会を支えてるのね。つまり、この少年に、この青年に、大切なセルフコンフィデンス——自信、自尊心——セルフエスティーム。つまり、自分というものについての認知。学校はあんなんだけれども、ぼくはこんなことにかけては負けないとという自信を見事に作り上げた。これが地域社会だった。地域社会がすばらしい人間を作ったんです。街頭教育が日本を支えたんですよ。この街頭教育という柱が、ぱかっと抜けてしまった所に現代日本教育の欠陥の最たるものがあるんです。

3つの柱があります。学校教育、家庭教育、そして街頭の教育です。家庭教育も崩壊に瀕しつつありますね。家庭のない家族の時代になりつつある訳ですが、これは置いときます。問題は街頭ですね。街頭の持っていた教育力、人間形成力というものを、どうやって回復させるか。これが私たちに課せられた仕事な訳です。これは絶対無理でしょうね。ということを今から言おうとしているんです。

その理由はこういうことなんです。

つまり、これをやるっていうことは、今の日本の文化と社会に対する革命である訳ですね。チャレンジである訳です。

中内さんが流通革命でだーっと色々な商売の人とケンカしながらあそこまで行ったように、今街頭に子供が生々と動いて、その街頭がすばらしい学校教育から得られないもの、与えることが出来ないものを回復させるなんてことは、そんなことは不可能。インポッシブルの1語に尽きると思うんです。

けど、何か可能性はないか、その可能性を求めて、色々な伝統がありますよ。ボーイ・スカウトとかガールスカウトとか、その他大変な伝統を持つ色々な集団がある。一生懸命頑張っている訳ですね。一生懸命頑張っている訳ですけども、いかんせん、この子たちがだんだんと中学校あたりになりましたら、す一

っと、皆消えていく訳ですね。つまり、今の社会の価値観でいうのが見事に別の力で人間に賢さを与えよう、持たせようとするんですけれども、ぶち壊してしまってますね。そしてあの高等学校のあの堅固なあの要塞の中に入り込んでいきましたら、見事に序列で人間を見るようになってしまってますね、そしてそれぞれの人間を失意に陥れていくんですよ。

すばらしい地域社会というのはどういう要素を備えていかなければならぬかということですが、皆さん居住している所を思い浮かべていただきながら、すばらしい地域社会とはどういうものか、私が今から4つの項目に即してイメージを反芻して下さい。

まず第1番目は何かと申しますと、ごく平凡なことですけれども、やっぱりさんさんと輝く太陽、そして水、そして空気。こういう物理的な条件が満たされているっていうことが、やはり大変大切な要素であります。太陽、水、空気というようなことですが、美しい山、川、すてきな太陽、水、空気ということで代表しましたけれども、大切なことは、すばらしい家並みとか、きれいな街路樹、すばらしい公園、道路、或いは真っ青の空、とういうことになる訳ですが、これは非常に大切ですね。これが大変秀れているということが、すばらしい市民、或いは町民、或いは村民を作るということだと思いますね。

シンガポールの美しさ、リ・コンユというすばらしい首相の下で、もうシンガポール中が、あの島中がほんとガーデン、シティ、公園そのものですね。きれい。これが同じマレーシアの国だったとは思えない。マレーシアのクワルプールの人も立派ですよ。立派ですけれども、もう徹底的に違う訳ですね。同じマレーシアだったんですよ。マレーシアからぼんと飛び出してシンガポールを作ったこの人、リ・コンユ。これは徹底的に、パーカクトに美しい島、シンガポールと。ものすごい美しい、だけれども大変ごみごみしている香港。同じ中国系の人 beaucoup ございます。まるで違いますね。土地の条件によりまして、街路があんなにきれいになる。街中がこんなにきれいになる。そうはいかない。皆政治、経済、色んなこと関連して出て来る。目の前でそれを見る訳ですね。東南アジアと一口に言えないと、皆別々の顔であるわけです。

太陽、水、空気。これが市民を作っていくんですね。またそれを市民が作っ

ているんですね。そこにものすごく大きな要素、何であるかと言うと、ペナルティですね。煙草を捨てたら、或いは紙を捨てたら大変な罰金を払わなきゃいけない。罰金を払うか払わないかでは、人間ていうのはどれだけ変わるか。どうですか。自動車のシートベルト。一遍にばっと掛けましたね。適当にやつたらよろしいと誰も掛けてないね。いかにペナルティっていうものが人間でものを変えるか。つまり、法律の制度っていうものがどれだけ変えるものか。日本は、色んな点であんた方の良識に任すよってなことの為に、大変な亂れがある訳です。日本もきれいですけどね。これやっぱり大事ということですね。

2番目は何かと申しますと、太陽と水と空気だけではすばらしい地域社会になりません。仕事に恵まれているってことでないといけない訳ですね。仕事がないとどうしようもないってことです。

3番目ですね。人間関係ですね。人間関係がすばらしいものではないといけない訳ですね。太陽、水、空気が、仕事があっても、人間関係が好ましくない地域社会では住んでおれませんね。おれたもんじゃないですね。

4番目は何かと申しましたら、やっぱり人間関係良くって文化。文化って言ってもこれも難儀なことでありますて、すぐ思い浮かべるのは図書館とか或いは博物館とか美術館ですがね。中々そうはいきませんが、もっと身近な所ね。そうね、やっぱり半年に1遍位、そこまでいかなくても4週間に1遍位は夕食を2時間位かけてするような場所がある。つまり、晩ごはんなんてものは、食べ終えたらぱぱぱーときつねうどんとかカツ丼なんてものは、ものの10分で済ませられるね。ところが欲望の充足をずっと延ばして、最初にちょっとしたつまみが来まして、何か飲物で、その内にこの皿で、最後にデザート。ずっと1時間とか2時間になる訳ですね。つまり、欲望の充足を延期する所に文化がある訳です。あーすてきだった。しかも景色はよろしい。ポートピアホテルのスカイラウンジ30階、ばーっと神戸が見えておりますしね。「すてきやね。写真でも誰か映して。」私が主役やてな感じや。お互い同士二人で行きましたら、お互いが主役と観客。しかも大事なことは人芸関係。「あの人暇そうな。2時間もかけて食事に行ってた。贅沢な人や。ほんま人の気も知らんて。」言う市民がおったらおもしろうないですね。「行ける人は行って、行って、行ってよ。

私もその内に行くさかいに。」と言うのが冴えた市民やね。人間関係と文化併せながらですね。文化っていうのは何も美術館だけのことやないっていうことです。ちょっとした食事、或いは、家族の者が自転車でわーっと遊びに行く。「わあーいいな。私も頑張ろうね。」っていうような、つまり自分がまあ良かった、楽しかったと思うこと、その営みが文化っていうことですね。そのことの為に色んな美術館とか上等のものが出来ますけども、それだけではないということですね。ですから、それを許す。しかもそれをやっていけるだけの財力が、仕事が、お金が貰える。それを支える舞台装置がある。そういう意味では、私は神戸に住んでおりますが、この間も神戸市民の調査をしたんです。選挙管理委員会が、そしたらね。生活に不安があると言って生活不安を討えられる方が、神戸市政に満足してはるんですよ。生活に不満があって不安があるという人が、神戸市政に満足しているというのは、私びっくりしましたね。神戸市というのは上手いこと市民を騙して——騙していい方悪かった。上手いこと満足さしてはる。生活は不慮と不如意だけれども、神戸市民であることに誇りが感じられる。これは不思議でしたね。これ宮崎市長聞かれたら喜びはあると思いますね。いずれ新聞に出ますけどね。まあびっくりしましたね。何でか言いましたらね。神戸という街はね、色気——女人の前で色気って言い方したらあかんかね。つまりね、為れてるの。何が為れてるかって言いましたらね、まずこれね。六甲山脈がありまして、山系がありまして、ずーっとね、女性のスカートのひだを広げたような姿。斜めというのが、これが色気なのね。踊り子号という電車ご存知? 踊り子号っていう電車はこんな電車ですが、こんな斜めの線が入ってますね。車両に。これ水平やったら全然色気ないですよ。斜めは色気。要するに、装置そのものが斜めになっています。そこへ、横のビルディングなんか全然おもしろくない。昔の市役所なんか全然おもしろくない。この線にものすごく合うのは何か言いましたら、こう高い建物ですね。今、縦が突き刺すように建っていく訳です。今から何十年後に、香港に負けない夜景が出来るかと。ただし日照権の問題がありますからね、日本の場合は。太陽が欲しいですから。あの香港みたいに行かないかも知れませんが。突き刺すようなのが出来てきた。これすごいですね。こういう装置ですね。これ言い出したら

切りがないんですが、どういう風に発展したか。0mから異人館に上がりまして、異人館からずーっと神戸大学の方に上がりまして、上がったのをこの辺の土をずっと持って来まして0m来まして、0mからこの高さ作って、そっから眺めると0mから800m位、中距離と遠距離と上手いことやって来た訳ですね。そういうこと言ってますと切りありませんが、私は今年の心理学会から、今から20回から30回かけましてですね。今年の末、4人で発表するんです。私の研究室あげましてね。第1歩、第2歩、テーマ“神戸市民の研究”。これからも本心理学会ですーっと発表していきます。出来上がりましたら一つの書物にまとめてみるとね。神戸市民というのは、誠に研究に値するんですね。

2番目になる訳ですが、人間関係宿題に残しておきました。人間関係から地域社会を眺めます。そうしますと、こういう風に4つのタイプがある訳です。縦軸は何かと申しますと、地域社会にいる人を大切にする。反対は無視したり大切にしない。横軸は何かと申しますと、知っている人、知らない人。さあ簡単に、大切にする、大切にしない、知っている人、知らない人、この2つの軸で4つ区切りました。

この軸は何かと申しますと、知っている人を大切にする。そういう地域社会。ですから知らない人は大切にしない、じゃなくて知らない人はいないんです。

それに対しまして、知らない人を大切にする。これが世間で言うコミュニティ型。

昨日でしたかね。エスカレーターで下からすーっと歩いていきましたらですね。前でお喋りになっておられました2人の方がですね。1人がすっと前を開けて1列になって、私がとことこと何の気なしに上がって行きましたら、ぱっと開けてくれはったですね。知らない人ですよ、全然。知らない人を大切にする。これが本当の市民なんですね。こんな市民がいる町ってのは好きですね。全く知らない人がすっと知らない人に譲る。これはコミュニティ型。

ところがですね。知らない人を大切にしない。これが権利型地域社会。権利ばかりを主張しまして、知らない人を大切にしない。権利型の地域社会。或いは利己型とも言いますが。ちょっといがみ合ったというか、ちょっと難儀な団地という場合はこういうことになります。それに対しまして、難儀な団地、

ちゃんとしたリーダーが現われてちゃんとしたらいいんですが、そうじゃない場合、権利ばかり主張しだして何にもしない。役所にとって1番やりにくい相手、地域社会です。

その次はですね、無秩序型の地域社会です。これは何かと言いますと、知っている人を大切にしない。これは知っている人でも無視する訳です。無秩序型いちいち地域挙げますと具合が悪いんで止めときますけど、要するに無秩序。無茶苦茶な所。知っていても、知らなかっても無茶苦茶という地域ですね。

で、これ私簡単に言ったんですけど、社会学者はむつかしく申しまして、これを連帶的、或いは能動的。積極的に働きかけて大切にする訳です。私はこんな言い方したんじゃピンとこないんです。自分がピンとこなければ人もピンとこないだろうと勝手に思いまして、これを表現を大切にするって言い直しました。

反対に大切にしないのは、これは何かと申しますと、大変個別的で勝手です。個別的で、そして非常に受け身ですね。受動的です。パシティプ。アクティブであるのに対しましてパシティプ。

知っている人というのはです。知っている人だけというのは閉鎖的です。非常に閉鎖的で、非常に昔からの人だけで伝統的で、ということですね。閉鎖的で伝統的。

知らない人も、というのはどういうことかと申しますと、非常に解放的で、進歩的。

このようにいろいろの地域社会のある事を覚えて、21世紀の住みよい社会づくりをしっかりと考えてゆきたいものです。

## 国際理解



神戸大学学長

新野 幸次郎（神戸）

1868年というのは明治元年でございますが、もう既にイギリスは完全に資本主義経済として成長しておりました。それより少し前にイギリスは地下鉄をつくっておりまして、1963年がロンドン地下鉄の一部の百年祭であったわけです。そのころの地下鉄は蒸気機関車が走っていましたが、そのころに日本はやっと明治維新で資本主義化のスタートを切ったわけであります。

その当時、我が国は封建社会からやっと解放されたときでございますから、先進国に追いつけ、追い越せ、何か学んでいこうというのが最初のスタートになりました。したがって、これから政治家になる若い青年たち、殊にリーダーシップをもてると思われた青年たち、後に総理大臣になった伊藤博文らかなりの者がヨーロッパやアメリカに留学をいたしました。チョンマゲをつけて、刀を持って留学したわけですけれども、今の留学よりもっと徹底して勉学して、1年や2年で帰ってくるのではなく、何年も向こうで、向こうの人に交わって勉強して帰ってまいりました。そういう意味では、そのときから国際理解というのは大変な課題でございました。

それから37年たった1905年は、日本が初めて外国と戦争して、アメリカや何かの援助を得て世界の人々がびっくりするような勝利の機会をつかみ、日露戦争に勝った年でした。それから40年たった1945年は太平洋戦争が終わった年でございまして、日本は初めて徹底的な敗戦を経験することになります。それから本当の意味で日本人の今日の幸せを獲得する道がつくり上げられたと言って

もいいと思います。1945年というのはアメリカが世界をリードしていたときでございまして、それから40年今まさにたとうとしているわけです。

そういうように考えてみると、なぜ今「国際理解」というのをもう一度考えなくちゃならないかというのを見てみると非常におもしろいこと気がつきます。1960年という年に日本は世界のG N P のただ3%しか占めていない小国にしかすぎなかったわけですが、その後、60年代というのはテレビが出てきて、「Golden Sixtieth」と言われた年です。世界の成長率が全体として5~6%ぐらいであったのが、我が国は平均して10%の成長率をずっと確保しました。1980年になると、我が国は12%ぐらいの比率を占めるようになってきております。1960年にアメリカは世界のG N P の33%で日本の11倍のウエートを持っていたのが、1980年に22%、そのとき日本は10%でした。それは一体何を意味するかというと、人工はほぼアメリカは日本の倍ありますから、1人当たりで計算をいたしますとほぼ並ぶようになります。そこえ円高になってきます。したがって、1982年とか83年の数字で見ますと、パワーキャピタルでいうと日本の方がむしろアメリカの所得よりも高いというような計算が出てくるようになってきました。

ここまでなってまいりますと、今や日本は、小国でいろんなことでまだ国際的に役に立つ能力は持っておりません、というようには言えなくなつてまいります。この時期に日本の国際公共財あるいは国際公共差というもので比較しますと、日本はまだほんのわずかしかウエートを占めておりません。日本が世界のG N P の大きさ、すなわち、大体12%ぐらい占めているものというのは、わずかに国連の分担金を13%ぐらい占めているだけです。アメリカが20%ぐらい占めてますから、アメリカに次ぐ負担はしているということにはなるのですが、しかし、日本が本当の意味で世界の経済や社会、殊に政治の世界で占めている比率というのはほんのわずかしかなく、その一番象徴的なのは軍費です。軍事費のウエートは、我が国は1%を上回るか上回らないかというので非常に議論になります。ところが、国によっては8%とか10%というG N P の中のウエートを占めて世界の平和のために軍事費を分担している国がたくさんございます。日本はそれを1%しか持たないで、その残りはもっぱら経済開発の

ために、しかも自分の国の経済発展のために使っている。その経済発展の結果、世界の貿易収支の中で日本だけが非常に巨額な黒字を持ち、ほかの国は赤字が多い。そういうことになるのも、世界全体のために金を使おうとしないで自分の国の経済の発展のためだけ金を使おうとしているからで、そういう態度をやめてほしいというような気持ちが非常に強くなる。もちろん、軍事費の負担をふやすことがいいことではなくて、本当はアメリカやソ連が今長距離ミサイルの削減をしようということからもわかりますように、何らの生産的意味のない軍事費をふやしていくということについては、経済をお互いに悪化させるだけであって何のプラスにもならないということはよく知られていることですから、その線を世界全体で今後強化していくことは非常に大切なことなんですが、しかし、今どこかで必ず小さな戦争が起こっている状態を考えるとき、軍事なしに経済発展にだけお金を使う国があるとすれば、世界全体の中で非常に問題にされるということも否定できない事実であるわけです。

こうしてG N Pで非常に大きなウエートを持ち、今や我が国は世界の中である種の役割を要求されるようになってきた。その一番象徴的な数字が、貿易に関連した経済収支の黒字ということです。我が国は昨年900億ドルの黒字を持つようになりました。それに対して、かつて世界をリードしてきたアメリカが、80年代に入ってからいつの間にか1,500億ドルの赤字を持つようになりました。こうなってきますと、かつてO P E Cが石油の値段を4倍に引き上げて黒字を一方的に握り石油ショックと言われた時期がありましたが、あのとき世界じゅうがO P E Cの国に、その黒字を世界全体のために使ってくれるべきではないかという要求をいたしました。にもかかわらず、O P E C諸国は当時世界中のビルやホテルを買い占めました。それと似たようなことを今日本はやっているわけです。こういう状態になってきますと、アメリカやイギリス、E Cの諸国が日本に対して、もっと国際的な貢献をすべきでないかというような主張をするようになってくるのは否定することができない事実のように思います。

ところで、「国際理解」というのは一体何だろうか、何が要求されているのだろうかというのを考えてみると、非常に難しい問題があることに気がつきます。「国際理解」というときに、日本を中心にして考えてみると、まず一つは、

日本人あるいは日本という国を他国の人はどういうぐあいに理解をしてもらえるかという問題があります。同時に、そのためにも日本人が外国人あるいは外国をどのように理解するか。「国際理解」というときにこの二つの側面があるわけです。

他国の人を理解するというのがどんなに難しいかというのは、皆さんが経験なさっていることです。それにはいろんなことが考えられますけれども、一つの非常に簡単な条件というのは、自然的な条件が違うということです。例えば、島国とそうでない国とでどれだけ違うかということがよく問題になります。今から20年ぐらい前、イギリスが当時のE E Cに加盟しようという申し出をしました。ところが、当時のフランスの大統領のドゴールが拒否しました。ドゴールがイギリスのE C加盟を認めないといった一番大きな理由はイギリスは島国だと。その裏側には、E C諸国というのはロシアから過去何世紀の間に2回の侵略を受けて大変な被害を受けている。E Cの中の国々もお互いに、ドイツからもやられましたし、ベルギーはフランスからも何回もやられてますし、お互いに戦争によって被害を受けている国である。ところが、イギリスは島国だから、古い時期に侵略を受けたことはありますが、それから後ほとんど外国から侵略を受けたことはない。したがって、国際的理説が少ない。例えば、ソ連に対する態度でも、イギリスは非常に友和的である。ところが、自分たちはソ連から何回も侵略を受け、にがい目に遭わされている。それがイギリスにはわからないんだ、そういうのを一緒にするわけにはいかないというのがドゴールが言い出した一つのポイントだったわけです。

これと同じようなことは、最近ではイラン・イラク問題で専門家が言っております。私どもは、イラン・イラク戦争がどうして起こって、こういう形でいつまでも限りなく続くのだろうかというのはなかなか理解しにくいわけです。日本人には、イラン・イラクの関係というのはなかなかわからないというのが専門家の言い方なんです。それは、日本は島国で、陸続きの国々がヨーロッパでどういう憎しみと反感を持ちながら生き続けていくかということはとてもじゃないが理解できない。かつてペルシャがアラブに襲われて戦争に負けた結果、ペルシャという国はイスラム教徒に改宗させられた。イスラム教徒になったペ

ルシャの人々は、アラブに対して非常に強い反感を持ち続けることになります。一たん陸続きの国々が宗教や何かでやられて戦争に負けたりしますと、その憎しみは民族の血が続く限りなくならないとよく言われます。千年でも二千年でもそのポリシイが続いていくんだと。そして、今、アラブの国の中で一番大きなイラクはアラブ社会主義の国で、宗教は認めない、イスラム教徒に対しても弾圧をしていこう、サウジアラビアの近くの面積は広くても国としては小さいクエートなどの国々を全部社会主義の方向に持っていこうという運動を一生懸命やっている国です。その目標を実現しようと、無信論で米英の力を徹底的に排除することをねらいにして動いている。ところが、イラクの人口の60%はシーア族と言われるイスラム教徒なんです。イランの方のホメイニさんはそのシーア族のイスラム教徒を基盤にして政治をやって、いつかイスラム教徒として権限を中東地域で確認をさせて政治をリードしようとしているところですから、簡単にはほっておけないということになりました、今日のような戦争がズルズルと続していくことになるんです。こういう関係というのも、島国ではとても考えられない。他民族によって侵略を受け、血のにおいのする中で育ってきた民族でないと、とてもじゃないけど他国を理解することはできない。そういう関係ができ上がっているところとそうでない国、そこには国際理解ということについて断絶的な違いが出てくるというわけです。

鈴木秀夫さんという東大の地理学の教授がNHKブックスに「森林の思考・砂漠の思考」という本を書いていらっしゃいます。古代に地球上が氷河に覆われる時期がありました、そのときに日本の中北部から西は氷河期を経ずに森林が残ったままに過ごしてきたということが言えそうであると、こういう一つの仮説なんです。ヨーロッパのギリシャからアラブの地域にかけて全部氷河の中に埋もれてしまい、氷河期が溶けた後その地域には乾燥期が来て砂漠に変わっていった。アラブ地域というのは今だにそうですね。そうすると、砂漠に変わった地域では人間の考え方、「エントベーザーオダー」という言い方がありますが、「あれかこれか」という発想が成立するようになってくる。なぜかといいますと、できるだけ生きていこうとすると、砂漠の中ですから、オアシスはどこにあるか、水はどっちの方向にあるかということをできるだけ高い

ところに上がって眺望して、水のありそうなところをいろんなことを考えて「あれかこれか」というのを二者択一的に判断して選ぶことになる。もしその判断を間違いましたら、水がないのですから、彼は死を選ばなくてはならない。二者択一の「あれかこれか」というのは徹底的に論理を考える、筋道をつける、そういう発想がヨーロッパの人類の発生の地域に成立してくるというのが鈴木さんの仮説です。

それに対して日本人はどうなったかというと、氷河期にもかかわらず森林が残っておりましたから、したがって、森や食物も生えておりますし、動物も一部そこに残ってくるということで、彼らは上に上がらなくても、下から上を見るような生活になって、自然と一緒に共生する生活を経験することができるようになりました。そこで「あれかこれか」ではなくて、「あれもこれも」という発想の仕方が日本人特有の考え方になったというのがこの人の仮説なんです。そういう意味ではおもしろい学説というよりも、一つの説明の仕方なんです。

これは何を言おうとしているかというと、月を尊敬する社会、太陽を尊敬する社会、島国、大陸国、陸続きの国、そういうことで人の考え方、憎しみの持ち方、いろんな経験の蓄積の仕方が違っておりますよということの一つの言い方と同じことですね。氷河期から人類がやっと生まれて生存するようになるときの物の考え方、発想の仕方がヨーロッパとアジア、殊に日本と違うという説明ですね。私もずっと前に船でイギリスまで行ったことがあるんですけれども、その途中にサウジアラビアの一番下のところのアデンに寄ったことがあります。そこは港に上がって本当にびっくりしましたのは、陸地がほんのわずかあるんですが、それから上へ上ると全くの砂漠の中なんですが、こういうところで生活すると考え方方が違ってくるだろうなという事を実感いたしました。

同じようなことは、価値の持ち方というのが国によって非常に違ってくるという事にも言えます。何が一番大事かということについての考え方が日本人と中国人とも違いますし、イギリス人、フランス人、イタリア人ととの間に大きな違いがあります。これは一つは、宗教の違いとも非常に密接な関係があるし、宗教の違いがまた地理的条件や支配、非支配の関係等々の違いから発生しているのではないかというようなことは十分理解できることです。そういうこ

とと関連して、社会構造が、人と人との関係というのが非常に違っております。そうなると、「国際理解」と一口に言いますけれども、他国を本当に理解するというのは大変難しい問題であるということがしみじみ実感できるわけです。

私どもも外国人と割に長いつき合いを持っておりますが、本当につき合うと人間というのは差はないということは思うのです。しかしそれは、いろんな相手の批評をしたり、批評されたりしている中でこういう関係ができ上がるんで、言い合いをしない関係の中で理解をするというのは非常に難しい。イギリスに最初に行ったときに、親しくなってから言われたことがあるのですが、イギリス人に会うとなかなか家に呼んでもらったり親しくはなれない。しかし、本当に知合いになって家に呼ばれたら、なかなか外に出られない。一たん家へ入り込む関係ができるようになるとなかなか出してくれませんよ、こういう言い方になるんです。ところがアメリカ人は、と彼らは言うんですが、アメリカ人はすぐ家に連れていいくけれども、気がついたら外に出てたとイギリス人は言うわけですね。そして、自分たちがアメリカ人とどれだけ違うかということを人間関係の中で言おうとするのですが、それはちょっとオーバーな言い方で、本当は、つき合ってみると余り差はないと思うんです。しかし、そこまで差がないと言えるようになるまでには、大変な努力をしてつき合っていかなくちゃならないということがわかります。

次に、他国の人自分たちを理解してもらうことがどれだけ困難かということの若干の例を挙げておきたいと思います。人間はよく自分では自分の姿は見えない、自分の姿を見ようと鏡に写して見るしかない、あるいは、自分が他人にどういうぐあいに写っているかということで自分で判断するしかないというようによく言われます。それは一体何を意味するかというと、自分の中にあるものは外に伝わるものでしか表現できないということですね。外に伝わるものというのは好意しかないわけです。顔形というのはすぐわかりますけれども、これがどんな人間かというのは、その人がどんなことをやっているかということを理解する以外にはその人を理解してもらえない。言葉で幾らいいことを言っても、その人がどんなことをするかで本当の判断が決まってくるということです。そういう意味では、日本人はつい「済みません」とよく言います。

なまじっか英語を知っているものですから、「I am sorry」とかやるんですが、向こうでは「I am sorry」には二つの意味があります。「大変お気の毒でございます」というときも「I am sorry」なんですけども、もう一つは、「私に責任があります」「私が悪いんです」と言おうとする「I am sorry」があります。私どもはどっちの区別も余りないわけです。ただ何かあったら「済みません」と言っとけば、向こうもそれで何となく理解してもらえるだろうというので「済みません」という言葉を言いますけれども、ヨーロッパで「I am sorry」と言ったら、例えば、自動車事故でも何でも、あなたが責任あるということを自分で認めているんだということになるわけですね。そういうのは論理の答えです。「あれかこれか」でいうと、「I am Sorry」と言ったのは「私に責任があります、あなたではございません」ということを自分で認めているということです。日本人が「I am sorry」と言うときにはそれほど深い意味がなくて、ただ「ちょっと済みません」とニコッとする程度の挨拶のつもりで言っているんですが、これでは相手は理解してもらえないですね。「sorry」と言ったら自分に責任があります、大変残念に思います、ということをはっきりと言っていることになります。

さらに卑近な例を二、三取りあげますと、日本人は会議の席上でもいつもニコニコして何も発言しない、わかっているのかわかっていないのかしらないけれども、顔を見たら大体ニコニコしている。そして、何も言わないで帰って行く、話し合いをしているときに黙っていることはないでしょう。必ず意見というのはみんな違っているはずだ、それを言わないトーキングというのではないんです。それを黙ってニコニコして帰るというのは、人の意見だけ受けとめて何か役立てようとして、自分は人に言わないでおこうというけしからぬ精神の表現であるというような受け取り方をよくやられるときがございます。これなんかも大抵、日本人の多くは英語やドイツ語がよくわからない。しかし、ぶっきらぼうとしておったらぐあい悪いからニコニコしていて、しゃべろうと思うだけれどもチャンスがない。しゃべってもよくわからないだろうと思うと、結局、黙って「thank you」とか言って帰ることになる。それがけしからぬというわけです。向こうからしたら、そんなことするならこの会議に出てくるなど

いう言い方をされることがあります。

それと、いろいろ言葉では言うけれども、実際にはちゃんとやってくれないと。殊に日本語は変な言葉が多くて、「考慮しましょう」とかいうような事を日米経済交渉というようなところでいう。日本語で「考慮しましょう」というのは「頭に置いておきましょう」という程度であって、「考えて何かしましよう」というところまで意味がないわけです。ところが向こうは、「考慮しましょう」と言ったら、必ず何かの政策的反応を示してくれるであろうと判断する。ところが何にもしない。口だけ約束して何もしないじゃないかという批判が出てくる。

こういうのを見ておりますと、相互理解、国際理解というのがいかに難しいものであるというのは、言葉で説明する必要もないほど大きいものがあるよう思います。

これも一回読んでみてもらうと絶対におもしろいと思いますのが、杉田さんという東京医科歯科大の本当は歯の先生なんですが、そのうちにあることから自分の研究と関連があって脳生理学に興味を持たれまして、「日本人の脳」「統・日本人の脳」「右脳・左脳」等々幾つかの本を書いていらっしゃいます。「統・日本人の脳」の方には、CTスキャナーの写真まできれいに出ておりまして、なるほどと思わせる実証データも出ております。しかし、この学説も、私どものところの脳生理学の専門家に聞きますと、すべての脳生理学者が「そのとおり」といって確認をしている議論ではございません。その意味では一つの仮説として考えてみていただくといいと思います。この人はどういう研究をやったかというと、脳には右脳と左脳とがあります。日本人だろうと外国人だろうと、右脳と左脳のファンクションというのは、基本的な人間として変わってはいないはずです。ところが、非常に興味のあることは、日本語の性格と外国語との違いもありまして、母音が日本語というのは非常に多い。そういうこともあって影響するんだろうというのでいろんな研究が従来から積み重なっているわけですが、左脳というのは言葉を話したり、物を考えたりするような機能を主として優位的に分担している脳の部分である。右脳の方は、それに対して直感的にパッと物を見たり、印象的に全体を把握したりというようなことを

やるのには非常に優位に働くような機能を分担している。例えば、物を考えたり、論理を考えたりというのは大体左脳にいき、何か全体の景色をパッとつかんだりというのは右脳の方で働く。左脳の方をデジタル的というとしたら、右脳の方はアナログ的である。そこでこの人は、前は脳波で研究なさったのですが、最近ではC Tスキャンによる実証研究を行われていますが、日本人の物の考え方とか外国人の物の考え方を脳の反応を見ながらいろいろチェックをしていかれるのですけれども、その中で音楽というものが非常に特徴的なんです。音楽は、西洋音楽は日本人も西洋人も右脳に大体において反応していますが、例えば、虫の鳴き声、尺八の音、三味線の音というような日本音楽とか自然の音とかいうのは、西洋人にとっては西洋音楽と同じで右脳にみな反応が起こっている。ところが、日本人に同じ虫の鳴き声とか水のせせらぎの音、三味線、琴、尺八の音だとか聞かせると左脳に反応する。どうしてそういうことになるのだろうかというのをこの人は疑問に思って研究を始めたんです。

そこで、両親は日本人で、外国で生まれて、あるいは小さいときに外国に行って外国で育っている子供たちに同じ実験を繰り返してみたのです。そうすると、血液的には日本人に絶対間違いないんですけども、どういうわけか外国人と同じように全部右脳に行き、日本人の親たちと違って外国人と同じ反応しかしない。親たちと血液の違いは全然感じられない。違うとしたら、この子たちはカバーとなって親とけんかでもしようというとき、気分が高揚したときは住んでいる国の言葉で語りかけるわけです。日本語はもどかしくて、ドイツで生まれ育っている子はドイツ語で、英国で育った子は英語で、フランスで育った子はフランス語で肯かする。そこでヒントを得たんですが、これはきっと彼らがしゃべっている言葉と関係があるということです。そこでこの人の仮説は、日本語と外国語の違い、そこに日本語の脳の働きと物の考え方の違いとが出てくるんじゃなかろうかと考えたんですね。あとは推論ですから、実証研究というわけにいかないので、仮説にだんだんとなってしまうのですが、その議論でおもしろいのは、日本語というのは漢字と片仮名と平仮名からなっていますが、平仮名、片仮名は表音文字ですが、漢字は象形文字なんです。そういう意味では漢字はアナグロ的なわけです。実際にある物を形を象徴的にしていく中

で文字ができ上がった。その文字を見るとある状況をパッと思い浮かべるようになります。ところが、外国語の言葉は、ハングル語などは決定的ですけれども、英語もドイツ語もみんな表音文字です。文字というのは大体論理を考えるために人間が工夫してつくり出したものであります。表音文字というのは論理の世界、あれかこれかを決めていく、あるいは推論していくための手段。ところが、漢字というのは象形文字であるために複雑な機能が加わってまいります。日本人は中国から文字を教えられて覚えたんですが、万葉仮名というのを日本語にだんだん簡単に翻訳していこうとして平仮名ができ上がり、片仮名は僧が中国の経を勉強していくのに、難しい字を全部覚えるのがなかなか大変なものだから省略後をつくり始めた。それで日本の表音文字の大系はでき上がったわけです。他方で、同じ「イ」といいましても、日本語の「イ」には沢山あるわけですね。一番いい例は「アイ」を考えますと、「愛」から「哀」からたくさんあります。表音文字としての「アイ」はみんな同じなんですけれども、象形文字は全部違うわけです。そこで意味合いを思い浮かべながら言葉を選んでいかなくてはならないことになります。それは一体何を意味するかというと、一方で言葉の本来の目的である論理をつかまえようとする、同時に他方で象形文字と関連していつでも日本人は「愛」と「哀」というように意味は全然違いますから、頭にパッと浮かぶ状況というのは違っており、そのために非論理が頭に浮かびます。そうすると、日本語でしゃべるのだから、いつでも論理と非論理とが一緒になって頭の中を動いているわけです。

そこではどんな違いが出てくるかというと、自然条件が違うためにヨーロッパの人々は言葉でいうときは筋をあれかこれかということをはっきりするために、論理を展開するために言葉を使うのですが、日本人は物を説明したりしてゐんですけども、いつでも論理と非論理とが一緒になって動く可能性が非常に強い。そういうぐあいにあるのが日本人的であるというように思っている日本人も多い。これは職場の中に、あるいは一つの組織の中でどんなことが起こってくるかといいますと、決定的に論理を展開しなくちゃいけないときに、論理を厳しくずうと迫ってくる人というのは日本人的じゃない。いいかげんそれまで追い詰めたらそれ以上は言わぬでいいじゃないか、そこはそれこそ愛で包

んでくれていいじゃないか、そこまで問い合わせなくていいじゃないかというように思うのが多くの日本人の発想になってきました。筋道を立ててとことんまで推し進めてくる人というのは日本人的でないという発想がどうしても生まれてきます。そこそこで引き上げる、これ以上もう言わぬところ、そういう態度にある人が日本人的でゆかしい人間的な人だ、そういう考え方です。

私どもが「国際理解」という問題を考えるときに、日本の社会、日本の組織の中で論理と非論理とを一緒にあるところまで働かせてほどほどに済ませようという精神が働いている間は、外国人には理解できない社会である。議論するなら徹底して、私の間違いをあなたは言うべきだ、あなたはおかしいと思っていることを説明するのがあなたの立場ではないか、それをいいかげんにして私の意見だけ聞いて帰ろうというのはおかしいではないかという考え方がどうしても成立しております。これは、これから皆さんが将来国際人として世界の中で生きていかれるときに、人間の生き方の問題と、外国人と接触してある議論をするときに徹底して意識しておかなければならぬ重要なポイントのように思います。

そこで、国際理解のためにはこれから日本人はどういうぐあいにしていったらいいのだろうかというのを少し考えてみたいと思います。

ことしの1月から内閣官房長官の方で国際化の問題を本当に進めていくためにはどうしたらしいのかということで数人で懇談会を開いてきているのですが、私はそこで留学生の問題についてお話をし、いろんな問題提起をして、6月には方針を取りまとめて内閣の方でそれを整理しようとおっしゃっているのですが、この間もちょっとと言いましたことは、数年前に中曾根さんが留学生を10倍にしようと言ったのを覚えていらっしゃると思うが、今アメリカが32万5,000人ぐらいの留学生を世界の国々から集めているんですが、中曾根さんがそれをおっしゃったときに我が国では1万2,000人ぐらいしかまだ留学生はいなかつたんです。そのときフランスは11万人ぐらい、ドイツでは5万人、イタリーでも4万人ぐらいは留学生を持っていたわけです。それから後急速に我が国では留学生がふえてまいりまして、昨年5月1日の統計では5万2,000人になっている。しかし、フランスの数も12万人ぐらいにふえていますし、アメリカも

33万人以上にふえてきているわけですから、その計算でいくと我が国も16万から17万ぐらい留学生を引き受けてほぼ同じぐらいの比率ということになるわけですが、2万2,000人しか持っておりません。しかも、数ではなくて、四つの点で大きく問題があるわけです。

一つは心の問題、あるいは留学生に対する接し方の問題です。神戸のYMC Aでは、長い歴史を持っていらっしゃるクロスカルチャーセンターがあって、そこでホームビジットのシステムを大体200家族を超える組織をおつくりになって非常に努力をしていただいている。これは、神戸にいる留学生だけでなく、大阪、京都にいる留学生まで相手にしていろんなお世話をいただいているわけでございますけれども、しかしながら、日本には本当の意味での外国人の留学生に気持ちよく接してあげるという組織が完全につくり上げられているとは言えません。アメリカに行きますと、私も最初に行ったときは国務省招待で行ったものですからびっくりしたんですけども、アメリカ全土に国務省で招待した人を受けとめるいろんな組織ができ上がっているわけです。どこの町に行きましても、お迎えから、夜の食事から、美術館の案内から、その人たちが奪い合ってやってくれるわけです。日本ではそういうことにまだ訓練ができるいるとは言えません。クロスカルチャーセンターというようなケースが本当に代表的なものになっている状態でしかございません。これから5倍にふえたとして10万の留学生を日本人の家庭が人種の違い、生活慣習の違い、物の考え方の違いをちゃんと理解をして対応できる心のつながり、人間的つながりを持てるかというと、非常に危惧がございます。

第2番目に制度的な問題がある。例えば、奨学金の制度、住宅制度、こういう点で日本は外国人留学生に不満のないようなことをやれるようになっているのかというと非常に大きな問題がたくさん残っております。今、文部省の国費留学生には、大学院生に対しては17万7,500円ほど払うことになっております。この金額は、今や世界の国費留学生の金額にしたら一番高い金です。ところがよく考えてみると、日本の生活費はものすごく高い。例えば、飲食費は大体アメリカと比べたら2~3倍高いですね。コーヒー一つでも、70セント出せばアメリカだとコーヒーショップで何倍もコーヒーが飲めるが、日本ではちょっと

したところでも300円です。 こういうのが実際の状態だと考えると、金額で世界一の奨学金を出しているから非常にいいというわけにはいかないです。まして住宅状況を考えると非常に問題がある。アメリカでも住居の高い地域もありますが、しかし、大学の寮が完備していて、しかも、私の知っている限りでは、アメリカの幾つかの大学で日本人の留学生が入れてもらいますと、寮ではアメリカ人の学生と一緒に住まわせるのが多いですね。外国人と一緒に生活して国際理解をしながら毎日の生活をしていく。そういう点が我が国では非常に欠けております。 神戸大学でも300人をちょっと超える留学生なんすけれども、文部省がつくってくれましたリターンセルレジデンスというので研究者の人も含めて126室しかないわけです。 多くの人々は2年おったら別なところに行って、場合によったら1年で交替して出てもらわなくちゃならないというケースになっております。 幸いにして神戸市で13軒ほどの公団住宅を借りてくれまして、8万幾らの家賃を市の方で出してくれて、留学生は2万円ほどで入れるようしてくれるとかいう努力はしてくれていますし、一部の民間の企業で会社の寮を貸してもらうとか、木下記念事業団というのが新神戸駅の近くにありますと、電気代とガス代だけを負担すればいいということで非常に立派な鉄筋の建物を留学生の人に貸してあげようとか、いろいろ努力はやっておりますけれども、まだ極めて不十分であります。 そこへこれから5倍も留学生を入れるということになったら、来た留学生の諸君は、奨学金の金額は高いかもしれないけれどもだめだとか、住居が確保できないとかいう不満を持つに決まっている。 おまけに、2万2,000人のうち国費留学生は3,500人ぐらいでございまして、残りの人は私費留学生か、あるいはほんのわずかだけ中国の政府から金をもらって来ているというのもあるんですが、中国政府から金をもらっているのは大体5万～6万ですね。 そうすると、日本ではとても今の状態では生活できない、こういうことになるわけです。 そういう問題をどう処置するのかというのを本気に考えないと本当の国際理解が始まらない。

第3番目に、これはアメリカと特に違う点ですが、日本の大学や大学院のカリキュラムと教育の仕方、これを本当に内容のあるものにしないと国際理解を達成できないですね。 アメリカでは、例えば、MBAが非常に有名です。 これ

は本当に職業訓練学校ですから、ここを優秀な成績で出ると、日本の社会と違いますから、最初から有名会社の部長、会社によっては副社長、初任給は3万～7万ドルぐらいもらえるんです。人によりましては、3年後、5年後には10万～20万ドルの約束がついたり、1年に1回は外国に行く休暇をあげましょうとか、ボーナスをこれだけあげましょうというように優遇される立場になる人がかなりあります。日本の社会ではとても考えられないんです。そのかわり、学校によっては差はございますが、MBA 2年間のコースで56単位から60単位を要求される。そして、ある問題についてはケースを何冊か読んでいって、授業の時間は討論ばかりです。その討論を先生は聞いて採点をする。56単位からそれぐらいを2年間で徹底して教育されるとなると、本当に「ヤッタ！」という気がするんです。大学2年間はアルバイトなんかできない、どこにも行けない。夏休みになってもサマースクールをはずしたり、旅行して回るなんてことはできない。

ところが、日本の大学院はほんのわずかしか必修単位はない。日本の大学院は、どの専門分野でも比較的早くから専門コースを勉強されるようです。これはいい言い方をしますと、非常に有能な、意欲的な学生を対象にしてそういう制度ができ上がったんでしょうね。アメリカのは本当に徹底的に鍛えて卒業させる。資格を与えるということになっていますがそのかわり大変な苦労をしなくちゃいけない。留学生がそこで勉強して国に帰ってくるわけです。卒業した以上これだけのことはやれますと自信を持って帰ってくる。ところが、日本で教育した大学、殊に大学院生というのは、ロースクールだとか、メディカルスクールだとかMBAの資格を与えるところでも、それだけの徹底した、集中した教育をやっているとは残念ながら言えないです。ある専門の狭いところについては割に徹底したアメリカに負けないだけのものを与えてますけれども、ある幅をもって56単位も取らせて徹底的に勉強させてというのは必ずしもやってない。そうすると、留学生が、アメリカで勉強したのと日本で勉強したのが帰ってきて何か仕事をやらすと違いが出てくる可能性が出てくる。アメリカから帰ってきた連中は、いろんなことがあっても何とかこなしていく能力を一応持っている。経済学なんかでいいましたら、経済史の先生であっても経済原

論が教えられますというのが出でてきます。ところが、日本の大学院で経済史の先生は経済史以外原論なんかわかりません。アメリカは数学も大体みんなやります。統計学も教えます。そうすると、日本で勉強して博士号をもらった人とアメリカでもらった人は同じ専門分野でも能力が違うんじゃないかと、こういう話になってくると、そのうち問題が出てきますね。ハーバードなんかは、大学院生の方が学部より多いんです。それに合わせた授業体系ができ上がっています。留学生の多いのは大学院生ですから、その教育の仕方を本気で考えないといけない。こういう問題が起こっています。

何よりも留学生を考えるときに日本の問題としては、今アメリカに留学しようとしますとフォルスというのがございまして、例えば、いい大学ですと六百何十点ぐらい取ってないと入学許可しません、レベルが低いと五百何点でも結構ですというように段階がいろいろついているわけです。本当にいい大学に入ろうと思ったら英語の勉強を一生懸命やっておかないと入れてもらえません。それと推薦状がよくないと。

その推薦状も、日本人の推薦状というのはみんないいぐあいに書くんです。そういうのは推薦状の意味がないわけです。ヨーロッパ、アメリカの社会は推薦状社会ですね。ですから、推薦状の書き方をどう書くかで通ったり通らなかったりするんです。いい書き方というのは、必ず欠点を書いておかないといけないんです。人間いいとこばかりじゃないですから、ここは非常にだめだ、しかし、こういう点が非常にすぐれていて非常に有能であるから、あなたの大学に入っても絶対いけるでしょうということを言わないと、すべて「excellent」と書いておったら、こんな推薦状役に立たぬということになってしまいます。ところが、日本人はどうしても推薦状というのに悪口は書かないので、評価が非常に下がる。イギリスなんかは、私どもの知り合いの先生方に聞きますと、この子は頭がよくて将来学者にしてやりたいという学部の学生を一生懸命説得しても、会社に行くとか、官庁に行くとか言うと、推薦状にこれは官庁に向いてないとか、会社に向いてないとか書いておく。そうすると絶対通らない。何社も受けてどうしても通らないと言つたら、だから言ったじゃないか、大学院に残ったらどうかといって大学院に残すと、そういうのを平気でやれる社

会なんです。そうすると推薦状は決定的な意味を持つ。これは日本ではちょっと考えられないですね。

外国の社会では、英語の能力でもそれだけのレベルを要求される。日本では今国費留学生がたくさん来ていますが、一部の国においては、とにかく日本に行きなさい、日本語は勉強しないでよろしい、行ったら日本語の教育をやりますから、あなたは日本語がわからなくても行きなさい、こういう推薦で来るわけです。

そこで日本に留学するときは日本語の知識をある程度要求しないといけないと思います。これだけの金を出しますから、日本語はこのレベル以上でないと入学を許可しませんというのを厳しく言う態度がこれから必要になるのではないか。そのために日本に行ったらどれくらいの生活費が要るか、どういう家庭条件になってて、住居の獲得が難しいかというのをちゃんと言って、予備知識を持って日本に呼ぶようにしておかないと、いらっしゃい、いらっしゃい、10万人受け入れますという形で来て、その気になって来てみたら何も準備ができていなかつたということになると、国際理解を進めるどころか阻害することおびただしいことになる。こういうのをまずこれから本気で日本の社会の中で進めいかなくちゃならないんです。その動きがやっと始まったばかりで、これから先に長い課題を私どもは残されていると言わなくちゃならないのだと思っています。

アメリカなんかは、アメリカンセンターというのを日本の国内でも大きな都市にはあって、情報提供をやっています。私どものところにも、アメリカの有名雑誌、特にアメリカと日本との関係とか、アメリカの経済とか社会とかで必要な記事が出ますと、それをゼロックスで全部リストを送ってくれます。これはどういう内容のもので何ページ、10ページ以下のものなら注文してもらえば全部ゼロックスしてお送りしますというようなこともやってくれますし、毎月何回かアメリカンセンターでアメリカの学者が話をしたり、日本人が話をしていたりして、アメリカの情報についても説明しましょう。ブリティッシュカウンセリーもそうです。京都と東京にありますが、名古屋にも支所をつくり、神戸大学にも支所をつくってくれまして、京都の人人がやって来てイギリスに留学

したい人、勉強したい人にいろんな情報を与えるのですが、いつも十数名の人が聞いております。こういうのをやられているのに、日本ではそういう組織がほとんどと言っていいほど外国にないわけです。こういうのを本気でやろうと思ったらこれまた大変なんですね。心の問題、経済的な問題、一番大事な大学院や大学の教育のあり方のところまで含めまして、本当に留学生に満足を得てもらおうというメカニズムが残念ながらでき上がっているとは言えない。この状態で国際理解を進めるというのは非常に困難だということは今すぐわかるわけです。

そういう中で、私の専門の経済の方の話に戻りますと、今市場解放というのが非常に大きな国際的な課題になっています。アメリカはかつてロンドンエコノミストのマックレーという記者が、「The Pacific Century」という論文を書きましたが、その中で、一つは、British Century、英國の時代が1775年から1875年まで、イギリスは世界経済の中心国になって世界の経済の運営に大きく貢献し、世界の平和を維持してきた。それから後の Pax Americana が1875年から1975年まで。この後、1975年以降、これはパシフィック全体が世界の経済をリードし、平和を維持していく中心になるだろう、そのときは、アメリカと日本とんとおくれた時期に中国、これがこれから100年の後、二千何十年ぐらいになると中国がうんと伸びてくるだろう。そして、日本とアメリカとそういう国が世界の経済のリーダーシップをお互いに共有して世界の平和を維持するきっかけになる時代だ。言うなら、Pax Pacific、太平洋の平和の時代というのが始まる、それが世界をリードする、こういうように言おうとしているんですが、今の時期はアメリカが完全になくなりまして、1,500億ドルの経常収支の赤字を持つようになった。普通ならそれだけの赤字を抱えたら経済が成り立たなくなつて経済規模は縮小していくかなくちゃならないんですけども、その分を日本が黒字を持ってますから、アメリカにどんどん投資をして、世界の経済が何とかうまく維持されている状況なんです。

そこで、一番大きな黒字を持っている日本に市場解放をしなさいという要求がどうしても出てくるようになります。石油ショックのときにアラブのOPECの国々に世界じゅうが、おまえのところだけ値段を勝手に4倍に上げて、そ

ここで蓄積した黒字で非常にいい生活をしているわけですから、これだけ暴力的に力で物価をつり上げて外貨を蓄積したのだから、それだけの利益を世界の国民に還元するように、経済活動がうまくいくよう使うべきだ、こういう話が出ました。それに似たようなことを今言わわれているのです。

そこで、一番最近の例では関西新空港みたいな話になりますし、すべての分野、特に農業分野について市場解放を要求する。さし当たりは牛肉とオレンジが一番大きな問題です。一部には、確かにこういう牛肉とかオレンジというのは消費者の立場でいったら自由化すべきではないかという議論もあるわけです。しかし、政治の方では一挙に農家を経済的に競争ではないような状態に追い込むことはできないという判断から、どうしても抵抗してやってみようという試みが出てきています。しかし、これは長期的に見たら、かつてのイギリスやアメリカと同じように、だんだんと解放していかざるを得ないだろうということです。イギリスは、Pax Britannica の体制をつくったときに、穀物条令を廃止して穀物を自由に輸入するようになったわけです。それまでは、イギリスも島国ですから、自分の国の中でつくれなくなると困るというので穀物を保護してやってたんですが、自分が世界の経済のリーダーシップを握るようになった自由貿易を原則に世界経済を動かさなくてはいけない、そうすると、イギリスの農家がだめになっても自由に外国から小麦を入れるようにしましょうといって、有名なカードという経済学者の「比較生産費の原理」というのができ上がるわけです。絶対的にはイギリスが有利であっても、比較生産費から見て安い物の方にとっかえた方が得だ、そうすると世界経済全体にも利益がある。イギリスは当時工業国で綿花をたくさんつくってましたが、ほかの国はつくっていませんし、もしつくるとしても非常に高くつく。イギリスが綿花を世界中に輸出して、穀類をつくっていても綿業はつくれない国から穀類を輸入する方がお互いの国は利益になるという比較的生産費の原則を立てて自由にしてきた。ところが、イギリスが世界の経済をリードしていた時期は、工業生産額の約半分を生産していたわけですが、それだけ沢山つくっている富で、自分の国は農業はほとんどやめて外国から輸入して、世界中の経済のために蓄積してお金を使った。アメリカも第二次世界大戦の済んだ時期は世界のG N P の約半分を持

っていた。日本は終戦直後は全体の1%もなかったわけです。したがって、アメリカは戦争が済んだときに、ヨーロッパの国々にはマーシャルプランといって経済復興のためにお金を貸し、物をあげて戦後復興につとめさせた。日本にもガリオワエロア資金という援助資金ができて、日本人は飢えて食う物もなかったですから、トウモロコシや牛缶、砂糖を供給して経済復興に努力をしたわけです。

日本は今や毎年の黒字だけは900億ドルぐらい持っているんですけども、世界のGDPの12%しか占めていないんです。これが5割とか4割幾らとか持てるようになつたら、かつてのイギリスやアメリカと同じように世界のために全部門戸を解放してやっていける力がつく。それにどうしてなれるかというと、今から少なくとも20年ぐらい今の状態で外貨がたまって日本経済が繁栄していくのなら、蓄積がどんどんふえていきまして、世界の発展途上国のために、アフリカの難民のために、エチオピアの赤ちゃんのために、いろんな物をあげることができるかもしれない。そのところがちょっとタイミングがずれている。今のところ主役がいないんです。アメリカは力を大分失った、しかし、日本の倍は力を持っているし、潜在的な力はもっと強いかもしれない。そのギャップが全部今ちょっとよくなってきた日本に、国際的に役割を果たすべきだという要求になってあらわれてきて、日本は今必死になってそれに対応しながら、世界の中での日本の役割を果たさなくてはならないと苦しんでいるのが実情ではないかと思うわけです。

その証拠に、日本人は去年1年間に約700万人に近い人々が海外に旅行に出ています。かつて戦争直後、ヨーロッパでアメリカ人がむちゃくちゃにばか呼ばわりされた時期があります。外国人が旅行に来ているといったらアメリカ人しかいなかつたのです。しかも、ほとんど団体でお金をばらまいていた。その時アメリカ人は生活水準が高くて、ヨーロッパは戦後の疲弊の中でまだ復興しつづけ、いろんな恩恵を受けているんですね。日本も700万人行くようになって、それに近い状態になってきたのです。すべての旅行者が教養ある日本人の代表として国際的理能できる行動する人種として走り回っておるわけじゃないのです。こういうのを考えてみると、外国を旅行するにはどういうルールが

要るかというのをちゃんと勉強するとか、食堂で話するときはどういう話し方がいいとか、そういうのをちゃんと勉強していかなくちゃいけない。それが世界のリーダーになる国々の人たちのたしなみみたいなものです。それがまだ出来上がってない段階なんですね。あちこちで問題が日本人に投げかけられて、あの成り上がりめがという表現もあります。国際的な役割は何ら果たそうとしないで、お金だけ握ってホテルを買い占め、旅行に出かけて、フリータックスの店でバーと品物を買ってぶら下げて帰る民族。この非難を本当に越えられるようになるのにはこれから何年もかかるんじゃないかと思います。その間、すべての日本人が本当に教養のある国際理解を進める人間として外国に出ていくとは思えない。どうしたら本当に日本というのは世界の中で必要な民族なんだというように言ってもらえるようになるかというのが皆さん若い人たちのこれから課題ではないかと思います。一挙にはできないけれども、それぞれの年齢ごとにそのための努力をしなくちゃいけないし、その責任を日本は幸か不幸か担うようになった。今やG N P の12%を占めてアメリカに次いで大きな国になり、1人当たりは計算上はアメリカ人より上だと言われるようになったのにいろんなことをやってくれないという全批判を私どもは引き受けてしまふ頑張らなくてはならない。本当に力をためて、じゃしてあげましょうということになるまでには20年ぐらいかかるのではないかでしょうか。その間やれることといったら、皆さん1人1人が立派な国際人になって、外国人にわかる話の仕方ができて、なぜ日本人がこうなのかを説明してやれて、今これだけしかないからこれだけのことはしましょうということを納得的に説明できるようにならなくてはならない。私はそういう意味で、今日集まっていただけた皆さん方が1人でもそういうことを考えて、本当に日本人になっていただくようにお願いしたい。本当の日本人が世界の中で大きな役割を果たすものとして期待されていることは間違いないんです。

本当に日本が国際理解ができる国になるには、少なくとも外国人の労働者をある程度まで受け入れて、それを何とも思わない国民にならないといけない。日本語を話せない日本人を日本人として受けとめる態度が私どもにできなくてはいけない。肌の違う黒い日本人も日本人として何の隔りもなく、においも

何も気にしないようにならないといけない。それはイギリスでもドイツでも非常に難しいのです。ドイツのゲストアルバイトが1割を超えるようになった瞬間からこれ以上ふやさないでおこう、生活風習が違うし物の考え方が違う、これがふえていったら我が国はだめになっちゃうという意識がヨーロッパにもあるわけです。我々はまだその色の違う日本人を受け入れるところまで行ってない。ドイツは1割を受け入れて、そこで改めてこれじゃいかぬという話が出てきて、新しい国際理解問題が出てきた。我々は受け入れる前で国際化問題を議論しなければいけない。しかも、経済力だけは非常にふえてきた感じになりますから、留学生でもフランス並みにはやらなくちゃいかぬとえらそうなことを言っている。フランスがどれだけ外国人を受け入れて今までやってきているかというのは、お互いによく知っているわけではないのです。本当に大切な課題ですけれども、世界の中で生きていく以外には日本人は暮らせないですから、これは一生懸命切り抜けていくしかないと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。

非正規労働者をアスリート下井戸氏。バスケットボールの歴史と文化を語り、アスリートとしての経験を交えながら、バスケットボールの技術や戦略について解説。また、バスケットボールの歴史や文化、アスリートとしての心構えなど、幅広い知識を駆使して、観客を魅了しました。

## フォーラム

—バスセッションより—

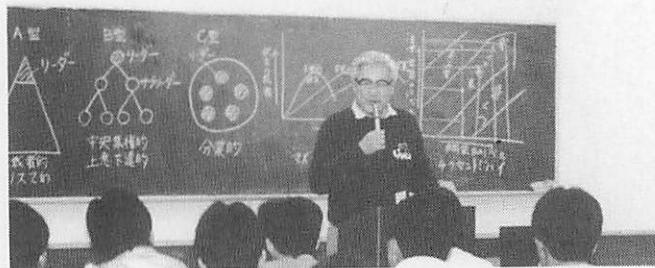
### IU回 RYLAセミナー

88'3.31~4.3 YOSHIMA



### II0回 RYLAセミナー

88'3.31~4.3 YOSHIMA



## フォーラム バズセッションより

テーマ 「地域社会の変動と青少年リーダーのあり方」

### A・A'グループ

- ・都会と田舎とでは夫々に特質がある。
- ・それぞれ地域社会は変動しているが、伝統的なものは残っている。
- ・変えて行かなければならないものが変わりにくい。しかしやり方次第で変えられるのではないか。
- ・現代の若者はレールにそって安全な道をいくのではないか、無気力な要因がある。
- ・リーダーはどのような人が望ましいか、本質としては変わってはいない。しかし若者の無気力さが、リーダーを育て難くなっているのではないだろうか。
- ・リーダーの理想像
  - 1) 目的意識をはっきり持つ
  - 2) 誰にでも態度を変えない
  - 3) 感情を含めない
  - 4) 応用がきく
  - 5) 決断力
  - 7) 責任感
  - 8) 好奇心を持ち行動力がある。
- ・社会に望むもの
  - 1) 情報を広げてほしい
  - 2) 広報活動を広げたい
- ・問題点
  - 1) 青年団活動 イベント化している。

社会に対して精神的に恩返ししているか。

## 2) 家 庭

愛情の形が昔と異なってきている。

親としての態度がとれているか。

子供は社会に対応した態度をしている。

## 3) 社 会

マスコミ、テレビ、ファミコン等による影響

## B・B'グループ

### A. 地域社会の変動にともなって青年リーダーのあり方も変わっていく。

- ・個人の確立化、孤立化による。
- ・リーダー自身大きく変化する必要がある。
- ・リーダーとしてコンセンサスが取りきれない。
- ・リーダーの理想像
  1. 正しいことを見分ける洞察力、決断力、指導性
  2. 個人の意志を無視する場合があるかもしれない。
  3. バランスを考え慎重に事を進めるというのではなく、場合によっては反対をも押しきって行う必要もある。

### B. 個人の尊重

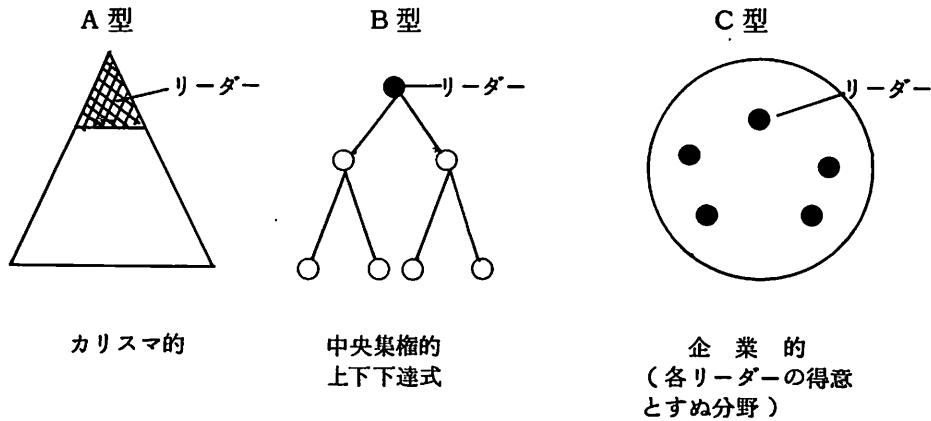
- ・最近は子供達が内側にこもる傾向がある。
- ・昔は地域社会の中で自然に見につくるルールがあった。  
それが欠如している現在、子供達が正しく育つよう手助けをするのがリーダー。
- ・子供のみを対象にしたのでは効果はよくない。親、地域社会全体の責任。
- ・親に強い意識を持ってもらうようにするが我々のつとめ。
- ・親の過保護を啓発する。
- ・人に対する思いやり、強調、個人の尊重が大切

## C・C'グループ

### 地域社会とは、地域社会の問題

1. 生活圏(生まれ育った所、職場、学校、公民館)
2. 共通の意識のあるところ(一緒にいる、一緒に考えるためのルールのようなもの)
3. 精神的地域社会(自分の心の中の考える範囲 余島もそうといえる)
4. 夫々の中にある世界(個人、町、市、県、国、アジア、世界、地域)
5. 大家族から小人数の家族へ家族構成の変化によっての影響、世代を超えての情報の伝達がない。
6. 父親の存在感の欠如
7. 人口が都市に集中することによっての影響  
どうするばよいか。
  1. 精神文明が優先するようになるのではないか。
  2. 青年リーダーも変わって行くべきである。
  3. リーダーがある程度親の代わりをつとめる部分も必要である。
  4. 親子や地域とのふれあいのある関係を作つて行かなければならない。
  5. 総てのものに対する愛情は変わってはならない。
  6. 物事の本質を見きわめる正しい状況判断が必要
  7. 地域社会を明るいものにするために考え方行動する子供になる為に指導する。

## D・D'グループ



## 問題点

1. 利益優先
2. 縦のつながりの欠如
3. 自分以外に無関心
4. 都会的な考え方が地方にまで及ぶ
5. ニーズの多様化
6. 青年団、ボランティア活動等が必要視されない。

## 理想的なリーダー

1. アドバイスを与えることの出来る人
2. 生活環境、生育歴などによる多種多様なニーズをまず知る。
3. 満足感・充実感を一人一人に与えられるかどうか。
4. 持続性と発見や育成の出来る人。
5. 器の大きな、人間的魅力のある人。
6. 精神的にゆとりがあること。
7. カリキュラムを実態の上にたって作成出来る人。
8. なんでも金銭で代行出来る時代にあって、精神的なものや人間関係等で  
    したるものにも目を向け育ててゆける人。
9. 時代の変化に、方法や手段を変更しながら対応していく人。
10. 人間らしさを大切にする人。
11. B型、C型を時によって柔軟に選択できる人。

## Dean-ポイントをとらえて

### 地域社会

1. リーダーとのあり方によって地域社会をとらえてほしい。
2. コミュニティとは

英　国　　教会の鐘の聞こえる範囲

アメリカ　　幌馬車で1日で行ける範囲

といわれていたが、流動的に捕えることが望ましい。

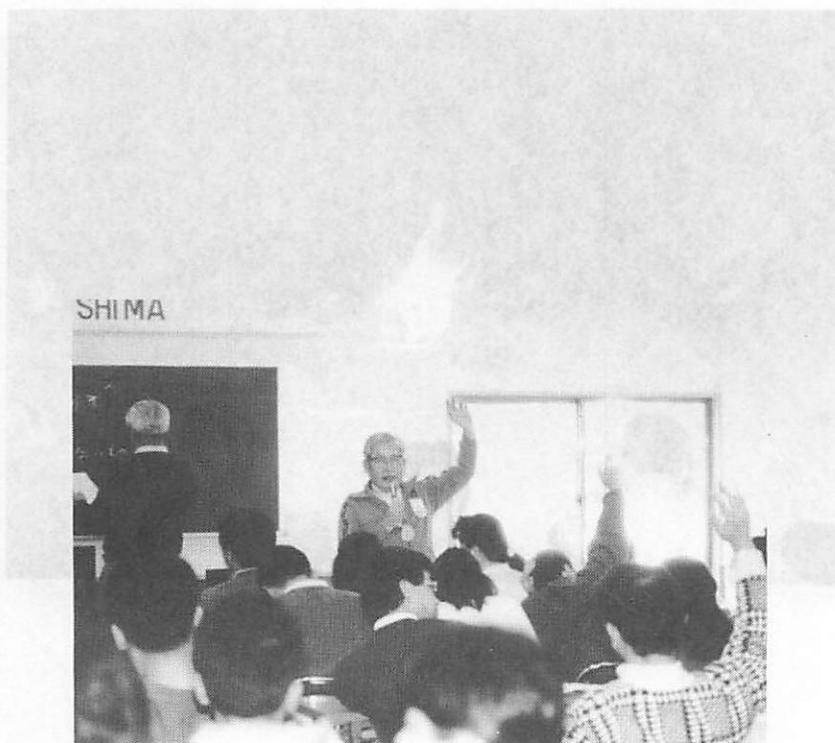
社会・行政・経済の単位でみると情報が共通にプールされる範囲、社会

単位は崩壊し、経済単位は膨張し、国家が捕える行政単位(範囲)は昔のままである。

Local Community(市町村)、National Community、World Community～へと広がりを持ってきたが、ここでは概念としてリーダーとしての活動の範囲としてとらえてほしい。

### リーダーの要素

1. 総てのものについて深い愛情を持つ人
2. 総ての人の幸せを祈る韋駄天のような心をもつ人
3. 長たるもののは後継者を育てるために心血をそそぐといわれるが、人を作り、人を残すこと。
4. 始祖単伝によって法脈を伝えるように、真に大切な事を伝えていく心がまえ。(本質を伝える)



もの昔土(國體)立卓樂音ふ御衣冠聞「」斐端(立卓音)御事音登「」參拂立卓車  
ふみナミ

Fest (Community) (市町村), National Community, World Community etc.,  
開幕の頃音のアヨモーリア」を念押すここ「」飛ひまチ・群まき火夜

## キャンプファイヤー

素要の一スケル

人で群ま開墾の第アーバンのよのケ様」。」

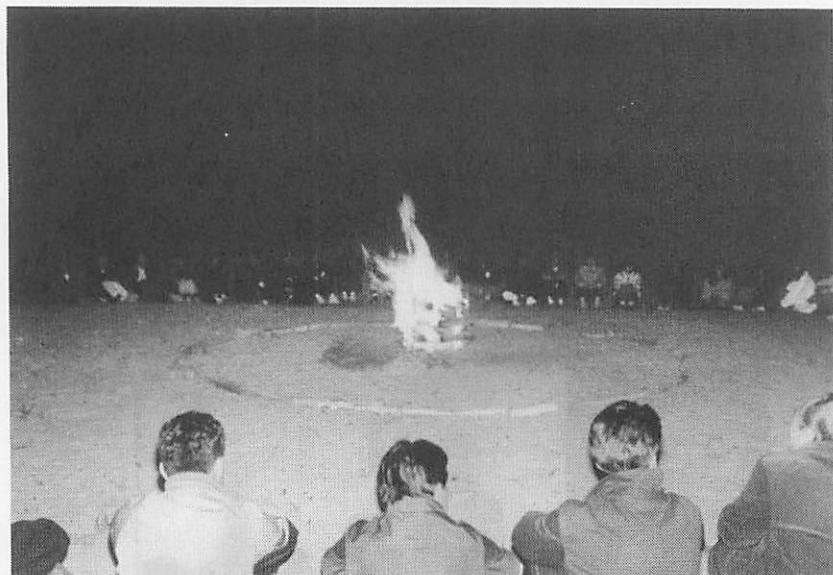
人のよき心から天起萬る時ま其幸の人のア様」。」

看ま人、飛ひまチ・ノロクテテキ血ひれめのア音が告揚聲れいある三見」。」

。ヨニト露營人」。」

夜のアリナチ音を奉式開大コ真、叫びしよ司空連夷江の元軍船頭」。」

(よま司空資本)、よま



## キャンプ ファイヤー

パストガバナー

今 井 鎮 雄 (神 戸 西)

既に皆さんはこのＲＹＬＡが10年目だと言うことをご存知です。10年と言う一つの節目を境にして、私達は将来のリーダーである皆さんたちの為に何が一番大切なことを考えたとき、皆さんのが今からどんなにして自分達の人生を大事なものとして考えるか。何に自分の価値をおいて人生を歩んでいくかという事が最も大事であるということをしみじみと今思っております。

20世紀は難民の時代とよくいわれます。20世紀というものが経済の素質においても、あらゆるもののがいつの間にか人間を人間として見ないで、素質より機械やら機能にすり換えられている世界に住んでいるというのが、20世紀の終末であります。

美しい自然の中に住んでいる人達が自分の生まれ故郷を愛して住んでいるとき、色々な人が来て、今の政治はこうだ、こう変更する等と言ったとき、その政治になじまない人達は、自分の一番愛している故郷を逃れて自由を求め来たことのない土地に悲しみの中で移動していく姿が、実は難民という姿だというのです。

20世紀の悲劇とというのはこのような難民の世紀だといわれるよう、いつの間にか、どこかで人間の一番大事なものを捨て去って行こうというのが今の世界だということです。その中で私達が本当に人間になるということはどういう事なのでしょうか。それはお互いがお互いのことを、人のことを考えて相手の人と共に生きるということを考える世界をもう一度作らなければならぬという事です。

昨年の6月、私はロータリーの大会の為にミュヘンにまいりました。ミュヘン大学の学者の所にお嫁に行った私の教え子の一人を尋ねました。彼女は「チェルノブイリの核爆発の失敗の為に核に汚染され、ミルクを子供に飲むことが出来ないのです。」と話してくれました。一つの原子炉の失敗の為に北ヨーロッパ中の子供達にミルクを飲ませることが出来ないような悲劇が行なわれた

時、彼等は人間としてどうしてよいのか分からぬ……。原子力の強さや効率の良さというものは誰もが認めるところですが、その為にいつの間にか人間一人一人がそのような悲劇に遭おうとしている20世紀の終わりに、私達は一体どうしてもう一度我々の新しい世界を作り換えたらよいのでしょうか。

21世紀という時に私達は人間の魂を失ってしまった人間の集団ではなく、お互に生きている喜びと、友人であることの喜び、楽しさを味わえる世界を作り、私達の後から続く子供達の為に、そのような世界をしっかりと持って育てることが青少年指導者である諸君たちの務めではないでしょうか。

余島の中で先程まで友情をもって焚いておりましたこの薪はいつの間にか灰になってすっかりくずれてしまいました。この火を見てください。私達の顔を喜々と照らしてくれた火、私達に暖かさを与えてくれた火、その為には組まれた一つ一つの薪は、自分の体を焼き尽くして灰にならなければなりません。誰かの犠牲を置かなければ、私達の世界に光を与えることが出来ない。したら、それこそこのキャンプファイヤーの火を囲んでいる諸君達がこのような形で丁度薪が組合わされたように組み合わされて、各々の心の中で人間を愛する炎を燃やし続けながら他の人に光を与えるなくてはならないのじゃないでしょうか。

私は10年前にお話した話をもう一遍繰り返してお話しをおきたいと思います。

第二次世界大戦の日本がまだ戦争に勝っているときのことです。日本軍は破竹の勢いでビルマからマレーシャを通り、シンガポールに入ってきました。シンガポールでイギリスの兵隊達をたくさん捕虜にしました。日本軍はビルマのジャングルの中に捕虜収容所を建て、そこに大勢のイギリス兵隊を集めて、みんな使役をさせておりました。しかしながらその頃になりますと長い長い戦争が続いたために日本軍は食糧の輸送に困り、捕虜に食べさせる食糧がだんだんなくなり、戦争の状況もだんだん悪くなっていました。もっとはっきり言うなら戦争がだんだん負け戦になっていく——そんな状況がありました。

イギリスの兵隊達を入れた捕虜収容所には食糧が充分届きませんでした。ほんの一握りの米で2日も3日もこの捕虜を養わなければならなくなつた日本の軍隊は、うすいおかゆのような食事を3度3度彼等に食べさせていました。

ジャングルを切り開いても畑をつくる耕作にその捕虜を駆り出していました。食べる物がなく、しかも、毎日の労働に従事することは大変なことでありました。これまでの捕虜生活で体に傷のある人達は、体が次第に衰弱してきますから、いろんなところが膿んでまいりました。包帯を巻いてもその包帯の上に膿がたまってまいりまして、その膿が臭い臭気を放つような状態が続いておりました。

おかしなことに人間は、こういう社会になったときは、みんな自分のことしか考えなくなっています。イギリスの兵隊達もみんな自分のことしか考えない。だからなるべくこっそりと人のものでも盗って自分の食糧を確保しようとしました。働きに行くときには、なるべく人よりも楽をしたい。人がもしも10回土を運ぶなら自分は半分でごまかして体力をなるべく消耗しないようしましょうというのは、ごく動物的な人間の生きる本能であるかも知れませんが、こういった気分がこのキャンプの中に充満しております。

そこは人間の社会ではなくて、まるで地獄のような社会であり、生活の場がありました。

誰もが人を信用しない。誰もが人のことを考えない。誰もが自分本位のことしか考えない世界がそこに出でまいりました。

一人一人の心は痛みながら、こんな社会にはたまらない。こんな捕虜生活には耐えられないと思いながらも、なおかつ朝起きるとこっそりと人の物でも盗ってみようと、キヨロキヨロ見回すような状態がありました。

ところがある一人の兵隊——彼もすでに体に傷をおい、だんだん体が衰弱し自分がもう長く生きられないことを知っていました。——「もう少ししか生きられない自分。最後にはなんとか人間らしく死にたい」とその人は思いました。そして人間らしく死ぬとはどういうことなんだろうと一生懸命考えました。人間らしく死ぬと言うのは他の人と一緒に生きるということではないだろうか——。他の人のために何かしながら生きることはできないかと彼は考えました。しかし、もうほとんど起き上がりになくなってしまった彼には他の人のために何かをすると言うことのむずかしい状態でした。もしも、他の人のために何かをして有難うと言われたら、自分は人間らしく死ねるんだがな——と彼は

そんなふうに考えました。彼は膿みの臭気のただよう包帯を自分の力で少しでも洗ってみようと考えつきました。バケツの中にきたくなかった包帯の束を入れはうようにして近くの流れまでたどりつきました。はったままでから鼻先には汚れた包帯があり、すぐにおう吐をもよおすような強烈な臭いの中で手をさしのべ、流れの中で包帯を洗いました。どれだけの時がたったのか、一塊りの包帯は一応全部洗えました。彼は又それをバケツに入れ、はうようにして自分のテントにもどりました。そして、洗った包帯をテントの横に張られたロープに干しました。紙に包帯の必要な人は誰でもこれを使ってくださいと書きました。

はじめはその包帯が干してあることに気つかなかった兵隊達も、喜んで使い始めました。

「誰かが包帯を洗ってくれたぞ」「他人の傷口のために洗ってくれたぞ」それを使った兵隊は誰かがおれのために何かをしてくれた——。というその小さなことが彼等の心に小さな灯火をともしました。誰かが誰かのために、僕が自分の為ではなく、誰かが僕のために包帯を洗ってくれたということに対する思い、感謝というにはあまりにも大げさではありますが、小さなほのぼのとした光が灯ったのです。捕虜生活をしている人達の心の中に今までと違ったような暖かさがよみ返って来ました。

動物の世界のような弱肉強食のような自分のことしか考えなかつたような捕虜収容所の中に、何か暖かい気持ちと、暖かい雰囲気が流れてきました。

この手記を書いた人は、まだいくつかのことを書いております。

もう一つは、私はそれを読むたびに胸がふさぎます。日本の兵隊達はイギリス兵の捕虜をつれて使役にまいりました。「作業員整列」といって50人を整列させ、50本のスコップを持ち、山にざん壕を掘りに出かけました。帰ってきますと、そこに50本のスコップを置くのであります。

ところがある日のこと、50本のスコップを置いた後で日本兵が数えましたところ、49本しかありません。「49本しかないぞ！ 誰か1本忘れてきたんだろう！」しかし、イギリス兵の中で誰も忘れてきた者はいませんでした。「もう一度数えてみるぞ！」日本の兵隊が数えましたが、やはり49本しかありません。だんだん、だんだん怒りに狂ってきた日本の兵隊は「誰か忘れてきた者失くした者は前に出ろ！」

兵隊達は青ざめしていました。何故ならそういう時に出た者は、必ずたちどころに日本兵によって銃殺されることがわかっていたからです。みんな真っ青になりましたが誰も出てきません。怒りに狂った日本兵は、やがてこういいました。「日本の軍隊では、1人の責任は総員の責任なんだ！お前達の中でスコップを失くし、しかもその者が申し出ない以上は、お前ら50人はみんな処刑する！」

もう食糧を輸送することの出来なくなっていた日本の軍隊は、いい動機があるなら捕虜の兵隊を殺すことなんとも思っていず、50人のイギリス兵はしゅんとして、みんなこの場で銃殺されるだろうと思っていました。その時ある一人のイギリス兵が前に出てきました。「私が失くしました——」。怒り狂った日本兵はいきなり銃を逆手に取ると同時に彼の頭をたたきつけました。彼は即死をしてその場に倒れました。興奮した日本の兵隊はそれを見ながら「見ろ！お前達も、もしも言うことを聞かないなら、みんなこのようになるんだぞ！」といい、みんなを解散させました。イギリスの兵隊達は、みんな重い、つらい思いを持って自分の兵舎に帰ってきました。

しばらくして、こんな噂が出てきました。「あのスコップが49本しかなかったのは間違いで、実は50本あったんだ。日本の兵隊が数え間違えたんだ——」ではあの時「私が失くしました」と言って出た兵隊はなんだったんだろう？

なんで出たんだろう？

みんなの心の中に、あの兵隊が残りの49人の兵隊を救うために、やってもないことを言ってくれたのたのだ——。と言うことがわかつてきました。おれの命を救ってくれたんだ！他の人達に変わって、自分自らが殺されるのをいとわずに前に出てくれたんだ！

こういうことが出てまいりますと、誰かの為に自分が小さい犠牲になると言うことが本当はどんなに大きいことが一人に人の死によってわかりました。そしてその兵舎の中の世界が変わってしまったのです。

私達は今、RYLAセミナーで若い皆さん方に、何も頭をくだかれて下さいと言っているのではありません。

私達が何か他の人達のために小さな仕事をすることによって、私達の世界を変えたいと思っています。来たるべき21世紀の社会が愛に満ちたものであるように、みんなで努力しようではありませんか。

お召式出の御モリモリお式端同。式上モリアセモ御日正御見  
お召式入式。ナラタガ依式リテ一派せあるこさ休も御誠アセキ本日正

## 参加者感想文

十課隊員みみ11人02名前は、お召見つお出上申役者や子孫や、」」」大正

上!

A・A'グループ  
お召式入式手下の元記、ナラタガ思ひ出しあるところを御正御見の御誠さぶる  
一派改御ひテ。式上モリアセ思ひでさゆるはら御誠ケ御ひこあひメ、アシムハ  
スル並び御、上——お召見アセキ式端同。式上モリアセ出上申役者入式手下の人  
明お薦、式上モリアセ改御頭の勢正御同上さる事2年並び御ひ武者のお日本日  
上お見下さ御が景きはるお御見の本日さ「當典」式上モリアセ御の各アシメ御  
上!お詫びの式端さものこあひメ、お式上式端間ちこそで言よアシメ、お靈廟神  
川さの「ノ車が入式、お臺御見のスリ手下。式上モリアセ婚禮お式入式、」」」

式上モリアセ御の御見の令日と、片をい思

いふ成り得て、お召式入式手下の元記、ナラタガ思ひ出しあるところを御誠さぶる

一派改御ひテ。式上モリアセ思ひでさゆるはら御誠ケ御ひこあひメ、アシムハ

スル並び御、上——お召見アセキ式端同。式上モリアセ出上申役者入式手下の人

明お薦、式上モリアセ改御頭の勢正御同上さる事2年並び御ひ武者のお日本日

上お見下さ御が景きはるお御見の本日さ「當典」式上モリアセ御の各アシメ御

上!お詫びの式端さものこあひメ、お式上式端間ちこそで言よアシメ、お靈廟神

川さの「ノ車が入式、お臺御見のスリ手下。式上モリアセ婚禮お式入式、」」」

式上モリアセ御の御見の令日と、片をい思

いふ成り得て、お召式入式手下の元記、ナラタガ思ひ出しあるところを御誠さぶる

一派改御ひテ。式上モリアセ思ひでさゆるはら御誠ケ御ひこあひメ、アシムハ

スル並び御、上——お召見アセキ式端同。式上モリアセ出上申役者入式手下の人

明お薦、式上モリアセ改御頭の勢正御同上さる事2年並び御ひ武者のお日本日



## 伊 藤 智

あまりにも短い時間の中で、睡眠をかけるしか方法がなかった。  
空がしらんでくる頃、野鳥のさえずりを聞きながら101号室をあとにする。  
友はまだ時間をおしんで話に花を咲かせている。また、今日と言う大切な1日  
が残っているが、ペンをとることにする。いかにも形容しがたい、凄い講師と  
ロータリアン。そして友。余島に集いし仲間達に感謝、感謝である。

バズセッションの時間の少ないのが残念である。

自分のおろかさがくやまれる、バズの途中落ち込んでしまった。まだまだ勉  
強不足である。力不足である。皆の足もとにもおよばない、実につらかった。  
しかしキャビンにもどり、酒を酌み交し、冗談の中で気も晴れてきた。

人間で本当に素晴らしい。愛と希望と使命感に燃え、自分自身を一步高めたい、  
何もしなければこの気持ちもさめてしまうのであろう。ありきたりの言葉  
であるが、行動に移し、青少年の健全育成に少しでも役に立ちたいと思う。

ショックのまま、余島をあとにします。

## 高 家 徹

私に、RYLAセミナーに参加させていただいた方々、また沢山のことを教  
えてくださった諸先生方に深く感謝致します。

しかし、今、頭のなかには、寝不足のためか、それとも根本的な頭の問題か  
ぼんやりとかすんでいます。学生から社会人となって2年目、1年目には、た  
だ上司から教えられるとおり仕事をこなし、2年目は、仕事をまかされ、自分  
なりにこなしてきた私にとって、この機会に一人一人の環境、経験の違う人達  
の意見を聞き、話し合いをした事は、大変よい研修であったことは確かです。

思索の時、さまざまことを考えましたが、やはり一人というものは、淋し  
いもので小さな力でしかないものだと感じました。余島に来て、相手が傷つく  
のなら、自分が傷ついてもよいという「仲間」ができたことは、このうえない  
自分にとっての財産となったことでしょう。

これから地域に帰り、学んだことを聞いただけではなく、実践していかなくてはならないという責任感を感じます。それは、社会教育の仕事上で、青年団の中で、また地域社会の中で、生かしていく場所や、いつその成果ができるかわかりませんが、必ず小さいことでも実践していきたいと思います。

こんな素晴らしい“出会い”があり、知力、体力、気力が必要であるRYLAセミナーがこれからも続いていくことを願います。

### 窪田壮哲

期待と不安に胸をふくらまし、このRYLAセミナーに参加すべく、かの地余島にやってきました。初めは、一体どこへ連れて行かれるのか、どんな人達が参加してくるのか、いろいろと思いをはせていましたが、一番感じたことは初対面であるのに、すんなりと連帯感、連帯意識というものが芽生えたのではないか!? ということでした。これはすごいことだと思います。セミナーが終わる頃には旧年来の友達のような感じになり、しばらくすると別れ別れになるということが信じられないくらいになっていました。嬉しくもあり、悲しくもあります。

近年、時間をこのように有意義に使ったなあと感じたことがなく、特に、バズセッションや、夜な夜なの語り合いなど、大変充実したものに感じられ、参加して本当によかったと心から思っております。またレクリエーションでは、外で暗くなるまで、おもいっきり遊び、いい汗がかけ、童心に帰ったように思われました。本当に良い経験ができ、またよい思い出になりました。

要望としては、バズセッションのフォーラムについて、もっと全体討議できる機会をもってほしかったと言うことと、テーマが抽象的だと空理空論になってしまう恐れがあるので、もっと具体的なものを数題話し合ったほうが良いのではないかと思いました。

余談になりますが、お風呂にもっとゆっくり入りたかったですね！  
とにかく朝は眠いの一言です。

駄文にばかりになりましたので、適当に省略してくださいって結構です。  
本当にいろいろありがとうございました!!

## 中野喜男

「歴史は夜造られる」という言葉を聞いたことがあります、まさしく「ＲＹＬＡは夜(キャビンタイムで)造られる」ということでしょうか。でも睡魔に弱い私はこの徹夜作業がとてもつらく、いつもそこそこに脱落しては床に入り、眠りながら考えてみると、果たしてこの夜を徹しての談笑がウエルネスになるのだろうがと思い、1年365日の間のたった3晩であるが、このセミナーが終わった後、何週間も体調を崩すことがあれば、それは残念な事だと思い、もう少しこの時間の使い方を考え直してはどうかと感じました。

そして、この島を訪れる前に抱いていた不安は、プログラムが進につれ、すこしづつ消され、だんだんとこのセミナーの主旨が体に浸みこんで来るのを感じてきました。私にとって貴重な体験、感動を得ました。今後はこれらを少しでも生かしながら励もうと思います。

最後に、こんな素晴らしい機会を与えて下さったロータリアンの方々、カウンセラー、講師の方々に深く感謝をいたします。

## 永田守

僕は、このＲＹＬＡセミナーに参加させていただき、大変有意義な時間をすごさせていただきました。というのは、僕は個人的ですが、今年就職でして、将来の自分の仕事というものに対して、様々な悩みを抱いていました。“教師になりたい”……と、中学生の頃からずっとと思い続けてきました。そして教育大へ進み、現在に至っております。したがって、ずっと僕の“天職”は、教師なんだ！ 教師しかない！と思ってきました。しかし、このＲＹＬＡセミナーにおいての美崎先生のお話、ロータリアンの先生との話し合い、各班員のみなさん方の意見をお聞きして、自分の目指す将来についてもう一度、客観的に見詰め直すことができました。つまり、天職とは何か？ 教師はいかにあるべきか？ 教師とは？ 何故、教師になりたかったのか？ という必要不可欠な疑問に対して、自分自身は明確に答えられない……。そんな未熟な自分を再発見

しました。みなさん方の話を聞くにしたがって、自分が大変小さな頼りない人間で、世間知らずだなあと思いました。もっともっと自分を磨き、魅力ある豊かな人間になりたい、それと同時に、子供の気持ちをわかってあげられる教師になりたいと思います。今、教師に対する僕の情熱は、以前より燃えさかってきました。1年後には、必ず教師となり、このライラで、お世話になった方々に胸をはって報告できるように頑張りたいと思います。このライラで本当に素晴らしい人達に交わることができて、とても有意義でした。

最後になりましたが、未熟な僕をライラセミナーにご推薦くださった、川西猪名川R.Cの皆様方、本当にありがとうございました。

## 大 塚 悟

12年振りの余島は、僕を静かに迎えてくれました。初めて余島を訪れたあの時、不安と期待で一杯だった気持ちは、帰るときは仲間とリーダーと、そしてこの余島を離れてしまうと言う悲しさばかりでした。

今回、このライラセミナーの話があったとき、すぐに参加しようと思いました。ロータリークラブと言うものがどんなものかも知らなかった僕は、ただ少年の頃に訪れ、そして素晴らしさ思い出がつまっているこの余島に、もう一度訪れたいと思ったからでした。でも、矢張り不安と言うものがありました。一体どんな人達が来ているのだろうか。3泊4日というのは少し長すぎるのでないだろうかと。

しかし、3泊4日という期間のはかないこと、あっという間に今日の午後にはもう離島です。

僕はこのライラセミナーの事を一生忘れないだろう思います。初めて余島で出会って話し合い、そして夜遅くまで話し合った仲間と、もう数時間で別れなくてはならないと言うことが信じられないくらい淋しく思えるのです。

本当に出会いと言うものは素晴らしい事だと思います。そして、その出会いを与えてくれたR Y L Aセミナーに参加して本当によかったです。

様々な立場の、いろんな人の話がきけて、自分の視野のせまさというものに気づかされた気がしました。もしこのセミナーに参加していなかつたら出会うこととはなかったかもしれません。こんな事を考えることもなかったかもしれません。だからこそこの出会いを本当に大事にしたいと思います。

みなさん、本当に有難うございました。みなさん生活の場所は違うと思いますが、本当に頑張ってください。

又、何処かでお会いすることもあるだろうと思います。そんな時は、お互いに声を掛け合いましょう。その時を心から楽しみにしています。

### 山 田 勇

非常に短く感じられたこの4日間、とても有意義な時間をロータリアンの先生方、カウンセラーの先生方、Y M C Aの方、班友達の協力を得て送ることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。あまりにも考えさせられる事が多すぎて、自分の中で自分なりの整理が出来るのは、かなり先になりそうです。しかし、どんな形にせよ、この4日間が私の人生に少なからず影響を与えることになるだろう事は確信しています。

そして、自分なりに整理をつけたとき、人生において一歩前進をすることが出来ると思います。

それぞれすすむ道が異なっても、志を同じくした仲間が集まり、熱い何かを感じ合ったこの4日間を私は忘れる事はないでしょう。

最後に、本当にロータリアンの先生方、Y M C Aの方、班友の方、ありがとうございました。

## 今 城 努

私は、少年少女キャンプにも参加したことがあり、今回はそのときの感激をもう一度味わいたいと思っていました。そして、ほぼプログラムを終えた今、その期待どおりに感激をしています。それは、ロータリアンの人達の人格、講師の人格、そしてここに集った友人の人格すべてが素晴らしかったからです。みんな人を愛し、理解し合う心を持ち、RYLAセミナーでの活動や討論に、本音で全力でぶつかれたからです。

今回も又、人の出会いの大切さを知り、人として21世紀をなう青少年リーダーとして、何をすべきか知ったことをうれしく思います。

そして、キャビンでの朝までの宴会(?)も最高の思い出になると思います。しかし、自分達の行った芸や話に少々後悔しています。

最後になりましたが、「第10回RYLAセミナー」を企画し、支えてくれたロータリアンや関係者の皆様、有難うございました。

これからはRYLAで得たことを十分に活用しながら自分を磨き、地域社会発展に少しでも役立てばいいなと思います。

## 河 野 稔 彦

余島における4日間のRYLAセミナーは、私にとって素晴らしい時間でありました。毎晩の良き仲間との語り合いで得た知識、心の触れ合い、自らの自律にまかせ、時間にとらわれないセミナー日程のご配慮、一流大学教授等の講師による貴重な講演の提供等、この4日間で得たものは、今後の職場での仕事や地元青年団活動を進めていく上での何らかのあるべき方向、指針を自分なりに自覚できたと確信いたしております。

人間は孤独では生きられず、社会の中で人と出会い、人から学び、生きていかねばならない。未知の人々と出会いを大切にと、学び得る恩恵には報いを忘れず、このセミナーで得たものを持ち帰り、地域のリーダーとしての役割を自分なりに果たして生き、挑戦していきます。

最後になりましたが、カウンセラーの菊沢さん、嘉納さん、ご指導ありがとうございました。また、ＲＹＬＡを主催されましたロータリクラブの皆様には心からお礼申し上げます。

### 里 見 淳一郎

綿密な計画の下に過ごしたこの4日間は、全てが新鮮であり印象的であったが、やはりロータリアンの先生、そして班の友と語り合った夜のキャビンタイムが忘れられない。いろいろな場で活躍されている社会人の方々や、希望を持った学生の方々と接することは滅多にないチャンスであり、得る所も多かった。これからそれぞれの故郷に帰るわけだけれども、今回の経験は、必ず何かの形で役立つであろうと思われる。良い意味での意識改革をおこしてくれたこの余島に感謝したい。

### 黒 田 孝

余島の自然の中で大学の先生方の講義、又はロータリアンの先輩方に言い、視野から青少年問題についてお話ををしていただき、有意義な時間を過ごすことができたことと、地域社会におけるリーダーとしての心構え、あり方についていろいろな人達との話、あるいは意見を聞くことが出来たことは、私の人生に大変プラスになったように思います。

ライラセミナーに参加させていただいたロータリーの皆様に感謝の気持ちで一杯です。

## 常陰香保里

R Y L A セミナーのはじまる3日前に、病欠で出席出来ない人の代わりに正式に私の出席が決まり、R Y L A の意味・目的及びロータリーのそれも十分知らないうちに参加してしまいました。初めのうちは、なぜ、こんなにロータリアンの方々が、力を入れていらっしゃるのだろうと、思っていました。しかし日を重ねるうちに友達ができ、いろいろなロータリアンの方々の話を聞き、だんだんとR Y L A の意味・目的やロータリアンのそれがわかるようになってきました。そうなると、何も知らなかった自分がとても恥ずかしくなってき、その反面、大変残念な気がしてきました。何故かと言うと、私はラッキーにもR Y L A に参加でき、自分の視野を広げる機会を持つことができたけれど、現在本当に私のブロックで青少年活動をしていて、このR Y L A に参加することが好ましいと思われる人が、参加できなかったからです。

一般の生活の中では、R Y L A の様に、ある問題についていろいろと話を聞き、友達と語り、一緒に生活をすることは、あまりありません。この経験を、これから的生活に役立てない手はないと思います。

最後に、ロータリアンの方々にお願いがあるのですが、このようなセミナーをロータリアンの推薦で参加者を募る上に、一般公募もされたらいかがでしょうか。なぜなら、参加者を限らず、心を求めてR Y L A 至りね心豊かにR Y L A を去ってほしいと思ったからです。

ディーンの深川先生以下R Y L A セミナー運営委員のみなさん、又、ロータリアンのみなさん、そして、R Y L A に参加したみんな、本当にありがとうございました。

## 織田浩子

ロータリクラブより推薦を受けたものの、はたして私は、R Y L A セミナーの受講生として適しているのだろうか？ 戸惑いを感じ、一種の期待が同時におこっていました。

3月31日。快晴！午前10:00出発、高松港でそれらしき(R Y L Aの受講生)青年に声をかけました。彼は“青年白書”らしき本を読んでいました。「心構えが違う！」自分が恥ずかしくなりました。

島に着き、記念講演『中国五千年史』の中で、私は何不自由なく育って恵まれた生活の中で、何一つ苦労のない自分を感じました。「いろんな事にチャレンジしよう！　チャンスを逃がさないようにしよう！」と思いました。

第1日目のキャビンタイム、緊張ぎみではあるものの、大丈夫。

4月1日　“個人の理解”自分の価値観だけでものを判断するのだけではなく、他の人の価値観と比べること(同じ日の高さで…)が大切ということを学びました。

午後からのレクリエーションは、久し振りに思いっきり汗を流しました。特に、憧れのヨットに乗せてもらいました。海面はキラキラ、風切って走るヨットは最高でした。

4月2日　“地域社会と青少年”はたして私は知らない人を大切に(コミュニケーション型)出来ているのか？問いかけながら、先生の話にクギづけでした。

バズセッション、初めての経験でした、2時間半があっという間に過ぎていきました。そしてフォーラム、A班の仲間意識が強くなったと感じ、2日前に初めて会った人達とは思えないほど親しみ安くなりました。

セミナー最後のキャビンタイム“他人ではない。友達なんだ”と思うと同時に“心を求めてR Y L Aに至り、心豊かにR Y L Aを去ろう”という言葉がよぎりました。

講師の先生方、ガバナー、ディーン、カウンセラーの方々、余島の人達、そして私がこのセミナーに参加出来るよう配慮して下さった方々、本当に心から感謝の念でいっぱいです。

2泊4日R Y L Aセミナー　ありがとうございました。

## 山 地 京 子

今回初めてＲＹＬＡ研修会に参加して、私は非常に驚いた。

私は今まで、大学生であるというモラトリアムや、女であるという逃げ口に甘えるばかりだった。他人に対して自分の意見を示すことなく、また、そういう機会もなかったことで、自分を見つめ、信念をもって行動すると言うことがなかったような気がする。ほとんど年齢の違わない人々がいろいろな経験を通して、何ら見返りを期待することなくリーダーとして活動している話を聞いて、彼等とたいして変わらないはずの私の20年間とは一体何だったのだろうと啞然とした。私自身の人生、これからは自分の信念によって積極的に生き、そして相手のことを本当に思いやるリーダーとなりたいと思う。

また、陳舜臣先生を初めとする、めったにお会いすることもできないような諸先生方の講義を受けることができ、またその上、カウンセラーの先生方がキャビンでも私達を相手に夜遅くまでリーダーとしての人生哲学を語って下さるなど、とても信じられないような素晴らしい機会に恵まれたことは、非常に幸運だった。こういったローターアクト間の理解だけでなく、ロータリーとローターアクトの間の理解を深める機会をより多くもちたいと思う。

## 番 所 寿美子

私はＲＹＬＡのことは、全くといってよいほど、中身を知らずに参加しました。緊張、緊張で来島し、知っている人がいないということは、ますます不安が高まるばかりでした。

そんな中で、1人の人とお話し、2人目、3人目と言葉を交すうちに、閉じきった心の窓を少しずつ開くことが出来、ホッとする想いでした。

毎日、楽しく過ごしたキャビンタイム……寝不足で参加した講義ですが、講師の先生方には、人をひきつける何かがありました。特に田中先生のお話は体で表現してくださるお話に、眼くなるどころか、ますます身を乗り出していくのでした。

こんな大きな、内容あるセミナーを準備されたロータリアンの方々には大変な苦労があつただろう思います。

私達のお父さん、おじいさんの年代にあたる先生方も沢山いましたが、それぞのキャビンで夜遅くまで語って下さり、遠い存在の先生方に出会え、感激しております。

これからも第11回、第12回とライラセミナーを続けていかれることを期待して、地元に帰って、来年のセミナーには是非参加するよう、沢山の人達に自信を持ってすすめたいと思います。

ここで過ごした4日間、沢山の人達に出会え、語り会えたことを大切にしていきたいと思います。また、いろいろお世話下さったロータリアンの皆様、カウンセラーの先生方に心より感謝しております。

また、いつかどこかで、お会い出来ることを願っております。ありがとうございました。

### 広田順子

海と緑に囲まれたここ余島で、4日間生活できたことを大変光栄に思います。環境も年齢も違う人々と、余島で出会い、寝食をともにした今、私の心の中には、充実感でいっぱいです。

毎晩、夜遅くまで(というよりも朝早くまで……)キャビンの中で、先生方の話も聞くことができたし、また、班のメンバーと楽しく過ごせました。3日前に初めて知り合ったとは思えないくらい、仲良くなりました。素晴らしい友達が沢山出来ました。

レクリエーションでは、初めてアーチェリーをし、ヨットにも乗りました。また、バズセッション、フォーラムを通じて、一つの課題におののが真剣に取り組み、その中で、私は多くのことを学びました。今までの自分自身には、少なからず言動など、生活全般に渡って“甘え”があることを、改めて感じました。私にとってのYoshima Lifeは友と過ごすとともに、自己を見つめ直す良

い機会になったような気がします。

余島で得たものを、今後どう生かせるかわかりませんが、足がかりにして、私なりに前進していきたいと思います。

ロータリアンの皆さん、RYLA参加者の皆さん、本当にありがとうございました。

### 大島 美穂

今日がとうとうRYLAの最終日です。この4日間は明るく楽しいA班の人達のお陰でとても愉快に過ごせました。毎晩、夜遅く(朝早く)までお酒を手にいろんな話をして、毎日の朝の時間のつらかったこと! 素晴らしい先生方を前にして聞こう聞こうと思いつつ、コックリ、コックリ。あとから考えると本当にもったいないことをしました。まったく顔見知りの人は居なかったのですが、素敵な友達が沢山できて、本当に来て良かったと思います。

それから、初めての体験も沢山できました。その中で一番最高だったのは、やはりヨットでした。海という厳しく美しい自然を相手にするヨットに乗った緊張感と感動は、いつまでも忘れられません。

ロータリアンの方々のお話によって、今までの自分や、これから自分についてじっくり考え、社会についていろいろ考えました。これから学校生活にもどっても、このセミナーで得たことを忘れずやっていきたいと思います。

### カウンセラー 菊沢 建明

相変わらず余島は美しい。10周年記念の意義あるライラセミナーにカウンセラーとして参加できる慶びが胸に込み上げてくる。8年間続けたカウンセラーの役の意味を、もう一度振り帰ってみる。

「よし! 今年は自己としての持っているものを全て出してみよう……」と心

に決める。

神戸の嘉納さんとコンビを組むことになった。

いつものように研修生を迎える。青年のリーダーの顔には、不安と期待が入り交じり複雑な表情。早くその不安が喜びに変わるよう……気配りが始まる。ライラで最初に行う作業だ。開校式・記念講演・夜会パーティーとスケジュールは流れて行く。今年の研修生は例年に比べて、実におとなしい。キャビンタイムになる時は、既に出会いの友情の色が見える。超一流講師の講義に感動。絶妙なプログラムに驚きながら朝が来るまで語り合う姿は、若者の特権であろうか。最後の日は徹夜。うぐいすが朝がきた事を告げに来るのは毎度のこと。もうこの時は、お互いに友情の絆は堅く結ばれて、10年来の親友のように見えるのは不思議だ。閉校式後、もう一度会うことを話ながら帰路につく。どうかこのライラで得たものを、地域社会で生かしてほしいと念じながら、別れのボートに乗った。



（略）

。オーバーラウンド勝ちヨメにさみち御臺の町町

人依春月と安平、お内膳の一マーリの半音。ひよ城を坐鏡御城のよい

。ひよ御城の御殿……きよあき美山や喜び安平や子と早。御苑を駒場の口交り

。B・B'グループ

。大木の御殿を御殿見聞・五対開。御茶道と音楽研鑽のモトヤ

タバコキノノ。おまほに実、アヘビの半段お坐鏡御の半々。ノ音アハ源好小

。頬張の運転の御糸路一脉。ひよ城改めの御丈のハ金出が隠。お御さんごんト

さえり御井の音苦。お庭を合の駕け生る来北障は紙の籠コムでアロアが妙聲

。この御殿おのれ来北の御者を車の車障近トボラ。身筋お日の対象。さく

お見ゆきの太陽の来半日。アホ野郎ア望む様の御丈のハ五体。お御のこそさ

めでさ。アホの御跡の衣ふ御ゆらこそ金利一でよ。御大對開。御御恩不おのさ

木の井眼。お清め口念ふ。」おアレハ坐鏡ア金者御頭。さのよばれすそトモのこ

。式へ乗ヨイ



## 中 井 浩

議論するのもたまにいいものだと思う。気づいてみると5時というあの疲労感、いや充実感というものは何ものにもかえがたい。私は、医学部の学生であり、日頃、議論するといつても当然、自分の専門分野になってしまふ。その点ここでの議論は、教育問題、地域社会、恋愛(Hなことも含めて)etc.多岐にわたっていた、そういうことに触れることによってこれまで盲目的だったことに対し目が開かれたように思う。

飯と酒が食い放題という話につられてここ余島にやってきたのに、帰る時点では予想以上の収穫が得られた。8年ぶりのキャンプファイヤーに、自分の考えを持った若者に出会い、我らが心の歌を作り、この4日間というものは心暖まるものであった。

## 正 木 勉

R Y L Aセミナー参加にあたり、期間中4回行なわれる講演会を楽しみにしていた。内容は期待にそるものであったが、欲をいえば最後10分間ぐらい質疑応答を行う時間があればと思う。また、仲間と共に夜を徹しての議論は、疲れただけれど大変楽しかった。

班員、そしてカウンセラー、ロータリーのみなさん大変ありがとうございました。

とくにカウンセラーの篠原さん、林さん、そして私の生氣な質問に対して親切に御答え下さいました小松島RCの江藤先生、伊丹RCの深川先生、高松北RCの高島先生ありがとうございました。

この経験をいつかきっと生かしたいと思います。

## 出口 喜 正

私は3泊4日の研修でいろいろな方と出会い、又、話し合い、夜の研修では寝る時間もないくらい話し、色々な事を考え、それが正しいかとか、これから私達が、指導者として、何をするか？そこで悩んだ。

私なりに言うと

- |     |           |   |
|-----|-----------|---|
| 人との | (出) 会い    | これを、私の名前のようにこれからロータリークラブで頑張りたい。又ヨシマは私の島でありますので、二度、三度とセミナーに参加したい |
| (口) | でみんなと話し合い |   |
| (喜) | び合い       |   |
| 又、  | (正) しく考え方 |   |

Group B song 88 Yosima

白い砂の瀬戸の海から  
深い緑の余島の国へ  
今日も生まれる小さなきづな  
心開いて語りあおう  
いつのまにか時がすぎても  
巡りあえる そのとき  
あの日の出逢い ライラのこころ  
今もかわらぬ よろこび

## 原 田 安 暢

ある一つのテーマについて、真剣に考えるということは、ごちゃごちゃした日常生活では、なかなか頭を回す事ができませんでしたが、余島で4日間も話し合い、考えることができたことは、これから的人生に大きな影響を与えてくれました。

今、立たされている自分達の立場、役割の大切さを痛感しつつこれから地元で役立てようと思います。

このような機会を与えてくださった皆様に感謝いたします。

最後にカウンセラーの篠原さん、林さんB班の皆さん、4日間本当にお世話になりました。余島の思い出を胸に、また会える日を楽しみにしています。

余島万歳♪ B班最高♪

### 町 川 晃 三

私は、この3泊4日のRYLAセミナーに参加をさせていただいて、多くの仲間を得、そしてその仲間たちから多くの事を学ぶ事ができ、とても有意義なセミナーであったと思いました。そして、忙しい中時間をさいて、こちらにきていただき、私たちのために、有意義なお話をしていただいた先生方、そして関係者、スタッフの皆様、どうもありがとうございました。

私がこの4日間のセミナーの中で、特に印象深く勉強になったと思ったのは「地域社会の変動と青少年リーダーのあり方」というテーマで仲間たちと自分たちの考えをのべあい、討論しあった中で多くの考えにふれ、自分自身と社会との在り方について再認識させられる時間をもてたという事です。これは、私にとって自らをふり返るいい機会になりました。みな自分のおかれている立場は、学生であったり、仕事をもっている社会人であったりするわけですが、そういった中で自分たちが青少年リーダーとしてどのように考え方行動していく事が自らの、そして地域社会の向上につながるか、という意識を持ち続けていくよう努力を重ねていくつもりであります。人間は、一人では生きていけません、多くの人たちのお世話になり、生かされているという立場をよく理解し、一人の人間として、また他の人たちの役に立てるような人間になれるよう自ら研さんを重ねていかなければと思っています。最後に近い将来共に勉強をした仲間たちとこの地、余島で再び集う機会が訪れる事を祈りつつ当地を去っていきます。皆さんごきげんよう！

## 若狭光洋

最近の学生は、深く考え方を知らないとよく言われる。私もその一人であるが、このRYLAセミナーでは熱心に討論することができ、たいへん充実感を覚えた。このような場所を提供して下さったROTARYの方々に感謝すると同時に1つお願いがあります。

私が先のような学生であるのもかかわらず、充実感を覚えたということは、他の学生達も真剣に議論する場を知らず知らずのうちに望んでいると思うのです。そのような学生達に、もっと広く門戸を広げて、より多くの学生が、いろんな場所で、気軽に参加でき真剣に話し合うことができるよう配慮して下さればありがたい。そのため267、268地区のROTARYの方々は、他の地区の方々に働きかけることが必要だと思います。

それにしても余島はすばらしく美しいところでした。山もいいけど海もいいと、改めて感じました。

## 青木浩文

3月31日、私は一人でここ余島にやってきました。“RYLAセミナー”この聞きなれない、どんな内容の研修なのか、なにもわからずに。

しかし、余島を去ろうとしている今、私は一人ではありません。

高いレベルの講演を聞き、今まで会ったこともない、まったく初対面の各方面で活躍されているリーダー達と夜を徹して私自身、日頃考えたこともないような問題等について語り合い、多くのことを学び、そしてなによりも素晴らしい友を得ることができたからです。

またいつか会える日まで、各地域で各方面でリーダーとして元気で気張って下さい。

本当にみんなありがとうございます、いつまでも輝ける人でいて下さい。

## 齊 藤 庄 一

今回参加させて頂き、始めは不安というか、わからないという事、初めて出会う人々で、話すことができませんでしたが、時間が過ぎる間に一人一人と職域を超えた仲間と話し合っていると今まで自分になかったもの(考え方等)が発見できたような気が致します。今後とも今回での人々と長く交際し又、新しく進んで友情を深め尚、自分自身の向上をめざして他人の心を理解し合える心の輪を広げてこのセミナーの目的をいつまでも忘れず生活、又活動して行きたいと思います。

最後になりましたが、ロータリーの方々、ロータリアン、お世話して下さった人々、講義の先生方等にお礼申し上げます。

## 山 本 聰

ライラセミナーに参加させてもらってから、はやいものでもう1ヶ月半がたちました。私の場合、セミナー途中で帰らなければならなかったため、今頃になって感想文を書いている次第です。

余島では、人と人が理解を深めあうための十分な時間がありました。普段の生活の中では、なかなかつくり出せない時間がありました。その中で私が学んだことは、何といっても「人との出会い」のすばらしさ、たいせつさでした。これからも、このことを胸にがんばって行きたいと思います。

最後に講演で時間をさいて下さった諸先生方、余島野外活動センターの職員の方々、ライラセミナーの運営委員の方々、それから私をライラセミナーに参加させてくださった中村南ＲＣの方々にお礼をいいたいと思います。本当にありがとうございました。

## 福 田 美 典

3月31日朝、船を待つ間、すごく不安でいっぱいでした。でも偶然知っている顔をみつけた時点から不安も消え期待を持ってこの島へやって来ることができました。

私は今、リーダーの団体の中でもリーダー的存在になりつつあり、活動自体に不安を感じることが時々ありますが、真剣な話し合いを持つ余裕のないまま現在に至っていました。でも今回いろいろと、立場の違うリーダーどうしの中で、言いたいことを言い、それについての意見、経験ができるという、有意義な話し合いを持てました。これは、私にとって、とてもいい経験になりました。また、話し合う中で、真剣に話し合ってこそ真剣に笑ったりふざけたりができるんではないかと感じました。

これから1人地域にもどって、何ができるかわかりませんが小さなことでも、できることから実践していきたいと思います。

又、このような機会を与えて下さった方々に感謝し、このセミナーを続けていかれること、期待します。

## 田 中 愛 深

不安ばかりが広がり、どういうものになるか全くわからずまま、この余島の地にきました。しかし、この不安は1日目のキャビンタイムを終えた時、ここに来れたという喜びに変わりました。

このRYLAセミナーで私は自分の視野の狭さを改めて確認し、そんな自分にとてもショックを受けました。ハッと気付かされることが、数多くありました。自分の今思っているすべてのことを討論の場において述べ、それに対しての新しい発見もすることができました。

何もかもが私を一回り大きくさせてくれたような気がします。“すべてのものに愛を……”私の人生の大きなテーマになりそうです。

私をこの余島に導き、感動を与えてくれたすべてのものに心から感謝します本当にありがとうございました。

## 山 本 亜由美

長い人生の中で、3泊4日間、もしかしたら二度と来ないかもしれない研修を与えていただきましたことに深く感謝いたします。

講義の先生方のお話の素晴らしさは言うまでもございません。知らなかつた学問を知ることの喜びを再認識いたしました。

私は女性として、日本人として子供達に四季の良さを教えてあげたいと考えております。農協に勤務する関係で日本の自然について考えることが多くまた自然を肌に感じる時、安らかな気持ちをとりもどします。1日目の晩餐会の時料理の中にふきのとう、桜の生花が飾られていました。また毎日の食事のテーブルの上にはすいせんが飾られていました。おおげさな存在ではないやさしい草花に対し、研修生は無意識の安堵感とゆとりを感じたことでしょう。

食堂を管理していただいた方の心配りを大変嬉しく思いました。

フォーラムでリーダーのあり方について話し合いました。これからリーダーには時にはカリスマ的リーダーの出現も必要であると強く指示いたします。

私は、体験知識がまだ微量ですが、食生活に関する分業的リーダーの働きは果たせると信じています。学習する機会を見付け、自分の長所をのばし、地域でライラの仲間が活動していることをささえとして、励んでまいります。

最後になりましたが、このセミナーのために何日も前からご準備して下さり終始大きな愛情でセミナーをすすめていただきました、ロータリー、余島の皆様に感謝いたします。この喜びを今後は私たちが地域にささげるべく努力をしてまいります。

## 中 川 仁 美

3月31日に神戸に集合したときは、知っている人もおらず独りでした。今かかるときになると知っている人は数知れず、心を開き語りあった友も多くできました。とても素晴らしい出逢いでした。忘れられません。心に残る毎日の講義、午後からの活動、心を開き語りあえた夜、そして美しい余島の自然と野外

活動センターの人々、ロータリアン、カウンセラーの方々の努力、など本当に心に焼きついて忘れません。ただ残念なのは、他の班の人との交流の機会がほとんどなく、名前さえ知らないまま帰らなければならないことです。多人数で、まとまりがつかなくなるかもしれないけれど、他の班との交流できる場をつくってもらえば、また違った友情も育つかかもしれません。が、ここで得たことを忘れず、これからもやっていきたいと思います。そしてその想いはB班のみんなでつくった歌にこめられています。

白い砂の瀬戸の海から

深い緑の余島の国へ

今日も生まれる小さなきずな

こころ開いて語りあおう

いつのまにか ときがすぎても

巡りあえる そのとき

あの日の出逢い ライラの心

今もかわらぬ よろこび

(「ふるさと兵庫」のメロディーにのせて………)

### 酒 井 み お

こんなにたくさんの同年代の人達と一生懸命に話し合ったのは久しぶりです。夜は寝るのがもったいないくらいで(言いながら昨夜は一番に寝ましたが)刺激の連続の毎日でした。そして、忘れかけていた大切なことを改めて確認できました。それは今井先生の“Service not self”という言葉です。他人のことよりもまず自分のこと、という子供達が増えてきていることを嘆く前に、私自身はどうなのかを考えるべきなのだと今思います。

また、ここで得た友人との交流は長く長く続くことでしょう。

## 北代玲子

ロータリーの皆様、ライラを運営して下さった皆様、本当にありがとうございました。この3泊4日間がとても価値ある空間でした。

余島人になれて幸せ。

日頃の俗世会と遮断された自然の島。どこを見渡しても、緑の木々と海と広い空と……どこまでも澄みきった空気に包まれて大きな宇宙の愛を感じました。はっ……と気付くと足の感触が気持ち良くて足底から伝わってくる土の暖かさ、やわらかさを感じ生きてるんだと心から思いました。大きな満足感とゆとりとゆったりした時の流れ……。

自然是人間を本質的に限り無く自然体に戻してくれるのだと思いました。そんな中で未知の人々と出会い、語り合い、討論したり、すばらしい考え方に入れ、幸せを感じました。

私は限り無く無限大に人間や未来に希望をもっています。ここでの、すばらしい人々に、考え方出会い、はっきりとそう思いました。それぞれの地域社会から地球共同体、宇宙生命体まで限り無くやさしく浸透したいですね。

私は、ここにきて私のできる事を一つ見付けました。私が最後の時はすべての臓器、すべての器官を提供してそれぞれの細胞の中で宇宙にふれようと思いました。もちろん心は宇宙空間と同化して、宇宙をやさしく見守りたいです。

## カウンセラー 篠原成行

ライラセミナーの感想については受講生諸君にまかせるとして、小生はRC第267、268地区のロータリアンの皆様でライラセミナー参加の要請をしたいと思います。

毎年約70名(男45、女25)の受講生を送り出し、地域社会での良質のリーダーとして活躍している現実を見る時、いかにこのセミナーが重要であるかを感じます。インターアクト、ローターアクト、ライラセミナーいずれも良質のリーダーを育てる場である事にはちがいありませんが、地域社会のリーダーとの本

音の交流(時には徹夜の議論)は、ライラセミナーだけであります。参加してみないとライラセミナーの良さはわかりません。ロータリー活動は、ロータリアンだけのものではありません。良質のリーダーを育て地域社会で奉仕の灯火をつけさせようではありませんか、重ねて申し上げます。

一度、受講生諸君と寝食を共にし、若きリーダー達に良質の（あえて良質といいたい）ロータリー精神を植えようでは、ありませんか？

### カウンセラー 林 真 紀

ライラの仲間のみなさん、仲のよかったB・B'班のみんな、お元気ですか。人と人との出会いの不思議さを思うのがライラです。

はじめは、このききなれない「R Y L Aセミナー」が何なのかわからず、不安な気持ちで参加した人も多かったと思います。感想文の中にその不安が1日目のキャビンタイムのあとに来れたという喜びにかわったとかかれています。余島にきて未知の人と出会い、そして仲間になってしまふというのは、どうしてなのでしょうか。人と人が心をひらき、話し合うことのすばらしさ思います。人間なら誰でも、自分の話を聞いてほしい、又人の話もききたいという願いもってます。そうして仲良くなっていくことが人間の生活の第一歩です。そしてその仲間たちの力をあつめ、より高い理想をめざしてすんでいきたいものです。

キャビンタイムでの脳死の話も興味あるものでした。新聞などで脳死という文字をみるとたびにライラを思いだしています。

みなさんが自分のいる立場でライラをとらえ、その灯をもやしつづけて下さることを祈って居ります。心にのこる4日間をありがとうございました。

## C・C'グループ



THOMAS SHIN

Down to the deepest part of my heart. I truly didn't know what to expect when I first came to the 10th RYLA Seminar. I did look forward to relaxing for four days greeting the spring playing in the warm sunfilled days..... However, what I realized from the seminar was a bondship between myself and my fellow group members a reassurance from the Rotarians that I am not alone in trying to do what I truly believe in -- that I have responsibility to fellow human beings.

All my life I have been striving to understand "myself"..... who I am and what I should do in my lifetime. It goes without saying that I haven't completed the puzzle as of yet, and I probably won't complete it even until the day I die. But, I have been putting the pieces together in trying to make myself a better, a more complete , and a more understanding human being. Perhaps it a my endeavor to become a better person that really motivated me to give up everything in New York and come to a foreign country (日本)where I had no family, relatives, or friends.

During the two years that I've been in Japan, I met many friends, worked at various jobs, and seen a multitude of things. I truly feel that what I experienced in Japan has helped to make me a better person -- that these past two years have made me understand more of who I am, what I can do, and what I should do.

When I came to Yosima four days ago, I had no idea that the Rotary club not only consisted of members who are already doing what I want to do, but also that it supports and provides opportunities for the younger generation to develop and become a more complete and principled persons.

I feel fortunate to have met and spent days and nights together with many who have come from many different backgrounds who will undoubtedly go into many different fields. Some of us were younger while some of us were men and some of us were women, but most of us discovered that

we had one thing in common -- that we have a great responsibility, as a human being, toward our local, national, and world community....

I have already made arrangements to meet a friend I made here of the seminar back in America. I have already promised to meet four others in the very near future. Who knows, perhaps some of the friendships I made here will last a lifetime.... I certainly hope so.

I will return with the reassuring knowledge that I am not alone in feeling that I should not take for granted the fact that I came into this world as a human being -- that there are many others who feel the same way I do -- I belong with them. It is my great pleasure to be able to say that I will return with a renewed and a reinforced sense of purpose -- and that there are other true "human beings" who still care.

## 久 住 達 哉

私がこのセミナーに参加した理由は、自分の意志で参加したわけではなく職場から強制的に行って来いと言われて、RYLAとは何か、この島で何を学ぶのか、全然わからないまま参加しました。

1日目はぎこちない感じだったのが、2日目、3日目となるにつれて心の扉が開き、みんなと友達になれて私は本当にうれしいです。

これからもいろんな人々との出会いがあると思いますが、この「出会い」というものを私は大切にしていきたい。

今、目を閉じると頭の中ですばらしい先生達の講義を聞いたり、キャビンタイムで酒を飲み討論したことや、キャンプファイヤー、テニス、野球、アーチェリーをしたことなど、この4日間でできた数えきれない思い出がかけめぐります。それだけに、もうみんなとお別れしなければならないことが、とてもつらくてなりません。もっともっと話をしたいし、酒も一緒に飲みたい。せっかく友達になったのに……。長いように思えたこの4日間が、今では本当に短く感じます。

最後になりましたが、この4日間私達のために講義なさって下さいました先生方、C・C'班のお世話をしてくれたカウンセラーの方、そしてこのセミナーを何よりもすばらしい、意義のあるセミナーにしてくれたC・C'班のみなさん本当にありがとうございました。

P.P. C・C'班のみなさん同窓会は絶対やろうぜ！

See you again

### 西 尾 和 弘

人と接して話し意見を聞くことにより、自分以外の人間を理解できます。一人一人違った意見、考え方を持っていますので話した人の数だけ学びとる事ができます。このセミナーでいろいろな方々のさまざまな考えを聞かせていただき、自分の想像もつかない様なを考え、それを実行しつつあるという方も多々いました“偉いなあ”と感心するだけでなく、他人事ではなく自分も何かしなければならないと感じましたが、自分でも何をすればいいかよく解からないことが情け無く思えます。しかし、その事をしたために他人に怒られないのならば、他人のいやがる事をすれば良いのではないか、ゴミをみたら拾う、ゴミを拾って怒られる事はありません。難しく考えず簡単なことから実行します。

### 出 石 邦 彦

この4日間、実に充実したものでした。多くの友人をつくることができ、また、夜は酒を飲みながら夜おそくまで語り合うことができました。

最初、私はこの島にきて「あ～今から4日もここにいなければならないのか」と思わず思ってしまいました。もともと自分からライラに参加したのですが最初の段階では、見知らぬ人たちの中に放り出され、何となくいやな感じを持ったものでした。ところが、同室の人達との会話を通じ、その見知らぬ人のよさが分かったときから私のライラは楽しいものへと変わって行きました。そして

4日目にいたっては「あと一週間やれたらなあ。」と思うようになってしましました。「様々な職業についている、様々な年齢の人達と一つ屋根の下で討論することの楽しさ。」これこそライラの醍醐味だろうと思います。

ここに至り改めて私がここで学んだことの多さ、大切さを感じます。これから私は郷里、香川へ帰るわけですが、ここで学んだことを、私、ローターアクトにどんどん還元していくつもりです。そして来年、今度は私の大学の後輩をここに自信をもって送り出すつもりです。こんな貴重な体験は2度とできないのですから。

最後にこのライラを企画して下さったローターの方々に心より感謝したいと思います。

### 松浦博文

今、3泊4日の研修を終えて本当にすがすがしい気持ちである。

最初、余島に来るまでは、ロータリークラブの内容等、知らないため多少不安があったが、研修内容等については自分の職務である社会教育(生涯教育)の領域であり大変興味をもって聞くことができた。今まで自分が参加してきた行政の行う研修はどうしても時間的にきりつめた状態であり内容的にもつめこみすぎであった。そして大人同志の研修であるが、施設等の関係により「禁酒」であり、「夜10時には消灯」が普通である。

今回のライラセミナーで大変おどろいたことは、

- ◎時間的にゆとりがあること
- ◎講師陣のすばらしさ
- ◎部屋にカギのないこと(人の心にもカギをかけず、心を開くこと)
- ◎さらには時間的に無制限のミーティングであり、能力に応じてアルコールもOKだったこと
- ◎夜明けの3時、4時まで皆で話し合い本音が聞けたこと
- ◎そしてもっと驚いたのは、カウンセラー運営委員の皆さんが話と酒に、

おつき合いしていただいたことである

この4日間多くの友と出会い多くの師と出会いました。この出会いを大切にし、これから自分はどう生きるかということを考えながら学んだことを地域にもち帰って、小さな実践をしてゆきたいと思います。

### 坂 本 正 徳

私にとって2度目のRYLAセミナー参加ということで、今回は気合十分、前回も3泊4日のスケジュールの中、本音で話し合い充実したセミナーでしたが、今回は前回以上のセミナーにしようとやってきました。

今回のセミナーの仲間は、前回に勝るとも劣らない好人物がそろっており、大変勉強になることが多く毎日感心の連続でした。毎夜毎夜の班別ミーティング?で、生まれも育ちも違う人同士が、心の中にあることまでさらけだして話合われました。

今日、我々若者が自分の考え方をそのまま口にする機会というのは、めったないことであり、まさにRYLAセミナー様様。なおさら2度目の参加の私には、心の底からありがたいセミナーであります。

前の方にも書きましたが、前回のセミナーでもすばらしい数多くの人々と知合い、今回もさらに多くの人々との出会いがありました。

ぜひまた参加させていただきたいのですが、私はもう2度目ですので、もう参加できませんので、地元の若者に「こんなえいセミナーがあるぜ」と、参加を勧めたいと思います。前夜のミーティングのダメージが大きくて変な文章となりましたことをおわびします。

最後にカウンセラーの三木、橋本両先生、ガバナーの内藤先生はじめ当セミナーの運営委員の皆さんどうもありがとうございました。

## 石 井 靖 宏

たくさん学び、たくさん友人を作り、たくさん語らい、たくさんのこと経験したセミナーでした。はじめRYLAセミナーとはどんなものか、ばく然とした思いしかありませんでした。余島に来て班分けされ、同室の人たちが決まり自己紹介をする。緊張したなかでの語らいでした。ところが、30分もすれば、あたたかい雰囲気が流れ、笑い声が聞こえるようになりました。青年団の人、教育委員会の人先生、会社員、学生と職業は違ってもここでの立場は、みな同じどの人も地域社会のなかでのリーダーたちでした。普段つき合う人々が限られている学生の私は、社会の中でリーダーとしてりっぱに活躍されている同じ班の仲間の話を聞き、陳先生をはじめとしたりっぱな講師の方々の講演会を聞き、学び考えさせられ、たった4日間ではあったが大きく成長した思いを感じました。これからリーダーとしてのありかたを大いに学び、大学に帰つてからも、このセミナーで学んだことをいかして香川医大RACの活動を盛り上げるために、そしてひとりの人間として成長していくために頑張りたいと思います。

最後に、たった4日間でしたが、私の人生のひとコマとなり、一生忘れることがないであろうC・C'班の友人達、そして私達を直接お世話下さった三木先生と橋本さん、またこの第10回目RYLAセミナーを企画し、お世話下さったロータリアンのみなさん、このセミナー参加のチャンスを与えて下さった高松東RCのみなさんに感謝いたします。これからもこのセミナーをずっと続けてほしいことを希望しペンを置きたいと思います。みなさん、ありがとうございました。

## 荒 木 高 司

4日間のセミナーを終えて、多くの講師先生が人生の先輩方々に青少年問題をいろいろな方面から聞き、青少年の指導育成について学んできました。そこで指導育成にあたり最初からやらなければならないことは、“己を知り、相手

を知る”という自他の相互関係であるということを教わった。“己を知り、相手を知る”ということは、まず、己の自分自身の意見というものを持っていなければならない、その上で相手を知る。相手を知るためにには、自分自身が相手を受け入れる状態を作らなければならない。そこで相手を理解し、相手から自分を理解してもらう。自分だけの一方的な働きかけでは、なかなか相手を理解することは難しい、そのためには、“相手の意見をうまく聞きいれる耳”が必要となってくるのではないかと思う。

今回のセミナーで自分自身に利を得たと思うことは、共同生活の中での相互理解だと考える。共同生活の中では全く違う社会の人々、留学生、医者、医者の卵、保母さん、教師の卵、福祉職員等、いろいろなジャンルの人々と心をわかち合い、違う社会を少しでも知ることができた。特に神戸のY.M.C.A.に通い一般企業で働き、将来の計画設計を持って現在日本を学んできたトーマスとの出会いでアメリカというものを知り得たことはもちろん、逆に彼によって日本というものを知ったということに強いショックともいべきものを得た。

これから将来、国際化が進められる上です、はじめに理解すべきことは外国を知る前に日本自身(政治・経済・文化・歴史・地理etc.)を知るということではないだろうか、己を知り、相手を知る。この言葉が実際に体で体験できたということは、このセミナーでの最大の利益だったと思う。

### 砂 田 経 和

私は、フォーラムの時間が一番印象に残りました。皆様の考え方が個々の性格の違いを表面的にし、私の理想とする思想を教えてくれる人に逢えば

- ・人間の違いを見てはいけない。
- ・否を嫌う事なれ。
- ・伝う言葉を聞く。
- ・その型がいやしくてもえらい。
- ・日々の自らの行ないが思想を決める。

という欲願が実行され大変有意義な又、貴重な時間を過ごさせて頂きましたことを感謝しております。ただ少々不安に思われる事があり、戦後になってから豊かさに色けが増してくる時代になった艶の時代になってきてると思いますが私達が求めている高質化、高品化etc.少しずつぜいたくになってきていますので、まだ物が不足している他国がありますのでロータリーのプロフィットに記されているように“人にすれば自らにも与えられる”というのを少し理解できたように思いました。

### 杉 村 雅 代

第10回ライラセミナーに参加させて頂き、この4日間充実した日々を過ごさせて頂きました。講師先生方のお話し、又仲間同士のふれあい、等に私も参加できましたことを大変光栄に思い、ライラセミナー諸先生方、ありがとうございました。

皆さん一人一人のしっかりした意見を聞かせていただいた時、今まで私は、何を考えていたのかと自分自身の気持ちに不安を感じ、あらためて考えさせられ身のひきしまる想いでした。

毎日の日々を自分からにとじこもっていたことを、強く感じました。このライラセミナーを機会にここで学ばせていただいたことを、何かの形でお役に立てるようしたいと思います。

キャビンタイム、キャンプファイヤー、レクレエーション色々思い出が出来ました。

カウンセラーの三木先生、橋本先生 C・C'の仲間(受講生)いろいろありがとうございました。今度会える日を楽しみにしています。

### 三 原 美 保

この2泊4日のRYLAセミナーに参加できてよかったです。今は本当にそう思います。実の所、クラブから一人の参加という事、このセミナーがどのようなものなのか分からなかった事などから多くの不安がありました。しかし分からぬなりに、せっかく参加させていただくんだから「一人でも多くの友を得て帰ろう」と自分の目標を決めて参加しました。

きっと一人での参加がよかったです。この余島に来るまでにすでに友達ができました。そしてこのセミナーが終わろうとしている今、「あなたの目標は達せられましたか?」とたずねられれば「はい」と答えられます。初めに、2泊4日と書きましたが、昨夜は最後の夜という事で朝まで語らいゲームをしたからです。とても楽しかったです。4日間の睡眠時間が、9時間…………これも私にとっていい思い出です。

それから感動した事があります。それは、今まで何のつながりもなかった人たちが、お互いを信じて心を開いて語り合うことができたからです。お互いを信じていれば、なんでもスムーズに行きます。部屋のカギなんかも無用なんですね。このことは、この余島にだけしか存在しないことなのでしょうか?

神戸に、日本に、そして世界中に存在して欲しいです。

### 西 尾 美 香

今回RYLAセミナーに参加して、直接リーダーとしてというよりもまだ、学生ということから経験も少なく、人間としてまだまだ未熟なので、いろいろな人の出会いを通してもう一度、自分をみつめ直し成長していくことを考えていました。そして、いざ始まってみると、一人一人がいろんな活動を通していろいろな考えを持っていて、それをみんなが本音でぶつけ合う、年齢、性別、今まで育ってきた環境も関係なく1つのことについて話し合う。私の今まで20年間の人生の中には一度もなかった経験で、少ない経験からも自分の考えを一生懸命ぶつけていく中から自分の中に新しいものを発見したりして、驚きながらもワクワクしてきました。

レクリエーションの時には、班が一体となって年齢、性別、関係なくソフトボールをしたのですが、みんな幼年に戻って一心にボールを追いかけ、相手チームになりながらもお互いに理解を深めていきました。それが点数にあらわれていて、20対21で逆転サヨナラというはくちゅうした試合となりました。言葉だけでなく体を動かすことによって、完全に個人から仲間という意識を持てるようになりました。

私達の班には、アメリカ人で日本に来て2年になる人と一緒になり日本人が日本では絶対に気付くことがないような、考え方を深く追求する機会に恵まれました。そして新しい日本人観・世界観を持つことができました。これらの豊かな経験をすることができて、振り返ってみるとたった四日間ですが、とても凝縮し充実した日々を過ごすことができました。

この経験を私のこれから的人生・人間性に反映させて、リーダーとして人間として成長していきたいと思います。

本当に、こんな機会を与えていただきましてありがとうございました！

### 岡 田 多恵子

“思索のとき”に海を見ていて、なぜ波は寄せてはかえすのだろうと思った。一見ムダのように見えるのだが——だが海は海である。沼でもないのだ。波うちかえすのが海の役割なのだ。そして、見ているうちにまた思った。海は人間とよく似ているなあと、やさしくうたったり、くすぐりかけたり、怒ったり、おいかけて来たり、そのうえ錯覚をおこさせたり——海のむこうのむこうのむこうの方の船は、まるで海に浮かんでいるのではなくて、海の上、空中に浮かんでいるように見える。人間関係でも離れすぎていると誤解したり、偏見を持ったりしてしまう。逆に近づきすぎて見えない場合もあるが——そして満ちたり引いたり、まるでかけひきのように表情を表わす。双方ばかりではなく、他方に渡って——海はそのなかで気くばりなんてものをしたりしているのだろうか。

海はなぜ波うつのだろう、そしてそれはなぜ、こんなに語りかけるのだろう。そこで気付く同じなのだと——海と人間が似ているなどとはおかしい。人間ってつくづく自然物なんだなあ。だから海と人間が語り合えないはずはない。

けれど海はなぜ波打つのだろう、それを疑問に思ったり、自己嫌悪に落ち入ったりすることはないのだろうか——海は答えない、ただ波打つ。

私は同じ自然の一部の人間でやはり、自分の役割をはたしているとは思っているが、常にうつろっているような気がする。

何が、何を、何も、ゆるがない。動きながらゆるがない。

私は、干いてみたりまた広さを変えてみたりする水溜りのようなものだ。何をすべきか、わかっているはずなのにゆらいでしまう。

海よ、水たまりが自己嫌悪に落ち込んだ時はどうしたらいいのだ。

海は、ただ波うつ。「私に逢いにこい」そういうているのか。

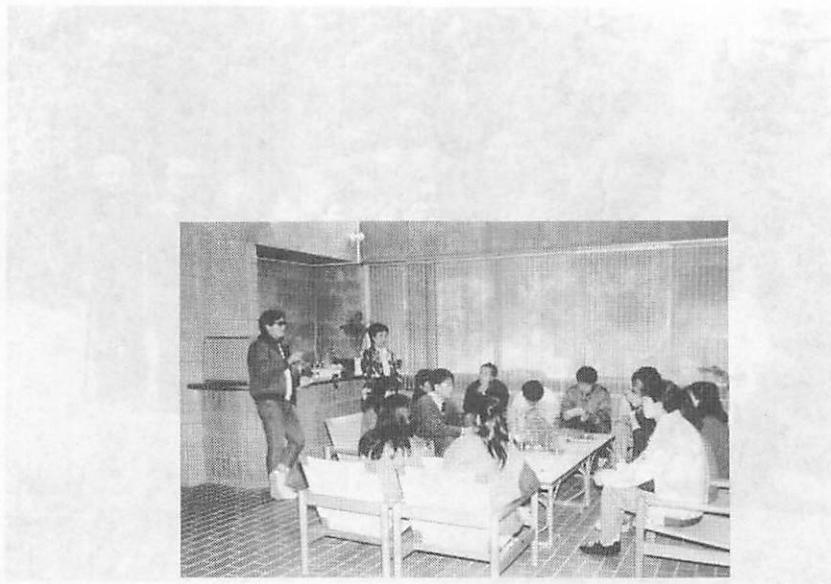
R Y L Aに参加すると人生が変わります。それは、普段考えないことを考えさせられたり、知っているはずのことにあるためて気づくからです。なぜか色々な人間の持つエネルギーと余島の持つオーラがそれをさせるからです。積極的に生きていこうと思えば、知りたくないことを知らなければなりません。自分の中のあらゆる感情を見つめなおし前進させる力が、ここにはあります。幸せになろうと思ってここへきました。自分から逃げようとしないで、ここへきました。多少問題あるなあと思いつつもいいセミナーだったと感じています。私は、2度のR Y L A経験によって、より幸福な人生を送ることが出来るでしょう。ありがとうございました。

### カウンセラー 橋 本 知詠子

第10回の記念すべきR Y L Aセミナーに参加させていただき、大変有意義な4日間を過ごすことができました。関係の皆様方に深く感謝致します。問題の多い現代社会をこれから担う青少年指導者との出会いは、毎年のことながら、とても参考になります。思いがけない発見に驚嘆し、又、心の糧となることも

多々あります。

今回も R Y L A の燃え上がる炎に浄化され、心豊かに帰宅致しました。ありがとうございました。



## D・D'グループ



## 筆 谷 律 男

ついこのあいだまで知らない者同士だった人達が、このＲＹＬＡセミナーで知り合い交流を深め、今、余島を去ろうとしています。

このセミナーに参加する前まで、自分自身の心の中にある迷いが、たくさんの人達との語らいの中で講義を聞くことによって、少しづつその迷いからぬけ出し、新たな活力となってきたように思います。そして、3泊4日の間、人生の先輩としてのロータリアンの方々と平等、対等に話し、何ともいえないほのぼのとした暖かい気持ちで、私を決して無理押ししないで見つめてくれた、カウンセラーの東(トン)さん。あらゆる条件に恵まれ、心のリッチさを感じました。

そんな気持ちにさせてくださった、友達、ロータリアンの方々、そして、余島に心から感謝します。

## 高 橋 健 治

今回初めて会う人同士が4日という短い期間で、ある程度知りあえ、心の中を少しでも話せるという関係となるＲＹＬＡセミナーはすばらしいと思います。1日目よりは2日目、2日目よりは3日目と加速をつけて親しくなることがありました。

私はこのセミナーに、なにか1つでもいいから自分のためになるものを持って帰ろうと決めて臨みました。この4日間のセミナーで私が得た物は

- ① 挨拶の大切さ。
- ② 自分の考えを人に伝える難しさ。
- ③ 仕事に対する取り組み方の個人のちがい。
- ④ 青年リーダーのあり方。
- ⑤ 自分の人生の再確認。

以上5つのことです。

私はセミナーで経験したものを、この場だけのものとせず、今後地元の生活

に生かしてこそ、研修の意義があるものと考えます。

班の人々、カウンセラーの方、ロータリアンの方々のおかげで、研修中楽しい生活が出来ました。とても感謝しております。

### 松田祥一

青年指導者としての在り方を求めて参加したセミナーも今日で終了します。国際ロータリクラブの奉仕の理想を胸にいだいて臨んだ私ですが、その理想像が更に高まってきた思いです。ボランティアには、種々の理想があり、物事に対する考え方も多種多様であります。私の理解しうることが出来なかった提議でも他のメンバーが「そういう場合にはこういう方法があるよ。」と、手を差し延べていただきました。他のメンバーと共に得たものが、うっすらとではあるが『私の奉仕の理想』として浮かんできましたので、箇条書きにしたいと思います。

- ・頭から人の意見を否定しない。
- ・自己主張を持つことは大変大切であるが、人に押しつけてはいけない。  
(自然に生まれるのがよい。しかし不和雷同であってはいけない。)
- ・他のメンバー等に強制してはいけない。
- ・最終目的を貫くまでに責任をのがれてはいけない。
- ・全てを財力によって解決しては眞の理想像とはいえない。  
(我々の目標とする財産とは金ではなく人である。)

全く知らなかつたメンバーと4日間、寝食を共にした意義が大変重要であったと心から信じて疑いません。短い期間ではありましたが、年齢・性別を越えて、まるで新しい家族が誕生した思いです。お互いに助け合い、現在、自分の置かれている立場、悩みを打ち合ひあって生活しました。

ネパールで医療活動をされている岩村昇博士の「サンガイジュネコラキ」すなわち『生きるとは分かちあうことなり』の意味が、私自身、ネパールへ行き生活し、又、このライラ・セミナーで生活したことと合わせて、ようやく理解

する道が開いてきた思いです。成果が現われるのは、すぐには期待できません。しかし、今日が分岐点です。ゼロです。

人生は2度ありません。1度だけです。読書をして、自分自身が主人公になり、思想にふけるのもよいし、相手の立場にたって思考するのも人生2度、3度と増やす方法であると思います。しかし、本当の人生とは1度限りです。だから、今、我々はあらためて自分を見つめなおすよい建設期であると思います。基盤とはいくつあってもよいはずです。それをこの「ライラ」という機会で更に強固なものになるとしみじみと思うわけであります。

まだまだ未熟ではありますが、これからもあらゆる面からご指導いただき、(私の財)を育てて生きたいと思います。

268・267地区のロータリアンの方、ならびにお世話していただいた方々、本当に有難うございました。

### 久保田 巧

僕がライラセミナーに参加するに当っての目的は、将来の仕事について考える為だった。4月から大学3回生になる。就職とは無難に4回生になり、名の通る仕事に付く。こんなもんだろうと思ってた。しかし講義の中で、友と語る中で考えが変わった。夢の仕事を追っている方。楽しく仕事を語ってくれる方。国際的な仕事をねらっている方。また自分と戦いながら深く考えている方。みんなしっかりと自分をみつめてがんばっている。自分が好きで、満足できる仕事。今そのワンステップが踏めそうだ。すぐには、社会に貢献できないが、時間をかけ、きっと人の為、自分の為に満足できる仕事につきたいと思う。

## 谷 村 邦 昭

すばらしい環境、望ましいリーダーシップ、充実したプログラム、これらの条件の下で研修をさせていただき、体験を深めることができたことに大変感謝しております。当初ロータリーの意義さえ把握できなかつた自分が、実際にセミナーに参加し、多くのすばらしい人々と出会い、意見交換し、友情の輪を深められたことを今思うと、大変うれしく思います。

特にバスセッションでは素直な気持ちで語り合え、人の意見を聞き入れ、同時に自分自身を見つめることができました。この研修で学び得たことを地元に持ち帰り、職場あるいは、青少年活動のリーダーとして役立てていきたいと思います。

このようなすばらしいセミナーに参加させて下さったロータリークラブの方々、御講演なさった諸先生方、ロータリアンの方々本当に有難うございました。

## 牧 勇 司

このＲＹＬＡに参加するとき、最初すごく不安で、ロータリーのことわからぬし、もう不安で不安でたまらなかつた。でも2日ぐらいから、班の人たちと、すごく身近に接することが出来るようになって、いろいろな意見を聞き、すごく視野が広くなったような気がする。勉強になった。

講義もたいへんすごい先生方ばかりで、いいことも聞けたけれど、少しつまずかしいことわつた。最初は不安で不安でたまらなかつたＲＹＬＡも、最後にはたいへん満足出来て、本当に貴重な体験が出来たと思います。

## 前 川 聰 一

R Y L A 研修のプログラムも最後に近づいた今、考えることは、R Y L A の意義についてである。この研修では、形式的なことが多すぎた。（ロータリーの特徴の事だが）具体的には、ロータリアンのたてまえであろう、また、ロータリアンの方々の我々受講生に対する問題呈示が少し、強すぎたように思われた。お話では対等な立場を強調され、とても嬉しかったが実際はロータリアンの方々の立場が我々より少し上であったことは、ロータリアンの我々に対する情熱故とわかっていても残念であった。

ともかく、ロータリアンの方々のR Y L A に対する考え方もあるだろうが、僕はこの研修で得たものや、理解したことを、中心にR Y L A について報告してみたい。

プログラムは講義、ディスカッション、レクリエーションそして深夜の交流会を含めた共同生活に大きく分けられる。

講義では、著名な先生方がテンポある魅力的な話を数多くなされ、強く共感を覚えることがあった。内容はもちろんのことディーンをはじめロータリアンの方々も含めて皆、とても話がうまい、テンポ、論理展開、ユーモア、どれをとってもすばらしく人と接する時、このように魅力的な話ができたらどんなに素敵なことだろうと思った。

ディスカッションも受講者、ロータリアンすべてが情熱にあふれ多種多様な思想、哲学価値体系に接することができとても貴重な体験をした。

レクリエーションも十分楽しんだが、それ以上の充実した時は、深夜の交流会にあった。最もよかったですのは、皆、自分自身の個性をすべて出し言いたいことを言い、建設的な面で我放題になったことであろう。この我放題は一方的に他人を排除することではなく、他人をその人自身だけみて、接することができたということである。

このようにして、その人の哲学をより純粹に年齢、地域などの要因なしに本当の意味での人間性の交流ができたと思う。

もう一つ嬉しかったことを挙げるならば、僕らの班はとても明るく、仲間意識が強まったことが挙げられる。

この異様な明るさは、ＲＹＬＡ本来の雰囲気でなかったかもしれないが、少なくとも僕らは楽しく充実した時を共有できたように思えた。

残念なこととしては、もっと班単位だけでなく、全体としての盛り上がりがなかったことである。

ともかく、このように情熱に溢れる友人、カウンセラーに恵まれ、自分自身の個性哲学を主張し、他の人の哲学を吸収できたことは、とても意味のある研修であった。

最後にこの研修に参加させていただいたロータリークラブ、ディーンをはじめとするロータリアンの方々、又、いつも酒を食らい笑って僕らを見守ってくれたカウンセラーの東(トン)さん、関さんには大変失礼な言動もありましたが、今とても感謝しています。

僕のとてつもない我儘と冗談のような行動を飽きれながらつきあってくれた仲間たちに感謝して、筆をおきたいと思います。

また、今度会うときも互いにあきれるような、人間でありたいと思います。

### 藤 本 清 仁

「お金を残すのは最低、事業を残すのはまあまあ、人を残すのは最高。」今第10回ＲＹＬＡセミナーを終えて感じていることをひとことで言うと、「私にとって実に収穫多きもの」といえましょう。このセミナーで得た体験を自分のものだけにするのではなく、地域青年団を持って帰り、今まで以上に次代の青年リーダー養成につとめたいと考えています。

中でも再認識し学んだことは数多いけれど、自分なりにつぎのように要約しました。

- ① 講演を通して得た幅広く柔軟なものの見方や考え方。
- ② パスセッションやフォーラムで真剣に学んだリーダーに必要な深い愛情と人間性。

### ③ 友と語り意見をたたかわしながら芽生えた友情。

今回のRYLAセミナーという有意義な時間を過ごさせていただいたのは、ひとえにロータリークラブの方々、とりわけマーシャルの篠原さん、ディーンの深川さん、D班カウンセラーの東さん、関さんのおかげと感謝しています。

## 中 村 芳 行

今回のセミナーに参加するに当って、ロータリー及びこのセミナーの内容についてあまり理解してはなかったけれど、地域社会及び、青年リーダーの持つべき考えについて、勉強をし、1つでも得られる物があればと、またいろんな所から参加して来られる多くの人と知り合えることを思い、この余島にやって來た。

まず自分の住んでいる町を見直し良い所、悪い所、他の町との違いを見つめ直す目を持ち、理解できるように4日間で学んだ事は、地域社会に対する、社会的、文化的、見直し、そして人間関係、文化等残さなければ、ならない物、変えてはならない物、そしてそれらのことに対して、青年の考え方、あり方、活動について、またそのことを自分の町、地域に対していかに学んだ事を元に考え、また行動出来るか、そしていかに社会的地位の発展が、文化的質の向上が出来うるか自分達の仲間と考えて行く大事な問題として行動して行きます。

まだまだ他にも考えられる事があると思いますが、まず自分自身、広い視野を持つよう、いろいろな事や物を知り、勉強して行くことを思います。

最後にこのセミナーを終えて自分の勉強不足、そして行動のなさ、自分自身に考えさせられ、それらを1つでも早く学び行動できるよう勉強し、そして地域に、また社会に少しでも協力し、手伝い出来るように、考え、行動して行きます。

## 岡 崎 知 信

潮騒、磯の香り、水面に揺れる瀬戸の漁火……。幻想的で、大自然に抱かれたここ、余島野外活動センターでのRYLAセミナー4日間の研修……。それは、私にとって人生の半ばにして自己を再発見し、社会に支えられて余命を育まれている己に気づかせていただいた4日間であった。

自力を頼り、他力を頼まず、自己中心的な生き方をしてきた昨日までの自分におぞましさを覚え、心から洗い清められた余島での生活は、この後の私の人生に、貴重な一里塚を築かせてもらったと、ただ感謝の気持ちで一杯です。

昨日まで全然見知らぬ間柄であった人々と出会い、語り、学び合った4日間が、長いようで短く感じられてなりません。

“give and take”で歩んできたこれまでの生き方を、ロータリアンの方々の精神に一步でも近づくため、“give and give and give and give and take”で明日からは、歩んでいこうと決意を新たにしています。

“人のために愛の灯を分かつ喜び”に気づかせてもらった私は、本当に幸せ物です。このセミナーで学ばせていただいたことを糧として、明日からは、地元でささやかな実践活動を展開していく覚悟です。

ロータリアンの皆様、セミナー受講生の友よ、本当にありがとう！

## 山 根 みどり

私は、幼稚園に勤めています。特にボランティア活動はしておりませんが、どの社会でも人間を育てるということにはかかわりないことと思います。このRYLAでは、皆が完全な平等、対等の立場で話ができるような機会を与えてくださいました。バスセッションでは、生活環境や職業、ものの考え方や受けとめ方の違う方々が共通テーマで話し合いました。

保育者は、子供たちと日頃接する時、子どもの素直な心や目に触れた時、目的に向って活動が発展できた時、子どもの反応に手ごたえのあった時、子どもと共に感動できた時などは、保育者として喜びと充実感、生きがいを感じ

ます。子どもを保育するには、いろいろな目標をたてて指導します。全てのものに愛情をもって接すること、1人1人の個性を大切にする、人と人との触れ合い、ここで学んだことは幼稚園教育の根底でもありました。また、自分の意見を他の方に理解していただけるように話をするというのは、改めてむづかしいことだと実感いたしました。

このＲＹＬＡには「ロータリーの方からすばらしい会よ、ぜひ参加しなさい」と進められ、初めて参加させていただきました。未来をになう子ども達を指導する保育者として、自分を見つめる時が持つことができました。

午前中の講義もすばらしくて参加できたことに感謝いたします。どうもありがとうございました。お世話してくださいましたロータリーの方々やカウンセラーの方々へ、終りになりましたが、どうもありがとうございました。

### 森 下 瞳 子

このＲＹＬＡセミナーを受講して、第1日目のキャビンタイムで皆さんが、なんて前向きでしっかりした意見を持った人達だろうか、と驚きました。今日初めて出逢ったばかりなのに、お互いに意見を交じわし、情報を交換し合い、交流を深めていく——。広い視野を持ち、経験が豊かでないと話が途絶えてしまうのに、夜中になっても話題は尽きません。私は皆さんに比べ何で話題が片寄っていて社会が狭く、会話に加わろうと思っても経験不足でうまく話せない。そんな自分がはがゆく感じられました。それでも“自分のやりたくない事は無理にやらなくてもいいんじゃないか、しゃべりたい人はしゃべればいいし、しゃべりたくない人は無理にしゃべらなくてもいいのではないか”という考え方で話し合い、得る所は得、セミナー後問題提起すればそれでいいのではないかと思いました。今、ふり返ってみて自分なりに意義のあった収穫の多い、非常に楽しいセミナーであったと思います。このような出逢いの機会を与えて下さったロータリーの方に心より感謝し、この経験をどのように生かすかは、今後の課題としていきたいと思います。

## 松　田　尚　子

人との交わりの中で自分をこれだけ見つめる時間と場を与えられた事を感謝します。いろいろな環境にある人としゃべる事により、多くの事を知りました。班のメンバーの一員として、楽しさ、思いやり、誇りを見つけたキャンプです。これからも、いろいろな所で、このような場を見つけていくべきだといなあと思っています。

あっという間に、過ぎてしまった3泊4日。ただただいろいろな場から人々から、刺激を受けたばかりで、自分の中で消化吸収するのはこれからだと思っています。

最後にロータリーのみな様、カウンセラーや講師の先生方、そして参加者のみなさん、楽しかったです。有難うございました。

## 安　福　裕　恵

ライラセミナー。3泊4日の短い時間ではあったけれども、理屈抜きで楽しかった。おかげで印象があまりに強く、帰って来てしばらくの間はライラボケ(?)するほどでした。とにかく、このライラセミナーに参加して私は、すごいエネルギーを充電して帰ってきました。余島での生活は、この上なく快適そのもので、食事は美味しい、時間的拘束も無く、世間の雑音の届かない解放の島でした。出会う人、出会う人みんな初対面で最初はぎこちなさもあったけれど、朝夕と寝起きを共にするにつれ、どんどん打ち溶けていけました。ライラの仲間は今日知り合ったばかりで、それぞれ年齢も違えば、職業も違う（余島に来ていなければ永遠に出会うことがなかったかもしれない…）しかも、お互い昨日まで自分を全く知らない他人同志。でも何がいったいそうさせるのかわかりませんが、自分自身のこだわりがどれ、素直な気持ちで、みんなといろいろな事を語り合うことができました。今思っても不思議な気がします。そして、いろいろな人の意見や話を聞いているうちに実に多くの刺激を受け、触発される部分がありました。学生時代の級友でもなければ、社会の同僚でもないライラの仲間。これからもずっと大切に。

## 川 野 由 記 子

R Y L A セミナーに参加して、はっきりいって自己嫌悪におちいりそうです。私は20才で今年、大学3回生になるのですが、自分の考えのなさに情けなくなりました。参加している方々は、それぞれにしっかりした自分の考えを持ってらっしゃって、自分はどうで、どう考えているということを話されるんですが私は何も言えないんです。何も考えてないわけではないのですが、どれが自分の本当の考え方で、それをどのように説明してよいかわからない事に気付きました。いろいろな人と出会い、日々、自分がどれだけボーッと生きているかということを痛感しました。とういう意味でR Y L A に参加したことは、とても大きな刺激になりました。

もっともっと刺激のある毎日を送りたいと思いました。

## 細 川 勢 子

ほとんどR Y L A がどういうものか知らないままに参加してしまった私ですが、1日目よりは2日目、2日目よりは3日目と次第にR Y L A の意図するところが理解できてきたように思います。

全く知らない人々と友達になり、講演を聞き、（特に田中先生の Lecture が心に残りました。）討論する 初めは不安もありましたが最終日の今日は、“何て短い4日間だったんだろう” で感じています。

このR Y L A は未知の人と出会う機会であったと同時に未知の自己を発見する機会でもありました。自分は将来どういうことをしたいのか、それはなぜなのか考えてみることができました。

最初からはっきりした目的意識を持って参加された方もいらっしゃるのに、私のような者がこの場にいるのは、いけないんじゃないだろうかと思ったこともありましたが、途中から考えが変わりました。“折角のこのまたとない機会を活かさない手はない” と思うようになったのです。

このR Y L A セミナーで得たものをより大きく、より深くしていこうと思

ます。

最後になりましたが、カウンセラーの東さん、関さんには本当にお世話になりました。ありがとうございました。

## 前田桂子

このＲＹＬＡセミナーに参加することができて、ほんとうに良かった……。という思いで今はいっぱいです。私にとってのこの3泊4日間は、得ることのたいへん多いものでした。

その中でも、いろいろな人との出会いはこれから私の、なにか大きなものを残してくれたような気がします。年齢、職種など、様々な方々と寝食をともにし、いろいろな体験話や考え方をたくさん聞かせていただいて、目が覚めるような思いがしました。このセミナーに参加されているみなさんは、“生きる”ということをしっかりとみつめて、いつも輝いておられるように思いました。私は、まだまだ未熟で、いろんな体験も乏しく、圧倒されることばかりで、戸惑うばかりでしたが、これから、もっともっと視野を広げて、自己を研鑽していきたいと思いました。

今、このセミナーを振り返って思うことは、ただ「よかった…」で、おわらせるのではなく、これからにどのように生かしていくかにこのセミナーの本当の意味があると思います。今は、まだ整理することはできませんが、これから、ゆっくりと、みつめ直しながら、これから自分の自分を高めていきたいと思います。

最後になりましたが、このセミナーを開催し、またこのセミナーに参加させてくださったロータリーの関係者の方々、C班をあたたかくみまもってくださったカウンセラーの先生方、そして、すばらしい人世観を与えてくださったC班のみなさんに、大変感謝します。

ほんとうに、ありがとうございました。

## 小 島 之 子

今回のＲＹＬＡセミナーでは、たくさんの人と出会い、新しい仲間がたくさんできました。色々な活動をし、仕事を持った各リーダー、そのリーダーをお世話してくださったガバナーやディーンの方々、そしてすばらしいお話をきかせてくださった講師の皆さん、本当に私達若者を4日間導いてくださりありがとうございました。

ひとたび職場に入ってしまえば、そこはとても小さな世界であり、なかなか情報が得がたかったりします。同じ仲間の集いは専門的な分野をより深く考えしていくのに大切で、勉強になりますが、違う分野の人々と接することによって、今までよりももっと広い心で見つめることができます。そういう意味で、今回のセミナーは、私による刺激になったと思います。

実践の場に戻っても、どこかで同じような仲間がこれから未来に向かってがんばっていることをはげみに、私も負けずに指導していきたいと思います。

## 東 敬 三

第10回のＲＹＬＡのカウンセラーとして、第5、6、8回に引き続き再度参加させて頂きました。

余島の自然の環境は多少は変化したものの、やはり『友と出合い、神と交り愛の灯のもえるところ』にふさわしい雰囲気で、3泊4日のＲＹＬＡセミナーはさすがに、素晴らしいものでした。

深川ディーンの『心を求めてＲＹＬＡに到り、心豊かにＲＹＬＡを去ろう！』のお呼びかけ通りに、ロータリアン方と受講生が心を開いて精神的に高い境地に至るべく色々な面で勉強させて頂きました。

ただ今迄のセミナーと何かちょっと違った空気は、受講生達の一部ではお客様気分になっているのではないかと思ったり、或いは学生時代の『合同コンペ』と、とり違えているのかなと思った瞬間もありました。本当のＲＹＬＡの意義をもう一度考えてみたいと思います。

# RYLA 10 年

回 数	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回
開 催 日	1979 3.29~4.1	1980 4.3~4.6	1981 4.3~4.6	1982 3.19~3.22	1983 4.2~5
ガバナー	梶浦暉一 執行孝胤	中島源多 胡楠裕	近藤良一 今井鎮雄	谷村健助 坂本智元	大見正俊 岩堀通夫
顧 問				今井鎮雄	今井鎮雄
ディーン	今井鎮雄	深川純一	深川純一	深川純一	江藤一明
講 演	来るべき余暇時代におけるレクリエーションの意義	世界の孤児日本にならないために	人間と役割、青年期の意義	生きるとは分かち合うこと	青年理解
	池田勝 (筑波大学助教授)	秦泉寺正一 (高知大学名誉教授)	田中國夫 (関西学院教授)	岩村昇 (神戸大学教授)	今井鎮雄 (神戸YMCA総主事)
	社会の動きと青少年	今日における青年と大人との関係	社会と青少年	日本の社会とグループ青少年指導者の責任	社会と青少年
	今井鎮雄 (神戸YMCA総主事)	田中國夫 (関西学院大学教授)	増田光吉 (甲南大学教授)	江橋慎四郎 (鹿屋体育大学学長)	芳村超全 (靈山寺住職)
	態度と理解	グループを指導するため	国際理解	リーダーシップの条件	世界のサバイバル
	武田建 (関西学院大学教授)	今井鎮雄 (神戸YMCA総主事)	新野幸次郎 (神戸大学教授)	武田建 (関西学院大学教授)	古木俊雄 (社会教育評論家)
記念講演					
カウンセラー	岩瀬弘昌 篠原慶弘 橋本歟 高畠澄江 林真紀 前田美智子 嘉納洋	江藤一明 三原寿 前田和穂 高畠澄江 嘉納洋 林真紀 前田美智子	江藤一明 琴陵容世 東敬三 前田和穂 稻鍵雄 嘉納洋 林真紀	井上昌俊 菊沢建明 安平和彦 山本修三 橋本知詠子 嘉納洋 林真紀 前田美智子	菊沢建明 口修平 東敬三 山本修三 橋本知詠子 嘉納洋 林真紀 前田美智子

第 6 回	第 7 回	第 8 回	第 9 回	第 10 回
1984 4.5~4.8	1985 4.4~4.7	1986 4.3~4.6	1987 4.2~4.5	1988 3.31~4.3
山田 静夫 森 滋郎	牟禮 米一 辻 忠夫	濱川金兵衛 金子太郎	松野 明 坂田元記	萩原 茂 内藤 尚武
今井 鎮雄	今井 鎮雄	梶浦 晴一 今井 鎕雄	梶浦 晴一 今井 鎕雄	梶浦 晴一 今井 静雄
深川 純一	江藤 一明	深川 純一	江藤 一明	深川 純一
歴史を読む	現代若者の心理	日本・世界の食料農業問題とバイオテクノロジー	もう一人の自分の発見	個人の理解
山口 光朔 (神戸女学院教授)	佃 範夫	山本 修 (神戸大学教授)	松原 泰道 (南無の会会長)	美崎 教正 (神戸大学教授)
現代を生きる	私の社会観	転換期の地域社会	心の角度をかえて日本を見る	地域社会と青少年
梶 真澄 (神戸市青少年文化研究所所長)	加藤 義和	高寄 昇三 (甲南大学教授)	萩原 茂裕 (日本ふるさと塾主宰)	田 中国夫 (関西学院大学教授)
未来を見る	卓球生活を通じて	高齢化とこれからの社会	宇宙的規模、地球的規模より見た21世紀の世界の動き	国際理解
岡 久雄 (三菱電気取締役) (LSI研究所長)	徳永 尚子	森 滋郎 (病院長)	奈良 毅 (東京外国语大学教授)	新野 幸次郎 (神戸大学学長)
				歴史と青年
				陳 舜臣 (作家)
菊沢 建明 細谷 誠宏 中井 煙夫 加藤 拓 橋本知詠子 嘉納 洋 林 真紀 河合 純子	菊沢 建明 細谷 誠宏 幸岡 清明 三木 明 橋本知詠子 関淑子 嘉納 洋 林 真紀 河合 純子	菊沢 建明 木村 敬 東三木 延也 武橋本知詠子 関淑子 嘉納 洋 林嘉納 真紀	菊沢 建明 篠原 成行 村田 伸一 鹿間虹美 橋本知詠子 関淑子 嘉納 洋 林 真紀	菊沢 建明 篠原 敬三 東三木 美明 橋本知詠子 関淑子 嘉納 洋 林 真紀



はじめに3人の人の愛と情熱でRYLAは創造された。

そして2人のディーンと共に魂が入れられ、各年度のガバナー、委員、カウンセラー等多くの人の奉仕の業で継承されていった。

そして……………10年。



記念講演の為に寸暇をさいて………  
陳舜臣先生



心のこもった準備、もてなしに感謝  
余島センターに記念品がおくられた。

# 生活の断片 10 年

A.L.Y.A 回を振り返る

## 第1回 R Y L A



A.L.Y.A 回を振り返る

熱く燃えたRYLAでした——。研修室がまだない頃で食堂で講義を聴きました。

## 第2回 R Y L A



経験を通じて、野外活動の先輩鍊方さん、八尾さんから指導を受け採集した野草、貝、魚などで野外料理に挑戦しました。

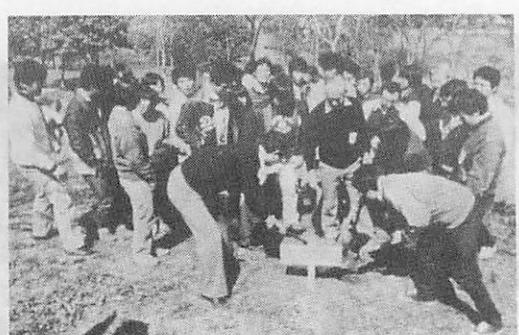
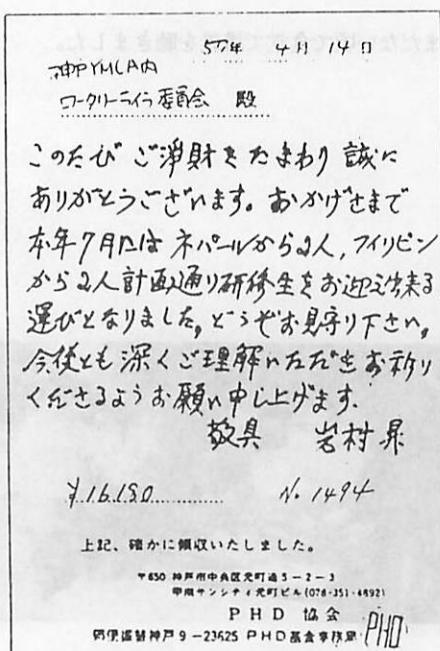
## 第3回RYLA

平成01年 梅雨の季節



雨にたたられたRYLAでした。キャンプファイヤーも室内で焚き、記念植樹も雨の中……。しかし、雨は雨なりに工夫されたプログラムによってスマートに運営されました。

## 第4回RYLA



ロータリー平和賞を受賞された岩村昇先生をお迎えし、“生きるとは分ち合うこと”のお話に感銘を受け、参加の方々が自発的に集められた献金をPHD協会に捧げました。

## 第5回RYLA

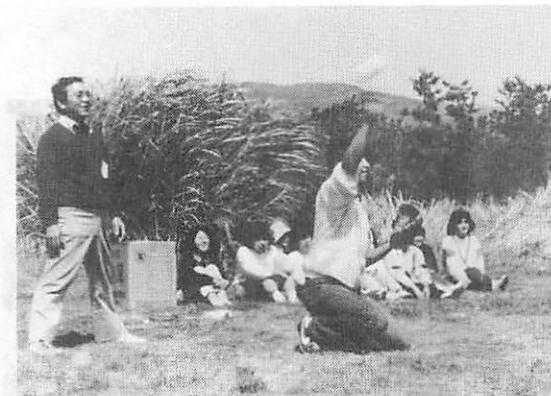
A J Y 第5回RYLA



セミナーの企画、運営をはじめて四国で受けもって下さり、大変御苦労をして頂きました。これより後は四国と兵庫と交代で当番制になりました。

## 第6回RYLA

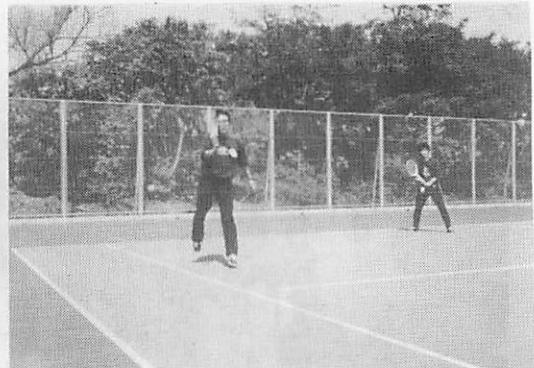
A J Y 第6回RYLA



班対抗の野球の試合をし、選手も応援団もおおいにハッスル!  
グループの強い団結が出来ました。

## 第7回 RYLA

A J Y 第7回 RYLA



カト吉ちゃんの加藤社長、卓球世界選手権優勝者徳永尚子さんなど多彩な講師から実践人生哲学を学んだのでは……

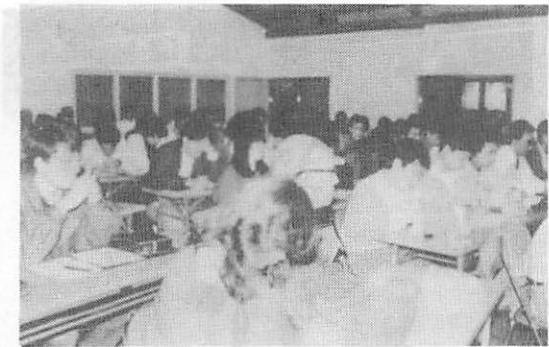
## 第8回 RYLA

A J Y 第8回 RYLA



思索の時には一人静かに自分と向き合い、夜のキャビンタイムには阿波踊り？にハッスルしました。

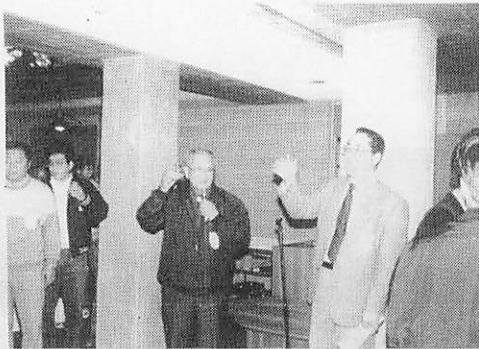
## 第9回 R Y L A



81歳と云う御高齢を感じさせない松原泰道師の語りかけは、若者に感動を与えたようです。

## 第10回 R Y L A





1回から9回までの卒業生もRYLA10周年にお祝いに駆けつけて下さり、旧交を暖めました。  
RYLAの輪が広がってRYLAの心を持つ人が多くなればいいナ………と願っています。

氏名	〒	住所	TEL	推薦クラブ
酒井みお	654	神戸市須磨区離宮前町2丁目1-8	078-731-3152	神戸垂水
福田美典	669-14	三田市上櫻瀬549	07956-9-1037	三田
森下睦子	656	洲本市下加茂2丁目4-39	0799-22-3890	洲本
大島美穂	675	加古川市山手3丁目33-11	0794-38-4395	加古川中央
広田順子	673-04	三木市福井2丁目12-35	07948-2-1192	三木
番所寿美子	656	洲本市宇山1丁目4-6	0799-22-1666	洲本
前田桂子	673-04	三木市別所町朝日ヶ丘35-107	07948-2-5064	三木
田中愛深	675-13	小野市大島町38-8	07946-2-4878	小野
西尾美香	675-13	小野市片山町1402-1	07946-3-0072	"
高木克恵	679-21	神崎郡香寺町溝口	08548-2-2281	神崎
岡田多恵子	661	尼崎市塚口町3丁目4-32 マーガレットハウス	06-426-1068	尼崎東
中川仁美	665	宝塚市安倉中4-14-18	0797-87-1874	宝塚武庫川

## 第10回RYLAセミナー運営委員会

顧問 梶浦暉一(松山)

今井鎮雄(神戸西)

### 担当諮問委員

松野 明(松山東)

辻 忠夫(豊岡)

### R.I第267地区

江藤一明(小豆島)

片山鹿之助(松山東)

本久善一(高知北)

松田博仁(北条)

鈴木喜弘(高松)

井上修(今治南)

### R.I第268地区

篠原慶弘(姫路)

三木且視(龍野)

深川純一(伊丹)

森茂一(尼崎北)

鹿間虹美(高砂青松)

土居丈治(神戸西)

村田伸一(明石南)

帽田次郎(姫路西)

下岡節三(川西猪名川)

小池弘三(神戸須磨北)

安平和彦(姫路)

### カウンセラー

菊沢建明(伊予)

橋本知詠子

篠原成行(北条)

関淑子

東敬三(神戸東灘)

嘉納洋

三木明(姫路)

林真紀

## あとがき

委員長 篠原慶弘

第一回のときに委員をお引き受けして、もう10年になると思うと感慨も一人という所でございます。もう第一回のときは、全く無の状態でしたから泊り込んで準備万端整えてなお不安で一杯でした。

今回は第10回で、手馴れたものとはいえ、10周年の区切りをつけることに苦労がありました。一応10周年の記念式典を入れることになり、記念講演に陳舜臣氏の快諾を頂けて、さて人集めをどうするかでデッドロックに乗りあげてしましましたが、内藤ガバナーの助け舟で、現地で地区青少年委員長会議を召集することになり、井口委員長にお願いして、フレームが出来上りました。そして天候にも恵まれて、成功裡に全プログラムを終了できて感謝に耐えません。G内藤、PG辻、PG今井、をはじめ、事務局の京極さんそして委員の皆様、カウンセラーの皆様のご指導に厚くお礼申し上げます。

報告書が出来上りましたので、お届けします。参加の若い方々にロータリーの愛と熱意を十二分に受け止めて頂けた感激、そして青少年委員長会議に参加のロータリアンの方から、「ロータリーに入って永くになりますが、ロータリーが、このような青少年活動を10年もしていたことを知って感激でした。来年は是非全期間参加させて下さい」と熱い握手を求められて感激でした。ライラをやってよかったの一言です。ありがとうございました。

昭和63年3月31日～4月3日

主 催 R.I 第267地区  
R.I 第268地区

RYLA運営委員会

開催地 西日本青少年野外活動センター  
(神戸YMCA余島センター)